

吉丁蟲

「また、それでなくつて。」

矢野は續けた。

「欄干の百日紅が、燃えるやうに見えるまで、巫女の袴なぞが目につくわけはない。枕にも行燈にも、何だか又お目に掛るやうな氣がしながら。」

鴻仙館を出て、卍のやうに家が建込んで居る道を抜けると、直ぐに、塔の立つた總湯の前まで、彼處にも一つ石の井戸がある、
勿論さうぢやない。」

「まだ、ほかにも一つあるですよ。どれも、温泉が湧くつもりで鑿り掛けたのを、其のまゝにしてありますんで、穴が危いから、井戸側はまあ、圍ひ見たやうなものなんでして。」

「ぢき見つかつたよ。」

道を問ふほどの

事はない。總湯の建ものを一廻りすると、もう向うに兩方へ波の打つ波止場が見えたからね。――だゞ

つ廣いなあ、彼處は　　―　　廣く見えるんだらう。
急に又餘所の島へ着いたやうで、そこらをぶら／＼
して居る、湯治客も、五人七人はあつたらうけれど、
皆が吹き流されてでも来たものらしく思はれたのは、
玄關が出たり、棟が引込んで居たり、軒並の揃はな
い温泉宿が、一軒づゝ、棟を揚げた離れ島のやうに
見えたばかりでない。　　―　　つい三階の窓から覗
いた井戸が、廣場の眞中どころに、見た目の雑草も、
石の缺けたのも其のまゝで居る、三人の婦が、フィ
ト消えたやうに影も見えない。　　―　　早い話しが、
鬼灯に化けて、おの／＼紅白の水引を背負つて、内
側にくつついて隠れたんだらうぐらゐに私としては
感じたんだよ。

　　―　　處が、石ころを踏んだり、草をまたいだり
で、とに角、井戸へ近づかうとした時だ。　　―　　總
湯の横の黒塀から、　　―　　木戸があつた　　―　　
そいつが急にあくと、鴻仙館の女隠居が、ものに
慌てたやうに出た。出た、と思ふと、引続いてお巳
代が出て　　お巳代なんぞは、肩を引ながら
れたやうに、私に一寸辭儀をすると、横になつて角

の物置藏らしいのと、黒塀の廻り角へ、隠居について駆け込んだんです。――

―― はてな！

いや、はてなぢやない。あゝ、あの見當か、二階から見て知つて居る、すぐ塀外の船着場だが、何か事が起つたさうだ。――女隠居の周章しさはで、借下駄で、ぐわた／＼出掛けたのさ。

出掛けると――あの騒ぎだ。いや、騒ぎぢやあない、凄いほど滅入り切つてる。

(放せ！)――

波が淵にかはつたやうに、陰氣に一喝を啖はしたつけなあ。金兵衛。――金兵衛忽ち俊寛となつて、渚に腰をついた。

もう、其處に居たのさ、金兵衛さんは。――
と、矢野は運轉手を見向いたが、

「ほかに男衆も居た、女中も二三人、客も四五人。庭のうちには下座敷の縁から、伸上つて

中には籐椅子の上に立つて覗いたのもあつた。

（お危い、旦那様、お危い。）と、いひつゞける

隠居さんは涙聲だ。女中たちも口々さ。（危いな

あ。）お客連も口を留めない。が、待てよ、しば

らく。

といつて、片腕をついた。はずんで持った猪口の傾いたのを、眞直に取つて直すのに、女房の酌するのを、ぐい、と二つ、続け状に受けて、吻と息した。

「中尉ともあるべき軍人が、其のお嬢さんに乗せて、一人で短艇を漕ぐ、と云ふのに、宿の主婦、料理人、風呂番、女中大勢、客まじりに息精を揉んで、黒く、いや青くなつて、危い、危い、とは何事です。遊場の波を漕ぐんなら、わが可愛い娘だつて、中學生にでもまかせて置ける。――中尉は敢て、自分で狂人だと斷つては居ないんだ。

本心としたら

尤も、その人は本心なん

だから、小兒に風車をまはして見せるやうな氣で居るものを、蟻の如くに集つて留める
怒る
のは當り前だ。

然も、その人は、サ、其處が危い處なんだが、背後に軍刀が光らしてあつたんだからね、無理に留立をされては権威にかゝはる。また、見て居るものにとつては、そいつが尚ほ危険です。短艇を漕ぎ損つて轉覆るより、遠く漕ぎ出した處で、小兒を刺貫いて、返す刀だ

蒼海原の眞中で、白晝に腹を搔切る、或は潔からう。が、何うも、あの白い胡蝶が、ぱつちり目を開いたやうな、うつとり上品な女の子が、中尉が抱き込み、抱き込みして、うしろ漕ぎにし、自分の方へ向けようとするのを、振向いて
恚う皆な
の方ばかり、まばたきもしないで見詰めたのが、留めて欲しいより、悲いより、覺悟した、あきらめた、と云つた様子で
隱居が鼻聲で念佛を唱へると、女中たちは、しく／＼泣き出した。「

「聞いては居ります、悉い事は知らんのですが、
はあ成程。」

「――― 放せ、で、へい、ギロリと睨まつせえ
た時は、洋刀がピカリと目を刺したで。」
と目脂を拭いて言つた。

「誰しも、それだよ。客連中には、（警官は、
警察は、）と云ふ聲がする。（電話は
掛けましたが、）と料理番が言つてるだけだ。」

處で、金兵衛が、綱を切られた俊寛で、尻をつい
て手を離すと、波を煽つて、短艇が出た。潮は上つ
て居るし、棧橋を刎越すやうに角度を激しく忽ち灣
を切つて乗る。まるで海神の犠牲に攫つて行くやう
ぢやあないか。

隠居が、珠數を出して踞つて拜んだぜ。金兵衛も
拜んだ。女連も皆手を合はせた。私も目を伏せて念
じた、が、其の隠居の珠數や女連に對しても、私は
内心少からず忸怩とした。此の時の心は、三人の婦

の生命にかゝはると云ふ巫女に對して、雀を抱いたやうな勇氣の凜然としたものぢやない。喧嘩づくに一太刀浴びても、生命を賭して、お嬢さんのために戦ふのが人間の道であつたかも知れないからなあ。

と云つて、巫女の言をきいて、胸に抱いた活ものを我手で井戸へ投込むを斷然拒絶したほどの元氣は出ない、あの場合。

こゝが今でも、情として、道として、人間の迷ふ處だと思ふ。」

額を壓へた手を拂つて、矢野は、やゝ、うつろな笑を漏らしたが、

「私ばかりぢやない、皆だつて、其の心なきにしてもあらずだらう。知らん顔の青い小浪に、黒い影を映して、白け返つて立つて居た。」

その場合だ。生死の隔ての潮を幽冥から敲くやうに、タゝゝゝと發動汽艇の音がすると、水には紛

れるが、緑色の屋根船が一艘顯はれたよ。

見るとだ。心あつて今は沖にたゞよつて居るらしい短艇を指して、波を大吸ひに吸つて近くなる。――其の舳に、白衣で紅い袴

あ、井戸を覗いた女だ。續いて、黄薔

薇の島田鬘、艦に居たのは、ドレスのそれです。眞中に、これが妙だ。按摩の良勘が頭を据ゑて乗つて居た。な、金兵衛さん。」

「目に見るやうだで、旦那。

「あれを忘れて堪るものか。お剩にひた／＼と船が寄ると、良勘めたんとなつて、短艇のお嬢さんにお叩頭をした。あの頭が、兀げた烏帽子ほどに光つたぢやあないか。これは頼もしい。で、泣むしの平判官 隠居の康頼はじめ、忽ち那須與一となつて、棧橋の尖端へ驅出したぜ、見給へ、紅の袴が触へすつと現はれると、立つて袖を伸ばす嬢さんの手を取つた、島の上の白い雲から天降つたやうに思ふ。

中尉は乗らなかつたね。挨拶を何うして、どんな相談が出来たものだから、嬢さんが乗移ると、両方の船が、沖で並んで、今度は紅い袴が船で来た方とは反対に、棧橋から向つて右へ。

筆染崎、唐島、臺ヶ崎、瀬嵐の岬など名所の續く、西灣で、即ち近くは此の白濱、遠くは中島川に溯ると金兵衛たちが交々言つた。

「で、沖へ小さく緑の船が綺麗な吉丁蟲に見えて、遙な島陰へ波を飛ぶやうに入つて行つた日の暮前だつたさうぢやあないか、中尉さん唯だ一人で、短艇を漕いで、裏棧橋へ歸つて来たのは。――

「おつしやる通りで。―― 食事も最う濟ましたちて、晩飯も食らねえであの、だんまり様さ、尚の事、口を利く取つかゝりがありましたねえ。ほれ、給仕にも、誰も出ねえもんだでね。けんども、何となく、不斷よりは目の色が柔こいやうだで、女中が、へい、恐る恐るだけんど、（お嬢

様は、）ちて、密と聞くと、（遊びに行つたよ、
知合へ。）で其切また書物だでね。――それ
でも隠居どもは氣にするで、早い處が、同じ短艇に
乗つて居たもんだ。

良勘 按摩を尋ねるが早かんべ、で、あれが住居
へ、へい、人さやつた處がや、出たきりでまだ歸ら
ねえと云ふもんだで、そんなら、あの發動汽艇を搜
すかなど、相談打つてる、八時さがり、かれこれ九
時ごろでがしたべいよ。

館の表玄關の處へ、あの嬢さまの小さいのが、ツ
と来て立たツしやつた。立たツしやつたかと思ふと、
へい、（唯今。）ちツてね、學校から歸つたや
うに、衝立を越して、廊下をひいらひら行かした
さうで。や此の時は、帳場中寒氣がした、
と言ひますだ。あの神かくしが、スツと、へい、門
の大櫓の梢から下つた氣がしたちゆ、うだ。

其の癖、路が入組んで、總湯へ廻る、卍角の、何
處か、其の暗い處に、送つて來たものが、ぢつと、

此方を見て立つてござるやうな氣がするもんだで、さしあたり、二階より、其の辻の方へ、皆が氣を奪られて、顔と鼻が集ると、山の風が寒う吹込んだちげな。陰氣にのう。

すとすとん、がちん、がちん 早や其處へ、何と、軍人さまだ。装束は速かで、最う軍服に着換へて、劍をつけさした中尉殿、嬢さまの手を曳いて、ブラ／＼と出て來さしたわ。自分で、靴を取らつしやるで、女中どもが慌てて立つと、（構ふな可々）軽い機嫌できれいな手袋を箆めた平で、ひよいと嬢様を抱上げさして、其の時さ、莞爾と笑はつしやると、嬢さまも嬉しさ、うに、頬邊を寄せ合つて、暗い大櫓の下を出て行かしたものだげで、え、旦那。

旦那が浴室で、わしらが流して進で居たあの間の事だてば。――あの後で、やつとお晩飯だつけの、いや、よく寝さした。――

「寝たとも、――午過ぎから、ぐつすりだ。」

一時に疲勞が出たんだ。夜一夜狸にからかはれて、朝からも氣を揉ませられ續けだからな。

いまの中尉さんの其の話は、雑と其のおそい夕飯の時に、私も聞いた。が、人の事より、我が事だ。

「ほかに手掛りはなし、好かない奴だが、平家の船で、ぼる琵琶でも引きさうな、あの凹入道が、何か知ら様子を知つて居ようと、早速口をかけて貰つたが、此奴が居ない。」

「居ない筈で、あれつきり歸りましねえとの。」

「それで、へい中尉殿も。」

掛蓑

「其ツ切分らないんだな、可、よくはないが、ま、待てよ。軍人の行方の知れないのも、私がここで酔つてるのも、一つ狸の所業らしい。」

いや、飛でもない。

あゝ、狸は飛びも

勿ねもするが、待てよ、狸ぢやあない、婦三人の井戸のせゐだ。

私は、あの船が二艇、島に見えなくなつてから、もう一度、井戸の處へ引返した、見す／＼沖へ出て行つた紅い袴が、却つて、其の底に、影でも映るやうな氣がしたので――如何にも、温泉をほり掛けたあとだらう。そんなに深くもない底に、石ころ交りに草が生えて、湯の香がする。が、何にもない。

鬼灯どころか、あの邊ぢや雀の聲もしなかつた。

が、不思議にカタ／＼カタと發動機の音が海から底へ響く氣がする。――あの三人で、何を覗いて立つて居たらう。

―― はゝあ、婦が三人で、井戸を覗く光景を、
然うだ、私に見せるためだ。一人が何う
見ても神巫の姿をして居るにつけても、―― 夜
中の（長太居るか）につけても。――

―― 忘れもしない。其の事があつて後、いま話
した、花屋の二階に三つ並んだ女の顔を見て、あと
又四五年、それも記憶から遠ざかりさうな
頃、ふと奥州から手紙の來た事がある。

みちのくの穂屋の蔭より――

穂屋といふのは、ある意味で路ばたの丘の祠、野
中の森の妻杜などの事です。勿論男の書だが

われらの教祖のあふせによれば、賢兄――

これは他人行儀でない わけが

ある。

われらの教祖けうそのあふせによれば、賢兄けんけいは、女人にょにんの命いのちを顧みかへりずして、雀すずめを助たすけられたるよし。不善ふぜんとは、如何いかんか、不仁ふじんをばなされたり。其その心こころを改あらためられずば、子孫しそんは必ず斷絶だんぜつせむ。

われらの教祖けうそに宥恕ゆるしを請こはれよ。

(案あんずるに、此この状じやうをうつし讀よむ時とき、矢野やのの口くち調子でうしまじりたるべし。)

こゝに名ながあつた。

はやのすゝきのかげにて、

安場嘉傳あんばかでん次じ。

と、久ひさしく打絶うちたえた、が、少年こどもの時ときの塾じゆく朋輩ほうばいで、さま／＼な事ことをやつた男おとこでね。おそろしく眞面まじめ目で、馬鹿ばかにとぼけて居ゐる。故こゝ

郷やうで醫師いしの弟子でしにもなれば、東京とうきやうへ苦學くがくに出でて來きて、俵くろまの曳子ひきこ、新聞しんぶん配達はいたつをするかと思おもふと、其時そのじぶん分の事ことだ、すぐ巡查じゆんさになれた。――忽たちまちやめて、地方ちほうの新聞しんぶんのたねとりをして居ゐるかと思おもふと、運送うんそう屋やを

營んで見たり　そのうち催眠術に凝つて、
素人療治をはじめたつけが、やがて、火災保険の外
交員。　　一年に一度ぐらゐ　　以前は尋
ねて来て、身の上ばなしをするのだが、外交員
の時が得意だった。忘年會の餘興に、大おちを取つ
て一座を驚倒せしめたと言ふ。　　何だと聞
くと、若い藝妓の緋縮緬の長襦袢を
貸した。」　　よく

と、いひかけて苦笑したが、

「素裸へ着込んで、豫て用意の飴屋の盤臺さ、灯
を入れた紅提灯を十六張、おいらん簪に盤臺にさし
廻して、頭へのせたわ。合圖で大廣間の電燈を一齊
に眞暗にすると、襖を左右へ押開いて、太鼓を敲い
て、鬱紺の扱帯の尻を振つて、テテンコ、テンコ、
テンコ、ありや、月の圓さと戀路の道は、と練つて
出た。紀伊國も、春雨も手心のあるのをやらずに、
飴屋のめちや踊と云ふのが山で、後段、かつぼれに
變つてからも、頭の提灯を焦しもしない、と生眞面
目で居た人だから。」

あぶな
危いよ
火災保険の勧誘は、むづかしか
らうと思ふと、果して留めた
と云つた男
だから。――これは、奥州の何處かで、神職に
なつたんだらう。

かんぬし
神職と云つても、何か、別途の神に事へて居るの
だらう。――安場――然ういつた男の事だから、
活計のために、とばかりで済まされないのは、一種
の警告状とも云ふべき中に、雀の事がかいてある。
見ると同時に、古井戸が瞳に映つた。

あゝ、あの、もの凄いい、不気味な巫女に附随して
居るんだな。然うか、子孫が絶えるのか、
崇つて居るのか。むゝ、呪詛はれたんだな。

よし其の呪詛は、はづれたぞ。これで
も、私には家内がある、――

やの
矢野は運轉手に銚子を向けたが、依然として猪口
を手にしなから、しばらく途絶えたビールに代へ
て、硝子盃に蓋する硬直な手を押のけて注いだ。

「すでに、其の雀の頃から、約束はあつたんだ。が、はなつから子を持たうと思つたための女ぢやない。成程、子孫は断えるだらう。此の年をした、今に於て、蚊とんぼ程の子の影もないんだから。」

渠は大人氣なく見ゆるまで、昂然としていつた。

「しかし、年紀だ。」

寝られない夜の寂

しさに、ふと、ものを思ふ事はある。かりにも三人の婦の生命にかゝはると、巫女のいふのを、反撥した行爲の、善か、悪かは知らないが、欲しい子孫がそのために断えても、後悔は断じてしない！ 安場の讖言は焼棄てた。

が、つぎつぎに、其の巫女、其の安場などは、前刻から言つた、オシラ神に奉仕する一黨だと云ふのが、よく分つて来た。つい、其の矢先に向つた目的が、この和倉の井戸の三人の婦の姿だ。

其の姿の消えたあとの、私は―― 今、たつた今其の井戸を覗いて立つて居る。 とする

と、一寸不思議な気がしようぢやないか。

巫女に通力もあらば、あの珠数が此の井戸の内を
二巻きして、其の中に、猿、蛇、百足、鷲、貂、蜘蛛
も、釘も鋸も、ついでに洋鐵屑も硝子の缺も顯はれ
よう、と思ふのに、何も無い。其の筈だ。が、却つ
て頸首を、ぽつと撫でて、頬に觸るやうな、良い薫
が、磯の香を分けて、ほんのり通つた。

湯氣をさへ分けてだね。

あの廣場は、づつと出はづれが波止場だが、總湯
から向つて、井戸の右手に高い石垣について、上
が堀で、石垣と堀との間が、づらりとすかしになつた
のが、角地面を取つて、波止場から右手の濱に押廻
した、大きな三階建の旅館があるね。」

「朝六館でや。てうろく、てうろくとも言ひます
だ。」

「土地の人ぢやありません。以前、何でも、越前、

麻生津の出ださうで。其處の名所の朝六つの橋　――
え、明六つには、冬の夜半でも、もう其處ばかり薄あかるい處ださうで。―― 自動車ぢや、夢中で通つて來たですが、それを宿の名にしたのさうです。」

「其處の板壁の透間から、牡丹の花が見えたんです　―― 紅白の。それも二三輪、然も井戸からは、づつと遠い。」

堀の角を折曲つた庭に咲いたらしい。が、斜つかけに直線に透いて見えたんだね。氣の所爲だらう。まさか、其の牡丹が香つたわけでもなからうし。それに鉢植だと思へば、別に見る氣もしなかつたのだが、其處で見えたのは、ほんの牡丹の裊ぱづれで、向うは花畑で見事に咲いて居るらしく思はれた。

いゝ景色だね、波止場の處は　―― 磯馴松の中に處々に、ばら／＼と巖があつて。―― しかし一方は直き畠になるが、其の間にはテニススコートの

眞似などがしてある。

其處へ行くと、もう正面だ。黒い堀の裾に、花辨が觸りさうに、紅いのが磯風にちら／＼と見える、見事な牡丹畑らしい。――其處を覗いた。堪忍してくれ、よく覗く男だが、石垣に足をかけて、すかしの竹を力に伸上ると あゝ、皆目を塞いで聞けよ、うっかりすると目が潰れる
大變なものを見た。

――十五疊ばかり、青々とした廣間で、無地の金屏風が立つた。――其處が出入口になつても居ようかね。床の間は見えなかつたが、正面に黄金金具を打つた、塗り衣桁が立つて居て。

「えゝ、其の上に――女の生首でありますか。」

と言つて、掌を拂つた運轉手が、ふと目を開いたが、忽ち又掌で覆ひ隠した。見ると、おとなしい女房も、金兵衛も、おなじやうに目を隠して居たのである。――酒の酔が然うさせたか、

話の勢ひに乗つたか、知らず。 「目を

塞いで聞け。――悪くすると片目潰れるぞ。」
矢野の其の聲と齊しく、三人の手が其の兩眼を押へたのであつた。

「いや、色ある衣と思はれる、うつすりした袖褻に、新しい加賀蓑の長いのが一杯にかゝつて居た。

主は、と思ふ其の顔は見えないで、皓い膚が見えた。眞白な長い蛇が、四筋、羽二重か、緞子か、濃い萌

黄の敷蒲團の上から、横にした琴を搦んで居る。――と云ふのが、ふつくり蒲團が高いから、抱いたので。抱いたのぢやない絡つた形で。――

十三の絃と巻合つた、其の四筋の白い蛇と驚いたのは、湯から上つたまゝだらう。婦の手足

だ！ 伸々と庭の此方向で、何の事はない、寝ながら琴を脇息に使つたのだね。

白牡丹の蒼が一輪、葉ながら、秘密を封じて、ぴたりと、覗く目に當つた、と思へ。人氣勢を感じたらしく、ずる／＼と手足が動いたが。」

ハツと心着くと、矢野は、自分でも何時の間にか、片手を額に當てて、話しながら目を蔽うて居るのに心着いた。

とともに、いまだ三人が、目を隠して居るのを見た。
同時に土間が暗かった。

串戯にも、恚ういふ事をするものではなからう。
四人が一所に目を隠す。――矢野は人知れず悚然とした。

爾時である。

わつと叫ぶ諸聲が街道の兩方に湧起つと、中島の方は地に響き、白濱橋の方の空に揚つた。其の中島の方から出掛つて、睨を覗く、八九人の頭が、あ慌しく、後へ引込んだと思ふと、

「やあ、暴れ馬が三匹、――天と宙と地面！」
と第一番に運轉手が叫んだ。ニくと、突立つと、

見ると、同瞬間の不意の視覚は、時として、ものを三つにするらしい。

が、殆ど事實である。まつたく天を鼠色の雲が馳つた。中空を其の影が飛んで、地をまつくらに、橋の堤防から逸れて来たのは一頭の黒馬である。

ものこそ、暗くなつた店頭を、雲と、風と、軽い埃とともに、前脚が軒を抱いて飛ぶ時、鹽俵か、石灰か、五俵ばかり粉を積んだのが、濛々と、ハドンを壓して、煙つた。

たとへば一所に堰留められて居たやうに、みな草鞋穿きの人数が二十三人、酒にも肴にも目もくれず、おの／＼叫び聲を上げて其のあとに駆け続く。

大畝りする道の二本の松蔭へ、馬も人数も隠れた時、軒前に立つた矢野に、女房が呆氣に取られて、押し並んで居たのである。

近々と、客の胸、餘り袖の附着いたのに、女房は

顔を赤くして衝と退いた。

「引上げ時か。」

矢野は其のまゝ海を見た。

「もう、晩方だ、波は白い。」

「いまの騒ぎと、旦那の話で、一時に酔が醒め

た。」

そのくせ運轉手は、算を掬んで居たが、硝子盃の
雫をうつむけて切つて、

「四十メートル以上でしたな、あの速度は。」

「おかみさん、勘定を。」

「

逢魔ヶ時

「金兵衛は何うした。」
時におぢいが居ない。女房も知らないのである。

「狐に馬を乗せる、と云ふたとへがあるです。あの、よたもの、あばれ馬が引攪つて行つたんでせうな。」

人々の心には、飛ぶ鳥の勢ひが鱗爪にかけて、おぢいを屋の上へ消したほど、其のこゝに見えないのが急遽を極めた。

それとともに、卓子のぽかんとした、寂寞さは度を超して、酒席の一人が座をはずしたやうなものはなかつたのである。

喧噪のあとの静肅さに、機音がまた聞こえる。

これから歸る旅の宿は、細君が待つ我が家でないと同時に、東京にひとり其細君を「お澄をばさん」

とする處の、「好きな」芝門前の師匠の娘の影もさゝぬことを矢野は思ひ知つたらう。

「おかみさん、熱くして、もう、一銚子——
一銚子だけだから。」

「串戯ぢやありません、先生。——東京の火事と同一で、馬の騒動と云へば、此處等で驅出さない奴は一人だつてありませんので。待つていらつしやる事があるもんですか。」

運轉手は土間にも歸らず、軒さきに立つて雲を見た。

「それに空模様が些と變です、——おともしませう。」

「別に、そのためではない、私も少し里心がついて来たんだ。一杯やらう。きみが一所だ、天氣の方の心配は少しもない。それに親仁だつて、大船に、いや、自動車に乗つた氣で飲んだんだ。」

「――こゝで見棄て了つては岡場所の俊寛あはれだからね。」

「――ありがたい、湯が拂つてると見えて、もう爛が出来た。」

矢野は今度は茶碗へ注いだ。

「まあ、お掛け。それに肝心な事がある。すぐ其處なんだらう。合歡の花に、其の衣桁のお姫様のある處まで歩行かうぢやあないか――いや、歩行くよ。まあ、お掛け。」

「私も可なり頂戴しました。一つエンジンを掛けて見ませう。」

ハドソンの轍へづつと寄る、靴を、コツンと留めて突立つた。

「あの、おぢい、あ、あんな處から驅けて來やがる。」

「あれ、まあ。」

思ひがけない、正反對の橋の方からだったので、
矢野も連れられて軒へ出た。

出た、出た、風は吹出した。が、あんなにも吹迷
はさるゝものかと思ふ。酔つたのが急ぐから、据腰
の突張脚して、よた／＼ふは／＼と、野分に淺瀬を
渡るやうに、とぼけた形で驅けて来て、

「やあ、旦那。」

傍へ寄る間も、もどかしさうに、自動車のヘッド
へ、ぬいと立つて、

「別嬪の神様、見届けただ。引抱き申すは勿體ね
え言はつしやるで、おらが、へい、ハイカラで寫し
取つた。」

此の通り、ほれ、正のもの、正のもの。」

成程、功名なのりに急いだらう。半紙を一枚、引
搦んだまゝ、抜いたなりの矢立を握った片手で、片
端を持添へて、一度よろけながら踏張つたが、ぐつ
と押開いて、高々とさし翳した。

「此の通り。此の通り。」

矢野も運轉手も無言で寄らうとした瞬間である。

白い風がバツと當つて、金兵衛の手から姿が飛んだ。

眞横に、ふツと自動車の屋根の上、およそ四五尺
の空に、吹靡いた紙の撓ひ様が、小さな被衣ですら
りと立つと、

ー
ー
やがて

色はあせたが、茜木綿の六尺ひとつで、金兵衛
が、布子も、股引も一からげに、黒い裸體になつた
のを見ると、ともにあるものは恰も海の中に沈んだ
やうで、

自動車は唯其の底の巖の青い洞窟かと疑はれる。

和倉自慢の相良運轉手が、ハンドリングで、飲屋から操縦したハドソンが、白濱橋の弓なりの真中で、高く立すくんで居るのであった。――

一度、此の自動車の上に、吹かれ立つて佇んだ、金兵衛が、神のうつし繪と稱へた、白紙の被衣の姿は、見る／＼斜に舞上つて、飲屋の草の屋の棟、およそ一丈ばかりの空中に、二三尺、三四尺がほどづゝ、舞上り、舞下りして吹漂つた、が、それも束の間で、細い旋風が其の背戸を捲いたのであらう。吹切らるゝ木の葉が、紙の裾にばら／＼と飛散つたが、其の一枚をも交へず、すつと一文字に高く上り、白くのぼつて、凡そ人の目の仰向けに届く高空の、早や、結び、解け、纏れ、流るゝ、暗い雲間に昇ると齊しく、矢のやうに颯と切れ、返照ヶ嶽と申して、連山一帯の中に、群を抜いて聳えてた、山際の森に、白い不知火となつて、ちら／＼と消えた。其の遠方の青葉若葉も、もう眞暗に、黒雲は海の手から魔鳥の翼に似て馳せ蒐る。

早く勘定を済ましながら、―― 恠くては一層

其の氣になつたらう。オシラ神が其處にと思ふ、堤防の中途まで、歩行かうと、矢野の云ふのに對して、

「先生、不可んです、ばら／＼と來ました、大粒が。――」

合歡の蔭で停めます、と云ふのに従つた。が、金兵衛は度肝を抜かれたらう、呆氣に取られたらう。紙の怪しき行方に、伸び上るだけ伸び上つたあとを、ぐしやりと潰れて、たゞ脚のない蟹の如く、街道に踞つたのが、口も利かないで、助手の席へもご／＼と潜り込む。

「お入り――同じ事だよ。」

けれども、金兵衛は、黙つて、大がたの古鳥打帽に手を掛けて、揺ぶつて、叩頭をしたばかりであつた。

蛙のやうな聲は誰そ。

「ぎやつ。」

無い。

「ありません。先生、見えません。」

「一叫を揚げた金兵衛の背へ、のしかつて、右手を見廻らした運轉手が、もつけな顔して、

「捜してみませう。」

同時に、其の茶の中折帽を引脱いだのは、もう、どしや降りになつた雨に、不用意の用意であつたと見える。

「捜す處はない、合歡は此處にある。」

ほのかな其の花の面影は、大雨の簾にかくれ、吹摩く葉は、黒髪くろかみの如く湖の面へ亂れて居た。

「此の降りだ、もう可からう。」
革紐を引いて、厚い硝子を閉じた。風をよけ、風に背いた此の扉さへ、雫は瀧を吹き掛けた。

「こんな事もあらうかと思つた。いや、かうなるのが眞個かも知れない。」

「何故です、先生。」

「まあ、行れよ。とに角急がう。」

前途の橋は、ほの白い船の浪を乗るやうに架つて、灰汁とも、鼠とも、欄干に亂るゝ雲の中を、打ちかゝる漣は橋袂に三角のしぶきを上げて居るのであつた。

一氣のスピードは其の風雨の中を、橋の中央まで乗上げた。が、づつんと水に沈んだやうに留まつたのであつた。

「大丈夫か。」

矢野が、思はず聲を掛けたのと殆ど同じ時と言つても可い。

見よ、前途の堤防は、打ちかかる波で凄じく白泡を流して居る。最ど其の低いのを、湖へ煽つて越すのに、處々むら消えの隙間が見えたのも瞬く間で、縦一條の道は忽ち飛ぶ雪、舞ふ雪の曠原となつて、

次の瞬間には、海潮も湖面も、一様に大車輪をつらね重ねて、泡の渦の數々が驅廻る。

勿論、背後の堤防も、殆ど倏忽の隙に、おなじ状態になつた事は言ふまでもない。

あまつさへ、降りに降る雨は、溢れ漲る水を叩いて、一度に幾何千の千鳥の足あとなりに波を刎上げ攪亂す。

やゝ遠見に、一叢の樹立に包まれた、いま其處を出た、飲屋の状は、忽ち焼亡し盡すかと、棟に雨煙が立騰る。

並木の白楊樹は、前後に亂れ、左右に揺れて、一樹づゝ一躯の惡鬼が、藍色の蓬髪を石橋に振被つて、其状、狂ふとよりは踊るのである。踊りつつ亂れつつ、粉しぶきにぶつかる波と雨を、シユツ／＼と漏斗形に青い呼吸を噴いた。

「先生。」

「相良。」

運轉手は、此の時、自ら其の姓を呼んだ。

「相良一人でありますれば、思ひ切つて直進するのであります。」

「危ねえ、うんや危ねえどころでねえ。危ねえ。」

両手で肩を押へるやうに、おぢいが留めて、

「道も波も區分がねえだ。一寸でも踏違えたが、それが最後、海へ逆ニ斗を打つでねえか。」

「運轉手さん、かういふ事は時々あるかね。」

「秋の末から、冬分は、白山嵐が屢々です、が、然ういふ時は運轉しない事になつて居ります。尤も二度ばかり、此の暴風雨に出逢ひました。二度とも客人を送つた歸途で、しかも夜分で、單身ですから盲滅法に突切つたです。しかし暮切らないのに、此の模様ですから朦々ともものが見えますだけに却つて

心が迷ふのです。一度はしかし思切つて、あとの宿に此の車を預けました。その時も雨風で、歩行くとなると、殆ど一夜です、一晚かゝつて――何だかわけが分かりません。――馳れば三十分とかゝりません處を、それに、闇夜を透して、和倉の灯が浦なぐれの出端に見えたですものなあ。」

「今も見えるだべい、黒雲の中に、天へ上つたあの燭臺見たやうのものは、おらがの塔だんべい。高い處にしゃあ、揺れとるわ、振れてるだ。」

「おぢい、晴れ渡つても此處からは見えやせんよ。」

「うんや、見える。わあ、見えて、それ、波に乗つて、風で驅けて来るやうだ。――はッあ、一度は、あの鴻仙館へ歸れるだかやあ。」

「馬鹿確乎しろ。」

「まあ落着け。――しかし例によると、此の

あれは、時間が何うだらう。」

「さあ。」

「急に來たんだから、すぐ留むと思ふがな。」

「勿論　――と存じますが。」

「構ふ事はない、こゝで徹夜だ。雀が鳴いたら飛出すつもりで。だが、自炊より不自由だね。飯も味噌汁も、此の中ぢやあ間に合はない。いや串戯はよして憊うと知つたら、飲屋から一升提げて來ればよかつたよ。」

「先生が其の氣ならハドソンは小さな城です。」

相良は昂然として、白波の原の浮木の上で、あらしを睥睨したのである。

さりながら、風伯と雨師の暴威は、ハドソンの自負を許さず、その矜持を認めなかつた。須臾すると

「――それまでは、橋の上ぎまに迸つて翻る濤のたゞ大なる櫛形の欄干に千條の瀧にどうと落つると思へば打上げ打上げたのが、一度、一處、象の鼻の如き變怪なる水柱が立つて、自動車の屋根を捲越して、うつむけに湖へ越したのを相圖として、幾處ともなく潮しぶきの狼煙が揚つて、扉ともいはず、屋根ともいはず、打越し、打越し、漲り落ちる。

中に居るものの目は、大川の裏を見るやうになつたのである。

爾時であつた。――

「鯨の腹が空に見える、わあ」と、謔言のやうに云つた金兵衛が、帯を解き、布を脱ぎ、矢立を包み、股引を引かなぐつて、赤禪の尻を、もく／＼と押立てながら、助手席から仕切のシートを高這ひに跨いで、もぐり込んだのは、――

運轉手が、興さめ顔して、

「おぢい、何をする。」

「いや、構はん、入った方がいゝ、入った方がいゝ。」

と矢野はいたはるやうに云つた。

「いえ、其のことではないのです、衣ものを脱いでよ？ おぢい。」

「追剥に合つたやうだな、いや、これは難船だ、龍神に魅込まれるには、些と毛だらけ過ぎる。――分つた、其の矢立を見込まれたんだぜ。」

矢野はまだそんな事を云つた、が耳もかさずに、
「おらは泳ぐだよ、ひやあ、もう半分泳いでるけに。」

其の濤の激しく被る都度、橋とともに、車體の揺れる氣がしない事はない。

「入りたまへ、きみも。此方の方が濡れなから、う。」

「は。」

「しかし、餘り大人氣ない事を聞くやうだけれど、
轉覆るやうな事はあるまいな。」

「大丈夫、そんな事は。」

と云つて、相良は唇とともに指を嚙んだ。

矢野の色がやゝ變つて、

「斷じて行へば鬼神も避く。決行するか、驀進
を！」

「さあ。」

幽冥の境を照らす一道の光明を求むる如く、しゅ
んじゅんし、ちうちよする聲の下にも頭光を投げた。
日はまだ暮れては居ないが、暮れ迫る暴風雨の山と
山に、其の谷河なす堤防筋に、黄なる光が散り、泡
を切れ／＼に潜つて、明滅する。

唯、其の燐光の末に、視線の及ぶ眞向へ――
一點の黒い影が、雨に埋もれつつ顯はれた。

「化鯰ばけなまづが出た、でつかいぞーーぬしだ、ぬしだ。」

と夢中むちゆうで、魚尺うをじやくに手てを擴ひろげて、

「立つた、立つた。ありや海坊主うみぼうずだ。」

「先生せんせい、」

「地藏様ぢざうさまです。」

「いつか、大良越だいらいごえの山中さんちゆうで、眞夜中まよなかに見みましたの
に肖如そつくりですわ。あゝ母親おふくろに拜をがませたい

ーー歩行あるいて來こられます。段々だん／＼背せが高たかくおなり
になわます。」

矢野やのにも其その形かたちがはつきりと認みとめられた。はじめ
は、遠とほく雨あめに領伏ひれふすが如ごとく見みえたのが、白楊樹ポプラの亂みだ
れを左右さいうに拂はらつて、光ひかりの中なかに隱現いんげんしつつ、足あしに大たい
魚ぎよを踏ふむが如ごとく、波なみが其その裾すそに跳をどつて、たゞ頭あたまから
眞黒まつくろに立たつて動うごくのが見みえる。

運轉手が一固睡、ごくりと飲んで、

「先生——きものを、お脱ぎなれ！」

「うむ？」

「おつげです、先生。こんな場合です、狼狽のあまり、其の考へが出ななだのです。歩行けます、堤防は——相良が貴下を負つて行きます。衣類か濡れますからお脱ぎになつて。」

「そんな事を厭ふものか。よし、歩行かう、三人で手を曳合へば尚ほ安全だ。」

聲の隙に、早くも近づいた、其の眞黒な僧形は、偉なり、丈二丈ばかり、肝を奪つて、人の目を駭かしたが、車軸の雨と、潮柱と、渦巻く流れのために、長く曳いた影と身の丈と相混じた幻覺で、忽ち、自動車の一側へ寄つたのを視ると、此の屋根を宙へ浮いて、ふは／＼と黒雲を乗越すには其の装が重からう。却つて水底を行くに適する一個の潜水夫に似て、それよりも華者に、瘦せて見える。

「蒼雲寺様に何體もござらつしやる。」

と、震ふ聲をひそめるとともに、金兵衛は早口に
念佛を唱へた。

――白濱山、蒼雲寺――白濱の里に、しか
し荒廢しつつ、曹洞の其の巨刹のあることを、やが
て知つた。

けれども、其處を出現の菩薩でないことは、刻下
に認められた。姿は石でも法衣でもない。北國には、
雪に、囊に、器の用に從つて、坊主合羽、裏頭合羽
とも稱へて、天窓から裾下りに、ただすつぽりと、
半ばすばめた傘の形に被つて、目ばかり覗く雨具が
ある。廂がついて、風向に上げ下げをするのである。
護謨、防水布などと云ふ贅澤なのではな
い。單に眞黒な、桐油製の、それを着て居た。

而して、目廂を深くして居たのであるから、鯨と
も、海坊主とも、全身は皆黒い。

濡れに濡れた其の全身に、ひた／＼と着いた、銀
杏の若葉の、柔に優しいのがものの可哀に見えるま

で吹ちぎられ、たゞきつけられながら、大暴風雨の
棟、廂の薨に、却つて、吹きつけられて離れない、
その取締つた風情して、流るゝ雫にも、其の雫を蓑
に亂す風にも吸ひついて落ちないのが、光の直射に、
薄藍とも、淺黄とも、裏透くやうに綺麗である。

唯ばかり見る間に、欄干にすれすれに自動車の左
側へ着いた、と思ふと、ドンと外面から扉を開けて、
一波避ける其の早さ。――相良が居る運轉手臺
へ、ひらりと無言で衝入つたのであるから、呆氣に
取られながら、思はず助手の席へ肩がかはつた。

途端に欄干が消え、橋が隠れた。

叫ぶ風、唸る波の中を、頭光は一幅の閃電を堤防
に飛ばして、蹴上ぐる轍に、水の隧道の中を、一文
字に突進する。

りの事に、しばらくは、合羽に散つた銀杏の葉の、
やゝ搖ぎ、迂るばかりを見つつ、矢野は、卯の花の
大密叢を分け行く心地して、ともすれば窓を開けよ
うとする誘惑をさへ感じたのである。

五六分時——

自動車がぴたりと留まつた。

坊主合羽の肩のあたりの、さすがに此の一種の冒險に、緊張したのが、軽く寛ろぐのが見えて、目びさしを少しあげると、スツと通つた鼻筋と、目ばかりに、額髪、眉が、ほのかに黛のやうに半ば顯はれた。

打微笑んだやうである。

小説家には背きながら、襟さを搔きひろげると、下は白身かと疑ふ、雪を欺く胸に、色ある衣が亂れて居る。

また莞爾した。

「似て居ますか。」

金兵衛は、突臥して両手で拜んだ。

「おゝ、姫神様、難有く存じ奉る。勿體ない。」

「否いへえ　　――　邪魔じやまでしたから。」

一句いっく、人ひとを冷殺れいさつした。下り状おさまに八やと扉ドアを閉とづると齊ひとしく、ひた／＼と行ゆくのは跣足はだしで。その顧かへりみて立たつたのは、半なかば頹くつれた山門さんもんの石いしだたみの前まへに、荒くわう天てんを白しろく掃はく銀杏いんぎふの巨樹きよじゆの根ねであつた。

――　白濱山しらハマヤマ、緑雲寺りよくうんじである。

「行ゆけよ。」

と、白しろい手てがさしづをした。その時ときまで、肩かたにとまつた一枚まいの銀杏いんぎふの葉はが、梢こすげに、一星いっせいの降くだれる如ごとく、藍あゐを溶とかし、淺黄あなまをすかしたのが、幹みきの夜目よめの高たかさに美うつくしく描えがかれた。

「何をこくだ、此の倅は——おらが店前へ突立つて、魚にあつた話を大聲で饒舌るといふ法があるけえ。」

茶とも、鼠とも、澁色を埃で捏ちた、擬ひパナマを芋黄被りに、罽の挫げた下から、落窪んだ目を、血目と云ふ赤目勝に光らして、頬から頤へ一面の不精髯の口端を尖らした爺の魚屋——魚屋が知らん——おらが店前と喚いて、魚にあつた話を憤つたのであるから、其に相違はあるまいが、一見した處は、ばさら屋の、然も河豚賣と言ひたい。

日中だけれども、露店の片隅へ、かんてらで出るやうな腐れ板を兩馬で支へた上に、恐るべし、慎むべし、江海無鱗中の大惡魚。其の形、略鯨の大なるに似て、肥太り、眼に金色あつて、およそ魚族の中に、此の眼開闔すと言ふ、邪相を顯はし、鐵漿齒を豁出した腹の滑々と白きと、背の膩脂と黒きと、

仰向けに、俯向けに。しかし店の割には、ちよぼ／＼と手許に内端に七八尾。其の仰向けにしたのは、腹に斷別の庖丁目が入つて、一つかみづゝの白子が、小人の國の雲の峰に似て、ずる／＼と蟠まる。右の端に、血黒く、肉褐なる大ぶりの鯉つきの頭ばかりを堆く二つ重ねた、また前ならびに突出したの、タカベ、ニベ、黒穴子。またゴンスイと云ふギンボウに似て毒針の鋭いやつ。舌びらめ、鮠、鮠、鮠、鮠魚云ふ變なもの。そのほか小鯖も、鰩も、青、黄なる、べらの類も、どれも鰭尾が半ば溶けて、なかなづく、不氣味なのは、さよりの長いのが、どろりとして、畝つて交つた、唯海蛇のないばかりの一山で。

爺の曰く、皆これ鮫鯨の一度呑んだ、其の胃袋から顯はれた、小魚で、人間の胃腸に取つて、これほどの良薬はない、と言ふ。ぶりを土用に賣り、鰯は四季に鬻いで、むつはお惣菜でなくなつた、當節の事である。まだ薄寒いと云つても六月のはじめに、或は鮫鯨を開くかも知れない。しかし、一山、まるで以て海鼠腸で和へたやうなのは、魚市

の腸樽から掴み出した、と見るのが確らしい。

賣りものはそれだけではない、臺の下に古莫薩がかつて、上を桐油紙で包んだ荷籠の中から、およそ、籠一杯ほどの大河豚が、さながら新墓を發いて、女の死骸を引出したやうに、仰向けに白い腹が覗か
わて、ひかへのゴンズイが、蛭のやうに動いて居る。
惟ふに、密賣して同好に頒つ、虎斑の特別の逸品らしい。

この陰惨たる魚塵を領した爺は、汚れくさつた手
木綿の古單衣をぢん／＼ばしよりで、肩繼ぎ、裾繼
ぎの唐棧柄の双子の羽織を引掛けたのであるから、
益々魚屋の風采でない。――聞くに付けて、お
なじやうな、髯むしやの瘦こけた爺が、幾年かの間、
作竹原邊の露店で、鼠捕
石見銀山ではな
い、彈機仕掛を賣つたのを、作者は覺えて居る。

――

時に、爺が腹中の籌策の、殆ど端倪すべからざる
のは、河豚を賣るのに、寺の裏
――竹垣は、一

重破れなりに隔てたが、石碑も、塔婆も、少し奥には新佛の白張が漏れる墓所の前で、即ち是背水の陣である。

――前段の續として、こゝの寺を、白濱の里はづれの緑雲寺とあやまられては不可い。

墓所は、すぐ山のすそで、温泉の廓から狭い家並を縦横に隔たつた、村近間の片側町で、二日おき三日おきぐらゐには、こぼれ市が此處へ立つ。

となりは、大道の古着店で、霜げた古女房が、それも賣りものの足袋を繕つて居る。　　づつと離れた、バナナ屋の前には、二三人、人立ちがして居るが、いま其の次第は言ふまい。海に近い土地も、日かげの此處等は、あらしのあとの散り亂れた樹々の葉も、其のまゝに、土もぬかるんで居るのであつた。

其のバナナを賣るあたりから、段々町へ入つて、小料理屋、鮎屋、蒲焼屋など取々に、藝妓屋が交る

のである。

「だからよ、誰も中毒つたとは言やしない、目を
まはしたと云つたぢやあねえだか。」

でバツトを吹かす、この若いものが紺の腹掛の上
へ、白地に蝙蝠を紺で染めた、去年の揃衣を着て居
て可笑い。いづれ其處等の廂間から湧いて来た、關
東焼と稱ふる鰻屋か、東京 鮫などといふのの、
出前持か。酢屋、油屋の何ぞであらう。晩方からは
何うかは知らない、眞日中の目鼻も伸びて、翼を隙
さうな顔である。

「目を廻せば尚ほ悪いげい。少しぐらゐ中毒つた
ら、鹽ンばを舐めとけ。」
頬をびく／＼と、目では睨むが、爺は憤つた様子
でない。若いものを俵あつかひに、半ばからかつて
居るらしい。

「一々そんなに尖がらかるなよ。」
と、のう／＼と踞むと、下ぶせの莫塵を一寸まく
つて、大河豚を覗きながら、

「かますの面ぢやあるめえし、賣りもののやうに、些と、腹を大かく持てや。」

「此の俵が、しやうもない。河豚は怒つた時、腹を大くするげえ、しやツ、しやツ。」

と痰のからまつたやうに、咽喉くびへ息を引いて、鹽辛く笑つたが、

「ほんで、何けえ、其の鰈で目をまはしたと云ふ阿魔子は、」

「罰が當るどう。阿魔子呼ばりしをつてよ。どえらい別嬪だでな、和倉はじまつてから、おら見た事がねえ。」

「ふん、お前が生れてからちつて、これ、幾年経つものけえ。」

と又赤睨みに、煙管を捻くり、

「ま、可いわ。――聞いても悪くねえもので、別嬪として置けぢや、が、別嬪にも、天變にも鰈に

あたつた例はねえだ。 うんにや、待ち

るよ。 ー 越中の神通川に、むかし舟橋のあつ

た時分、淵のぬしが莫大な星鱒 (いし鱒を云ふ方

言) でや、人が橋を渡る時、ひらりと顯はれるだ。

背を見せる時は眞つ暗になるばかりだけな、腹を翻

すと、此の光が日をうけてパツと輝くで、渡るもの

は、目さ眩んで勿ね落ちる處を、男でも女でも引脚

へて喰つたげだがや。 ー 化けてな、夜さり月

夜に橋を渡る姿といへば、京上臈の被衣をかけた

格好だ。

「よせやい、爺的、そんな古い話は ー おら

のがは今日の事だ、今日の朝だ。」

「まんづ、何處けい。」

「何處にも彼處にも、鴻仙館の奥座敷よ。 一昨日

の晚げえの、あの一暴風雨で、海を強くほだだも

んだで、魚がまごついて居べいでな、 ー 足袋

屋の六造よ。」

「あの、次男、拙な癖に好きな倅だ。」

「この錢儲けのせち辛さだ、釣でもあんめえに、波止場の方は、それでも餘程の人が出た。方々のお客まじりで、鴻仙館の裏棧橋は、ちよくら通りがかりでは様子に分らねえもんだで、此處が、土地のもの附目だい。――足袋六め、今朝――それが滅法早い、夜が白むや白まないに、カアと鳥になつて、一羽、彼處へ、羽ばたいて留つたのよ。

釣つてるとな、然うするとな、爺的、から／＼、から／＼とうしろで硝子戸の開く音がするだ。――

それ、塀の中でよな、煩い、と思つたくらゐだつてよ、こんな事で氣が散るやうでは餌を抜かれる、もう青鱧が一尾と、鮎並の小こいのが掛つたとかで、奴は夢中だ。

處がです　――

蝙蝠浴衣は急に更つて、――

「これが二階の戸だつた日には、足袋屋め、釣どころではない、沖の島を背中にして、明神山を横

にして、立つて拜む處だ。―― 何しろ、暴風
雨の前、あの日の午過ぎから、棧橋際の、
あの狭い處を、ぞろ／＼、ぞろ／＼、其の人通りと
云ふものはよ、いまの別嬪の出現で。

おらも其時、見ただがな、詠へ通りに、二階の縁
前へ出て居るとばかりは行かねえだ。また顯はれた
處でよ、七段目のお輕が欄干に凭れたやうに、見物
に見せるでねえで、姿が顯はれると、大概は遠く沖
の方を視めて立つた。―― 遠くを視めて立つと
云ふものは、見る方でも遠いもので、二階と塀の間
に霞でもかゝつたやうで肝が煎わらあ。

籐椅子に腰も掛けたがな。また海ばかりも視めて
は居ねえで、うしろ向きに―― 此處で言へば此
方の見當、田鶴濱、白濱の、輪島街道を見はなつと
るで、―― 朝の間、二三臺自動車が其の方面へ
ドライブしつけ。畜生、野郎の販りさ待つでねえか。
然ういへば何となく、其の様子が落着かねえで、寂
しげだ。その又寂しげな處が、小しをらしくて堪ん

ねえ、椅子に袖を、しんなりと、髪さ傾げて、肩を細らこくした頸あしの好きなんといつちや、爺的、ほんとうに見せたいぞう。」

「見たくねえ。」
と、外方を向く時、ずる／＼と崩れ出す、鯔の臍臼を見つけて、河豚の間に挟つた、研減りのした出刃庖丁、割目を縄で結へて、血の浸んだ柄を取つて切尖で搔寄せた。

「それでもよ、これが、何うでえ、肩から、乳、胸、えへツ、白い脛まで、衣ものを脱いで温泉に浸つたら、和倉は何う云ふことになるづらい。其の時は、屏風崎の波へ人魚が浮上るだ、なんか云つて、衆が騒いだで。」

三度めか、四度めに、おらが密と通つた時は、其の座敷の欄干に、粹な手拭が濡々と掛つて居るで入浴つた、入つた、入つたわ、いよ／＼以て湯に入つた、は可いけどな、出て来ねえだ、其ツ切よ、二階の縁へ。――

だけれど色氣が堪らねえ、第一、いゝ匂がすらい、
ぼーつと塀下まで、此の鹽梅ぢやあ、手
拭だけでも紅提灯が點くぞ、今夜は――夜市が
立つてい。――言ふうちに、あの、
颯風だ。よく出来たら、海の方から吹きつけたで、
手拭の奴は、座敷の中へ舞込んだ。あいつ、羽が生
えて、白濱の方へ、中庭を抜けて飛ぶべい。勝手に
しゃがれ、海へ落ちたら、泳いでも、引握んで、羽
衣にして、あの歌がるたの雲
のかよひぢを、てい、強請るべいもの。

昨日は、そのあらしが、すつかり女に成つて、和
倉の湯へ吹込んだやうな、織元聯合の女工慰安會で、
海も、宿も、歓迎の旗と、赤い蹴出して充満だ。土
産の虎屋の饅頭より、土地の彼岸の牡丹餅で、それ
に紛れて居たつけが。――なあ、爺的。

その別嬪が居るだもん。お前、足袋六の奴、二階
の戸が開いたと思へば、幾室並んで居らうと、お月

様^{さま}の出^でる山^{やま}で、其^その方^{ほう}角^{かく}を見^みないぢやなんねえ處^{ところ}を、
下^{した}座^ざ敷^{しき}だで、けろり、くわんとして、精^{せい}心^{しん}を亂^{みだ}さね
え。

膽^{きも}が据^{すわ}ると、えれえもんだ。ぼうと當^{あた}つて、ぢつ
と撓^ためたわ、ぐぐツと引^ひくのを、しばらく合^あはせて、
あゝ、大^{おほ}ものだ、が、黒^{くろ}鯛^{だい}にしては、と、どき／＼
もので、鬼^{おに}の牙^{きは}に觸^{さは}る氣^きよ、びり／＼と抜^ぬいて、や
ツと引^ひくとよ。あわて鯨^{がれひ}（方^{ほう}言^{げん}蒸^{むし}鯨^{がれひ}をいふ。）
が一枚^{まい}、スイと上^{あが}つて、朝^{あさ}靄^{もや}の中^{なか}へ、スツと、月^{つき}夜^よ
の遠^{とほ}い案^か山^{ざし}子のやうに見^みえたつけが、ひら／＼と尾^を
を振^ふるだ。押^{おつ}魂^{たまげ}消^けてよ、爺^{とつとつ}的^{てい}。――其^その神^{じん}通^{つう}川^{がは}
のぬしぢやあないが、絲^{いと}を手^た繰^くつて天^{てん}上^{じやう}するではあ
んめえかと思^{おも}つたはずみよ。

（あれ、釣^つれた。）

と、其^その縁^{えん}で、朗^{ほがら}かな女^{をんな}の聲^{こゑ}がする。」

「何^{なに}が朗^{ほがら}かだえ、しやツ。」

と苦笑^{にがわら}ひして、河^ふ豚^ぐの肚^{はら}を、皺^{しわ}びた指^{ゆび}で一^{ひと}つ突^ついた。

「肝が煮えらあ、今日は、新佛の來あしが遅いで。」

「お葬式が來るだかね、爺的。」

「人間の殘骸を何うするものけえ、背後の卵塔場へ來ようが來めえが、そんな事に頓着はないのぢやげい。おらが店へ來る客を、新佛と祝つて言ふだで。――おなじ話をする氣なら、――陰氣な聾で――と言はねえけい。」

「皮肉をいふなよ、其の癖やつぱり聞く氣で居るだな。も一つ吃驚した事には、其處に、しつとりと、ほんのりか、朱鷲色ちけな、足袋六は、よく知つてら。あの水紅色の縮緬で、其の別嬪が霞んだやうに立つてるだ。女工連の團體騒ぎか何かで、座敷が取替つたものらしい、――すぐ、其處だ、その長襦袢が。」

（釣れましたア。）

と、奴、うつかり野放圖な聲を出したで。――
何だ、うぬの方が釣られて居るだな。足
袋六、面食つたもんだから、鉤を抜くよりさきへ、
棹を離して壓へたとよ。さうするとな、爺的、ガラ
リと音がして、鴻仙館の黒塀の裏木戸が開いたと來
ら。」

――隠居が中尉の船いぢりを危んで驅出したの
は、温泉の廓へ向つた横塀で、蝙蝠が此處で話す裏
木戸は、中に道は隔てたが、明神の山の森が梢を分
けた樹立が茂つて、枝には藤が咲残る。

「其處ン處へ、胸から裾まで、ぼつと、その朱鷺
色で顯はれた、と來ら。素足に庭下駄を突掛けた、
と來たぜ。」

「しやつ、よく來やがるな。」

「いまに新佛が來ら、まあ、聞きなよ。それが活
きた女で、ぷんと其のいゝ香と一所に、棧橋まで浮
いて出たんだ。ほかに誰も人は居ねえし、身投げを

するんぢやねえだもの。おのれの身に來ると思へば、足袋六め、じわ／＼、ぞく／＼。

やあ、年紀は少し東京ツ子は、えら元氣だ。朝は寒いぜ、それなのに、そのなりは、と思ふと、慌てるなよ、爺的。」

「何て状けえ、其の口の端を何うにかしるでは。」
と起身で吸殻をすぼ／＼と拂く。

「うゝ、其の、乳のふつくりと、透けさうな胸を、白博多に藤色の獨鈷とかの伊達巻で、細そりと、こゝがものだで。――薄青ツこい半纏を着て居ただが、通し黒襟の廣袖とかでよ、誰が見ても、へい、男ものだ。野郎の衣服だ。」
と云つて唾を吐いた。

矢野のものなら心當りがある。紺地に藍のらんだつ縞のお召で、お澄をばさんが、其の人形の夜寒を厭つて、よそゆきを直して着せた半纏だから、蝙蝠の憤懣に値しない。引返しもので、繼ぎのあたつた

のを、北國の旅の要心に、鞆に納れたものである。

「巫山戯て居やがるぢやねえだか、此處だ、慌てるなど言ふのは。――これさへなけりや足袋六の奴、何だつけなあ、それ、其處等で藝妓が謠ふだ、――兜も鍔もか、首でも持つてけと言ふ處を考へた、しばらく考へた。――

それといふのが――褌を合せてこゞみ込んで、きすと、鮎並と、いまの鯨を覗いて居つけが、――姉さん、姫つ子、おくさん、妾か、いろか、おくさん、何て言はうかなあ。」

爺は手首を少しばかり、不精たらしく、庖丁で板を叩いて、

「穴子とでも、にべとでも、河豚の腸とでも、鯉の臍とでも、何とでも吐かせ。――はて新佛が來せねえわい。」

「そいつは、何うもその勿體ねえだ。」

癩は癩だが東京なみに

姉さんだ。――

譲つて欲しい、といふだな、（あれ、勿ねる、）

とかいつて、手つきで、半肩遁げながらよ、

（賣つて下さいな、）と來た。」

「來たけえ。」

「きたぞツ。」

と、大乘氣で蝙蝠は、ふはりと飛んだ。

「其處を――男ものの廣袖にこだはつたで、

（おらいち、商賣ではねえもんだで、）何か言

つげよ。（いゝでせう、後生だから。こんな泳ぐ

のは、はじめて見たわ。）と此奴は然う

だらう。まあ、そりやお望みならば、と勿體をつけ

るうちに、いれものをと、もう極めてよ。裏木戸を

入つてから一寸間があるで、奴は、兩腕を組んで、

其の間、つくねんと、浪打際で磯蚯蚓の脈を引くや

うに考へてる處へ、金盃、

「金盃

」

「洗面臺からはづして来たんだ。――半分ほど汐を汲んで、なあ爺的、こゝで腰に蓑をつければ、いつかの明神様のお祭りの踊屋臺だ。あれは、村雨か松風か。」

その汐が、もう、うつすりとおしろい粉の香がするもんだから、面くらつたのは鱈どんよ、龍宮の化粧の室だか、極樂の蓮の臺だか、陸の花ざかりだか差別がつかねえ、で、おとなしく、ぼんやりして居る。」

「いくらに賣つたてけ。」

「さあ、それがよ、藍ッぽい寝ン寝子一件だから、慾にころんで、しめて遣れ、だけれど、又其の媚かしいとも、艶ッぽいとも何とも言へねえのが鼻ッさきにあるだでな、斷念めても色氣が出て、思ひ切つて吹掛けられもせず、むず／＼して、鼻ばつかり白粉にぴこつかせるで、別嬪の方ぢや――何しろ其の衣裳だ、手間が取れるのは辛かつたらうで、（可いわ、あとでお帳場へ、）――」

てきばきとしたものよ。　　ー　　（帳場でお代を取
つて下さい。矢野ー　と言ひます。）　　きつぱり
としたものよ。　　白い踵がああ黒堀へかくれたけがな、

ー

となりの古着店と、些とばかり地を分けた、其處
はもう横が竹藪になり、うしろが畑になる、畦の日
向草の三時さがりに、石盤色の古中折帽をぢかづけ
に枕して、爪さきに穴のあいた繻子の紺足袋を草履
なりに踏伸ばし、瘦せた両手を胸さきへ肩を抱くや
うに引拱ぬいて仰向けに反つて寝て、鼓草のほうけ
を吹き飛ばして居た、四十ぢかな男が此の時ぬくり
と起直つた。

長くした髪の毛が、鰐下から溢れて居る。鍍金ら
しい、金縁の目金を掛けた顔面の憔悴した、その嶮
相は、迫つた眉にも隆い小鼻にも蔭を刻んで暗く顯
はれたに似ず、くんだりと軟かな片膝立になつて、
其の膝へ巻いた肘に、頬を押着けるやうにして、た
とへば脇の下から覗く如く、白睨みの薄目でじろ／
と河豚爺と蝙蝠の對話をぬすみ聞いた。

これは、近頃何處の浦にも、よく見られる、いかさまの萬年筆を賣る人物で、手摺れして兀げに兀げた、三毛猫のやうな折靴を壓にして、地板二三枚敷重ねた、土地の古新聞の上に、賣品が並べてある。

昨日の、其の女工の大慰安會の幾團體を目的に流れ込んだのが、こゝにこぼれて柵んだものであらう。河豚の肥腴なるに對して、恰も黒く瘦せた泥鰌に類する。

爺の眞鍮煙管は、コツンと腰に納つた、が、蝙蝠の煙はいやが上に濃く上つて、

「――錢高は、言はねえ、言はねえよ足袋六の奴。あとで帳場から打奪つたのは。言ふと、それ、おらに奢らんばなんねえからな。それよりか、大變な事がある、別嬪のかくれたあとから、奴は密と其の木戸へ忍び込んだぜ、爺的。」

堀裏の庫納屋まはりには、古箒がいくらかもあるで、そいつを一本尻べたへ隠して持つてな

「何けえ、其の狐の尻尾を出したやうな状は。」

「其處が智恵だ—— 鴻仙館は、あの大構へで、もの事ゆるやかだからな、庭の中は何處を抜けた處で一々咎めだでをするぢやあねえども、其處は要心よ。爺的も知つて居る、あの塀の中には、湯の神様を内で祭つた、小さなお堂があるだ。」

朝がけにお詣りをしました處、お鳥居前に、大分、其の藤の花が散らかつて居りますで、御冥加に掃寄せます、とよ、言ひぬける智恵だと吐かす。」

「吐すけい、しゃツ、あの次男坊、其の智恵を足袋につかへば、能登の國産も出来るだに、むだな倅だ。」

「な、藤の花を掃くと吐いて、緋縮緬を覗く氣だ、畜生め。」

「またとが 萬年筆屋の、こけた頬げたが、立膝の上で傾いて、又尖つた。」

「座敷の客は、いゝ氣なもんだ、しめても硝子と、障子の嵌込と二重に透して、坐つてて、灣も島も寛々と、うぬばかり眺める量見で居るだらうが、其のまた二重を透かしてよ、海からも庭からも、外道がこそノゝと見て居ると知らねえだ。床が二つふつかりと取つてある少しかう亂れてよ、靄が藤の花にかゝつたやうに。」

「床が二つ。――」
爺は苦々しさうだが、何故か、ほつとした面構をする。

「箒を尻に附着けて、大な沓脱石と、高縁の間へ、眼球を出して覗く奴には、それがよ――好いことか、悪いことか分らないが、――床の間の方が別嬪の塗枕だ。野郎甘いと見えて、下座に敷かれて居やがる。」

其の爺的、床の間へ、鯉の洗面器を据ゑたとよ、金魚の氣だらう、いゝ氣なものよ。しばらく、九の字なりになつて見て居たが、枕許を密と通つて

はてな、と來ら。背後向きで寢て居る野郎の頭の前へ端然と坐ると、少し顔を横にして、野郎の毛髪を二三度撫でて、一寸唇の動いたのは、ものを言つたらしい。――靜に起こしたのだらうと思ふが、罰當りめ！ 起きないと、恚う其の足袋六が話すのよ。」

「當前でねえけ、お前の知つた事ではねえ。」

「其處で別嬪が――敷島だか何だか卷莨を一本抜いて、燐寸を摺つた處で、又

はてなだ。いきなり吸はねえ、堅氣だな、内端だよ。燐寸の燃えるのと卷莨をくつつけて、フツ／＼と吹くと、それ火がついた。其奴を、野郎の口の邊へ持つて行つたけれど、まだ起きねえでな、自分で一吸ひ吸つて見つけ、艶麗に浮んで、コホン、コホン。」

と、くにやりとして胸を擦つて言ふ。

「止さねえ、てめえで阿魔つ子の呼吸を吸つて、身體の痺れるやうに言やがる、いやな奴だ。」

「それでよ、火のついた處を剪刀で切つて、灰吹へ落すと、着て居た寢ン寢子を、込らかして、すつと脱いで、縮緬の腰がしな／＼と浮いたもんだから、思はず、なんまいだ、と稱へた、足袋六がよ。

けれどもだぜ、爺的。別嬪は、其中へは摺込まずに、柔々と、自分の寢床へ入つたもんだ、一つ、ふはりとして、搔卷がスツと細くなつて、其ツ切りよ。

背中合せで　　―　　ひつそりと静まつた。何うもお目覺が早過ぎたから、もう一寢入り、すや／＼と來たらしい。見えない顔だが、眉の上あたりへ、ほんのりと花か蝶々か、ぽつと薄い影が浮上りさうに思はれたが、熟と視ると、晃々と目が青い。蜻蛉の束髮簪が寢息に幽に動いて居るのだ。

其のうちに　　―　　床の間の洗面器から、鼈が首を出したやうに、ぬつと持上つたのが鯉の尻尾

と思ふと、ひらり、や、それこそ、ひらりだ、飛ぶと、刎ねた、刎ねたの何のと、枕許へ、ぴち／＼、ぴち。が八寸餘の鯉ぢやねえか、鱗で踊る、宙

へ翻る。突張る、反る、疊をたゝらだ。

途端に、お前、勿起きて、褻をくづした別嬪の驚きやうがよ。あれえで、もろに立つと、ちらつく裳へひら／＼と勿返る尾緒にくる／＼と絡はられて、キイと遁廻ると思へだ。覺悟はしても、一度寝忘れたらしいから、どつちが夢だか分るまい。足へからみつくのが、中くらの河童に見えた、足袋六の目にもよ。それだもの爺的、悶へる拍子に、だて巻がずる／＼と解けるとな、燃えるや、うな緋縮緬が朱鷺色の下を舐めて、鱧と一所に上下に狂ひながら漸と揉みからんだ白い處へ 此奴怪しからんと思ふが、考へて見れば鱧の方が道理だ。奴は火を遁げて雪の中へ潜る氣だい。(あれ、あれえ、)(何、何うした。)もう野郎は先刻起きたが、火事だか、海嘯だか見當がつかなんだらうよ。――何うした、何うした、何がなし、坐つたまゝ兩手を擧げると、弱腰をさきへ、肩をしめて、膝へ横抱きに抱込んだ、確乎と。

疲せがれた萬年筆屋が、聳やかすとよりは、肩を

尖^{とが}らして、胸^{むね}に手^てを組^くんで襲^{おそ}つて來^きた。

「大^{だい}分^{ぶん}、面^{おも}白^{しろ}さうな話^{はなし}でないですか。」

折^{をり}靴^{かばん}は手^てに持^もつたが、中^{なか}折^を帽^{ぼう}は脱^ぬいで、うりもの
上^{うへ}へ覆^{おほ}つて來^きたから、長^{なが}い毛^{かみ}髪^{のけ}が、半^{なか}ば逆^{さか}立^たつて
居^ゐたのである。

其^その白^{しろ}眼^{まなこ}で、じろりと見^みらわて、蝙^{かう}蝠^{もり}は氣^きを挫^{ひし}が
れたやうに、

「やあ。」
と唯^{たゞ}言^いふ。

爺^{おやぢ}は構^{かま}ひつけず、無^む頓^{とん}着^{ちやく}で、

「そんで、目^めを眩^まはしたといふのけえ、

阿^あ魔^ま子^こは。」

「うん、白^{しろ}つけえ脛^{あし}のぶるノと震^{ふる}へる、其^そのお
前^{まえ}、爪^{つま}尖^{さき}に、あわて鯨^{がれひ}は、へたりと草^{くさ}臥^{たび}れてら。

「念^{いそ}いで寢^ねン寢^ね子^こを取^とつてな、薄^{うす}りと青^{あせ}く、別^{べつ}
嬪^{びん}の乳^{ちゅ}から下^{した}を、野^{やらう}郎^{らう}が引^ひ包^くんで遣^やつけえが、半^{はん}分^{ぶん}

水へ浸つたやうだ、色氣がな、そして浪打つ。其の時よ、女の瞑つた目許から耳ツ子の根まで、桃色に紅くなつた。」

「ちえツ。」

と鴟のやうな舌打して、金縁は、藪の暗い方へ面を背けた。

「足袋六は這かゝつて居た、沓脱を乗出す拍子に手が、這つて、庭へスットンよ。了つた、氣がついたと思ふから、木戸口へ遁げた時、硝子戸が開いたつけ。——（おばけが、泳ぐよ。）—— 野郎の聲で、眞正面の海へ、菱形に煽を切つて、どぶんと—— な 甘くやつた、鯨はしめたぜ、鯨はしめたが、棧橋へ驅戻つた足袋六はみじめを見た。」

何故あんで、と言ひねえ、置忘れた釣棹がひとり
で、波を歩行いて居る。」

「變だな。」

「何、變なことも何もねえだ。餌を附放したもんだで、小黒鯛でも啣えたらうが、また悪く海が平でな。其の上を、二三尺つい／＼ついと、それ、あれ、手の届きさうな處に行く。だもんだから、奴は氣の上ずつて居る最中だ。うか／＼と、追つかげに海を歩行く氣で、浪へ足を出すと、どぶ／＼と沈んだぜ。」

「おやつかな、呆れもしねえげ。」

「ちえツ、はツはツ。」

と、たゞきつけるやうに、金縁が胸を絞つて笑つ

たが、

「其處で浮いたですか。」

「足袋六かね、えゝ、目から、鼻から、辛い奴を飲んだですね。」

「うぬ等、畜生、人に鹽を舐めさせよつて、――其の婦は高岡（越中）から一所だつたですよ、僕と。鰈が可恐い、馬鹿にするな、そい

つを又引抱きよつて、おばけを棄てたと、生意氣な、

われ／＼は河豚の血といへども飲まずんば！
腸といへども食はずんば！

「あゝ、これ何するけ。」

いきなり、残骸を入れた、血みどろに骨皮の浮いた、腸樽へ手を突込んで、飛沫をかへしたのに驚いて爺が言つた。

「啜るんだ。はあ、」

と大息を咽喉へ引いて、

「飲むんだ、食ふんだ。」

「食ふなら食ふやうにするが可いげい。」

爺は蝙蝠と目を合はせて、

「まあ、落着いてぢや、ね、吃驚したげえ。」

「分つた、可、落着くぞ。」

と、悪く静に、搔汚した拳のまゝ、折靴をぎし／＼と開けて、一綴した洋半紙を、四五冊懐中へ抜取

つて、蝦蟆口を袂へ投げると、口が開いたか、ちや
らんと鳴る。同時に體をぶる／＼と半廻りに、ぴし
やり折靴を足許へ叩きつけた。

「食ふなら食ふやうにしろ、と申されました、で
ありますな、します、いたします、食ふやうにしま
す。」

とぐいと、脇の下まで見せたまくり手を、綻びた
袖口へ突込んで錢を鳴らした。

「買へばよろしい、幾千です、幾千ですか。」

「はて、何をあげますけえ。」

「血、血、血だ。」

「血は賣らんのか。」

「賣るだとも、賣りますが店の估券にかゝはる
で、古い血は賣られませぬだ。何の血がお望みだ
ね、——人間のほかに——えゝとござりま

すものは、タカベ、ニベ、黒穴子くろあなごにゴンズイ、鮫鯨あなかう
の反吐へどの類たぐひ。――表看板おもてかんばんは河豚ふぐでござい。」
此この爺とつとつ的てき、海うみへはまつた足袋たび六ろくの比ひではない、好この
んで山鹽やましほも舐なめたしたゝかもので、びくとませぬ。

あをばうぢよし
青帽女子

「勿論、河豚だ。」

「一頭、五錢ぢや。」

「くれい。」

たゝきつけた白銅の、朽板の上で馬を傳はつて踊るのを、爺は庖丁の柄で、コツンと留めた。其の出刃を返す手で、ぐわんと頭を離すと、切口がはせて、河豚の面はびくりと脈を打つて動いた。

「ほう、活きとるわ。」

その首が腸樽で。パチャリと刎ねたのに、蝙蝠はあとへ引く。

「死んだ魚とは味が違ふ、魚軒で食へる。」

帯朱暗紫の臍もつを、どろり／＼と抜いたが、

「此の肝は何うするけ。ギラ／＼と黄褐の光輝の

ぢや。」

「何でも食ふ、食はずには活きとられん。」
「話せるわい。」

無精髻で、ガクリと頷いて、口をぱく／＼と動した、河豚ではない、此の爺が笑つたのである。

「大切な客人ぢや。悪い事は言はぬで、此の肝だけは留めぬと不可んで。まつこと食ふならば、此ばかりは熟煮つせえ、そら、そのかはり。」

で、悪女が鬢ついで束ねたやうな、黒い背筋へ、生切れの庖丁を一當あてつつ、

「ごりゝと、ぐりゝと。」
切るのではない、剔つたのである。

「こゝの料理の仕方が悪いと、生命が危え。そら、白つけえ肉ばかりにしても、水につけとくと其の水が赤くなるちゆうは、此の背筋の黒血が、刃こぼれで浸みる所爲だで、大毒ぢや。憚りながら、おらが手に掛けた以上、安心をするがいゝ、見つせえよ。」

ギリリ!

「な、此の血を見せえ、黒血を。毒血をよ。」

片身へ進つたのは、漆の蝶の如くに擴がり、片身へ流れて板の濡れめに其の末の淡まつたのは、赤い小蛇のやうに走つた。

「庖丁貸してくれ。」

足をばた／＼と踏んで、金縁は、其のまくり上げた腕をぬいと伸ばした。

「庖丁を貸せ。庖丁を。」

「刃ものは危えぞ。」
と呟いて、蝙蝠は又一步退つた。

「貸せつたらいい。」

「えゝ。」

さすがの爺が、血みどろの庖丁を腰へ隠して、
「此奴は素人には切れねえよ。」

「切るんぢやない、塗るんだい、ちえツ。」

「こぶし」
拳で其の黒血を掴んだと思ふと、片手で懐中から引出した「ー」近々と見れば、細字を認めた、罪人の原稿用紙の一綴であつた。「ー」一冊にべた／＼と、塗りながら、めくりながら、塗りながら、歯を鳴らすやうに、舌打を続け、続け、

「ついで はらわた」
「次手に腸だ。」

と、開いた紙の面に敲きつけた。一層渠等を驚かしたのは、裂くのも、棄てるのでもなく、急に落着いて、澄まして疊んで、其處で靜に折靴を拾つた事である。「ー」

で、人情で、はじめは手を拭くのだと思つたから、お使ひなさいと、そのために取つて握つて居た、庖丁拭きのぼろ切を黙つて引込めて、きよとんとする。其の肩を

「お爺さん。」

背後からポンと敲いた。

「やあ。」

背後うしろと云いふのが、卵塔場らんたふばで、たゞいたのが、しな
つた手てで、竹垣越たけがきこしにのしかゝるばかり覗のぞいて居ゐるの
が、膚はだもあらはな若い女わかをんなの淡青うすあをい帽子ぼうしである。ドレ
ス姿すがたの令嬢れいぢやうである。

藪やぶから狸たぬきでも、驚おどろくまい。墓はか、塔婆たふぼ、白張しろはりの前に、
一騎いっき、河豚ふぐを屠ほふる不敵ふてきの爺おやぢ、――背水はいすゐの陣潰ぢんつぶえ
たり。

赤目あかめを白しろくなるまで、たゞ＝みはる。

「頂戴ちやうだいな。」

むかし波斯ペルシヤの一國あるくになる、黄金殿わうごんでんの厨人ちうじんが、四色ししよくの
魚うをを炙あぶる時とき、傍かたはらの壁かべの中なかよりして、嬋娟せんけん窈窕えうてうたる美たを
女やめ、忽然こつぜんと立顯たちあらはれ、策むちもて、燒鍋フライなべを覆くつがへしたと言いふ、
アラビヤンナイト
一千一夜物語せんいちや物語を聞きくよりも――こゝに見みる爺おやぢと
蝙蝠かうもりの方ほうが一驚いっしきやうを吃きつしたであらう。

淡青うすあをの帽子ぼうしして黄柑色かうじいろの洋装やうさうした、目鼻立めはなたちの、白しろ
くあざやかなのが墓はかの中なかから、河豚屋ふぐやを差覗さしのぞいた、

其姿は
――

そこに、黄べら魚、赤べら魚の形はあつた、けれども、「頂戴な」――は、それではない、河豚の一行をさしたのである。指さきで――が其の指から、忽ち小さな蜜蜂のやうな魔が踊つて、魚を其の露呈な胸へ、乳房へ吸込みさうにさへ見えたのである。

「此の事けえ。」

氣を呑まれた顔色して、御意のお肴を庖丁でおさへた爺はもとより、金縁も、蝙蝠も、唯じろ／＼と見上げ見下ろす。

「――頭五錢ぢや。」

我に返ると、爺は其の不敵を取返した。

「知つてるわ。」

すぐ、其の不敵を奪はれた。

「六尾ばかり。」

「いま料理るでね。」

「其のまんまで可いの、丸ごと。」

「丸ごと、丸ごとけえ。」

「この、マツウラへ入れてよ。」

さすがに味噌漉ではなかつた。が、蝶、蜻蛉でも伏せさうに竹垣がくれて小さな笹をひよいと出された時、爺は再び聲を上げた。

「や、貴女は——此の笹をマツウラは押つ魂消た。なかまでなうては知らねえげ。」

ぶる／＼ぶる／＼と背皮が震へて、目が動く、鮮しい處を、一尾、二尾、三尾と。——

「東京からおいでけえ」

江戸子だね。」

「違ふわ、博多よ。」

時しも金縁は、ストンと憑ものの落ちたやうに、
発作の肩の聳立が見る間に衰へるとともに、顔の色
にも蒼味がさし、折鞆の砂を拂はうとして、唯、指
も掌も、にちり／＼血だらけなのを持餘した體で、
再び、腸樽の血の池を覗いた。

爺は五尾を装りながら、あはれむが如くに見て、

「その切で拭かつせえ。」

「一寸、およしなさい、そんな中で洗ふのは。新
佛の前に水があるわ——待ていらつしやい
な。」

裳を翼に、もう飛んで、帽子の其の青鸚哥が、日
中の鼻の腹に似た杉の陰の白張提灯をなぶるのを、
向うに見込んで、三個が目を見合はせた。

「何けい、あれは。」

「うむ、」

と、うめくやうに、いつて、金縁が、ぐたりと踞

むと、蝙蝠は漸と一步出た。

「とに角、ばけものには違ひないだが、山のもんか、海のもんかよ。」

「それがよ、来たのは卵塔

」

もう其處へ、竹馬がまへに、竹垣へ片手が掛る。靴が刎ねて、閤伽桶が其の上へ乗つたので、至極尋常な意味だが、貝の字を描いて、道へ出た。

「お使いなさいな。」

皆魅せられて居た。――眞珠の頸飾だと思つたのは、豆絞らしい手拭を頸に弛くわがねたので、其の下に珠数を二卷きに巻いた粒が廣いV形の胸に黒子の並んだやうに數へられて、魅惑と妖媚の相が装上つた。

「感謝します――貴女は宗教家ですか。」
と金縁が、唾を乾かした掠れ聲する。

朱い唇で、につこりして、

「當ててご覧なさい、ト筮は私の方がうまいんだけれど。」

宗教家かと聞いたのに對して、ト筮をすると云ふ。金縁は謎を解きかねて、ぴく／＼と眉を動かす。

蝙蝠は翼を組んで、のつそりと立つて居たが、地廻りだけに、ふと一思當おもひあたゝる様子があつた。

「お嬢さん　　波止場のわきに、壊れた小さな御堂がありますだね、外側ばかりの。」

「知つててよ。」

「風當りが強いもんだで、御神體はわきへ移した荒堂ですが　　昨日は、女工の何團體かで、あの磯は、舟から上るやら、乗つて出るやら、松原で鬼ごつこやら、えらく賑かで、商人が、澤山出つけえが　　然ういへば見たやうだで、あのお堂の

中で、鬼灯の店の前で。」

「えゝ、然う。」

「買つておいでののは、嬢様だつたけ、洋服の色が違つて居たでね。」

「えゝ、そりや違ふわ、蛸も海月も、波の色で。人間は場所と、舞臺面でさ。でもね、買つてもしないわ、賣つてもしないわ。」

「へい。」

「授けて居たの、
鬼灯ではないことよ、
神様のお札だわ。」

爺が、口の端を、もしや／＼、

「そんだと、此の間から、ちらほらと見掛けるだ、あの白ツこい衣もので、紅い袴はいた。」

「私の姉さん」

「ご姉妹。」

「分なの
あの方は、出雲の松江よ。」

「ほんなら神巫様だ、何神様けえ？」

「扮装を見たつて、分るぢやないの。」

と長い指が帽子を弾くと、柑子色の肩をたゝいて、唇を指すとともに、靴足袋を搦んで摺合はしながら云つた。

「青いのが回々教、赤いのが拜火教、黄色いのが猶太教、新舊混色が基督教
――黒いのが髪で、雪より――純白なのが、私の神様。」

と兩の腕で乳を抱いた。

「眞白い、」

「白い神様。」

金縁は、人の言語を掻分けるやうに乗出して、

「僕には分つたです、貴女は、女優でせう。お札といふのは、比羅か、廣告ぢやないですか。映畫か、舞臺か、いづれ、新派、新劇團。」

「新新新新劇團。」

と指さきを刎ねて、白粉の濃い鼻を指した。

「興行は何處ですか。劇場は。」

「こゝで演つてるぢやあないこと河豚のお爺さんと、貴方の萬年筆屋さんと、此の蝙蝠の方と、私とで、すぐ社會劇の一齣だわよ。撮影すれば、それがすぐ映畫だし、聲を出せばトオキイだわ。」

「なあるほど、ご尤だ。」

と些とも分らないのを、腹の底まで合點んだやうに、日向へ胸を張つたのは蝙蝠で。

「感謝します。僕も俳優だ。」

「誰でも、俳優よ、私の一派は。」

「おらだけは儲からねえ。」
と河豚の爺さんは呟いた。

「ご不禮ですが、貴女の一座は。」

「大勢よ。」

「お乗込みになつたのは。」

「海から。」

と額の影を青く見せた。

「海から——来たですか。」

「まあ、汽車や、車には限らないことよ、歩行いで、と言つてもいゝわ、波の上を。」

「波の上をですか。歩行いでですか。」

「舟さへあればだわ。」

「まるツちやつたあ、——座頭は誰方です

か。」

「私の

おかみん。

(註。

奥州にて巫

女の通語。

)

と、言つて、瞳をぱつちりと、頸の珠數に手を掛けた。

「神 お神様。」

「うつし身でおいですから、お頭とも、お師匠さんとも言ひますわ。」

「その方が河豚を食るのけえ。」
爺は商賣を忘れない。

唯、サソクに口に掌をあてて、
「内證。」

「しゃツ、お嬢さんは話せるで。此の六尾を幾人でだけ。」

「六七人 ー 宿では食べさせないんですもの。これから、かへりに地葱も買つてよ。」

「お宿は何處ですか。」
金縁が思ひ入つた氣色である。

「ほゝゝ、當ててご覧なさい。」

「然うでした、然う、然うでした。」

それで、お嬢さんは、ト筮をするとお言ひでしたな。

金縁は額に下る長い毛を搔上げながら、目の色とともに白く笑つて、

「一つ、ト筮つて頂きたいですな、たとへばですな、僕が俳優を志願するとして

あ。

「トふまでもないぢやないの。貴方はもう俳優だし、いまからでも、すぐなれてよ。」

「しかしですな、しかし 貴女の一座と

してですね、真劍の、真劍のお尋ねとしてですね。」
今度は毛を揉んで引張つた。

「それは、お師匠さんに伺つてからよ。」

「座は何とお言ひですか。」

「はくしん座、白、神——よ。」

「矢張り、すんでは、お神巫でねえけ。なあ、やあ、倅、何うでえ。」

「おらは、お神巫でも、女優さんでも、そりや可いだが、それにしては珠数がよ、——尼様見てえだ。」

「何でもいゝわ、こんな扮装をした、人で、こゝが舞臺だと思へばいゝぢやあないの。あら、烏が鳴いた——其のお魚を頂戴。」

「箆を受けると、爺が伸上つて、料理れえずとも大丈夫けえ。ほか魚とは強く違ふで。背割きというて、其處に、それ、

あるだがね。見さつせえ。骨を割いて黒血を取るだ。廣い東京は知らねえだが、此の遣り方というては、北陸道に、へい、おらが外にはやり手がねえで、素人には危えだが。」

「鬼灯賣に、神巫に、女優に、尼に、ほゝゝ、化
ものに――素人は矢禮ね。」
と落敷いた銀杏の葉を取つて、土だらけだから、
閑伽桶でざつと洗ふと、河豚のピカ／＼と光す、十
幾つの眼を蔽うて、尾鰭へさら／＼と振掛けた。

「希臘の菓ものに見えるでせう。お師匠さんから
お授かりの毒消しよ。」

「お嬢さん――」
金縁が、せい／＼と肩で息して、

「志願をすゝめとしてですな、希望が叶ふか如何で
せうか。」

瞳を大きく、凝と視て、帽子が傾くと、小刻みに
靴が動いた。

「然うね、
――白濱橋へ、入らつしやい。」
其のお返事は、輪島街道、

「僕は、僕は、一刻をも争ふですから。」

「今夜、夜よ。」

「心配です。――では、では、其時の運命を卜なつて下さるんですか、いま此處で、此の場面で。」

「手を――貴方は、藝術家ね。」

金縁の目が白い。

「河豚の黒血で、美人の髪を咒詛つて居るわ。」

「渠は唇を震はした。」

爺がのそ／＼と立つて出た。

「おらが運も見てくんさらぬか。」

「手を――お爺さんは、これ。」

と銀貨をつかませると、先刻から針の手をとめて、口を開けて見て居た古着屋の古女房が、布子の裾を

袴はかまの如ごとくはだけたまゝ、のそ／＼と寄よつて來きて、

「おらがの運うんは、もしい、お嬢ぢやう様さま。」

「あい、手てを――おばあさんは、これよ。」

と、素す早はやく、かくしを抜ぬいて握にぎらせたのは、小ちひさな銀ぎん色いろの袋ふくろである。

蝙蝠かづもりは幾いく度ども手ての膏あぶら汗あせを脇わき腹ばらで拭ぬぐつて居ゐたが、

「嬢ぢやう様さまあ。」

「兄にいさんは 目め力ちから一いち、ちよん、ちよんの

十じふだから これ！」

と、キスを投なげたと思おもふと、破やれ垣がきを向むかうへ飛とんだ。

すぐ其そののまゝ、青あをい帽ぼうし子こが振ふり向むいて、

「でもね、眞ほん偶とつの卜うら筈なひは、一ひとり人びとづゝ

誰だれ

も居ゐない處ところだわよ、いゝこと。」

で、折をれ朽くちたり、倒たふれたり、斜なぐめに立たつたり、すく／＼と亂みだれた塔たふ婆ばを分わけ、苔こけ蒸むす石せき碑ひ石せき塔たふを、黄きの肩かた裙すそが縫ぬつて行ゆく。

目も口も鼻も、凡そ丸い顔の相格を溶かして、二
タノ、二タと成つて居た蝙蝠が、羽ばたきをして、
いきなり垣を跨がうせすると

「待てい。」

「何けえ。」

「待たんか。」

と、金縁は眉が迫り、眦が釣つて、

「僕が先だ、いや、おれに言つたのだ、いま言つ
たのは僕に云つたのだ。」

「違はい、おらだ。」

「きさまが出る幕ぢやあない、身分が違ふ。」

「こん、畜生。」

二人は青帽子の妖女の一言で、ひそかに唇を恵む
とでも思つての争闘らしい。

「きさま呼ばりをしやあがつて、身分が違ふとは
どの口で吐した、この大道の、いかさまし奴。」

「ぶちやがつたな。」

「不可ません、不可ません。」

鳥が其處へとまつたやうに、杉の繁りの暗い處で、唇赤く、高らかに、笑ふのが響いた。

「診察は札順です。――先へ入らつしやい。――
萬年筆さん。」

其の穴のあいた繻子足袋が、片足墓の土を踏んだ時、蝙蝠の手は早く竹垣を握りしめ、首ばかり伸上つて覗込んだ。

義眼でも剥きさうに、五十銭の銀貨を日に翳しながら、冷評す如く、煽てる如く、じろりと喧嘩を見て居た爺が、シャツと嘲笑つて、其の頤を古女房に差向けた。

「お前はんの辻占は吉か、凶か、半吉か、末よし
けえ。」

河豚店の横に立つて、銀色の袋を開いて居る古女

房ばかりは、日南に、ほつかりとしたもので、

「飴菓子^{あめぐわし}のやうぢやがね。」

「うむ、チヨレートと云ふハイカラぢや、ホツテ
ントツトといふ國の名産ぢや。」

と、もう一度頤で掬つた。

勇ましくも金縁が墓から出た！ 出ると、大道の
荷を引包むや否や、ものも言はず、づん／＼と再
び墓へ引返した。が、蝙蝠はもう居ない。引續いて、
二人とも卵塔場へ入つたのである。

唯、腰を捻つて、抜きかけた煙筒を皮の筒へ突込
み状に、ふら／＼と、然も分別ありげな面して、爺
が又破垣を入つて行く。妙な事には、そのあとへ古
女房が――これは閼伽桶を次手に提げて入つて
行く。妙な事には、其のあとへ、以前から少しづつ
押寄せ、近づいて居た、バナナ屋の前の人数が、一
列になつて、ぞろ／＼と入つて行く。妙な事には、
町から二人三人づつ来るのが、遠くから吸はれて、
入つて行く。妙な事には、然うすると、斜向うの農

家からも。人が出て、飛んで隣の下駄の齒入屋も、入つて行く。

「畜生、畜生、畜生。」

むかうに、ちよぼりと、形の小さなバナナ屋は、賣品のかはりに、しつぺいもどきで、板をたゝいた。町筋から牛のやうな頭を出した、耳の垂れた黒犬は、其店を蔽うて大い。ぬつと、其の長喙を嘯いて、甘い木の實を嗅いだのである。

「畜生。」

もろに振りかぶると、あとへパツと退くのを、ドと追つて、町中へ追込んだが、人よりも先に、犬は一廻りして片側路へ、今度は、まつしぐらに河豚の店へかゝつた。

鳥が一齊に、かアと鳴いて、ばら／＼と、あたりの樹へ寄つて来た、――時に、遮るものは誰も

ない。

犬いぬが乗のしかると、片馬かたうまが刎はねて、板いたが轉覆ひっくりかへつた。此この禮れいを失しつした、ばさらものの亂みだれた食卓しつぱくたい臺だいの下したに、大おほき樽たるの碗わんもりがある。

がり／＼と鳴なる首輪くびわを見みよ。大旅館だいろくわん、朝六あさむつの自慢じまんの猛犬まうけんだから、食じきに餓うゑはしまいもの、畜生ちくじやうの淺あさましさに、づぶりと喙くちばしを入いれると、河豚ふぐの首くびを一口ひとくちに、だふ／＼と汁じるを飲のんだ。

しばらくすると、木この葉はも、小魚こぎかなも、啄つばみ散ちらす鳥からすの中で、一唸ひとつなりして、どしんと倒たふれて、血泡沫ちあぶくとともに、だらりと舌したを吐はいた。

晩飯の膳に ー ー 鰈 ー ー はなかつた。

其の無いのに、お李枝は、ほつと、氣の休まつた
顔を
する。膳に差向つて、矢野のをぢさ

んは、何にも言はずに微笑むだ。

お李枝が、いつまでも起きなかつたゝめ、づつと
朝餉がおくれたので、午餉は抜いた。そのかはり晩
にご馳走を、澤山といふにつけて、鰈は可厭との事
であつた。私は一生食べないから、と其の食べない
のを、 ー 尤も一生だからだらうけれども ー
太く恩に被せるやうな。誰が知るものか。それだ
のに、人にすねるやうに言つて、少々ひぞつて居る。

ー おほせらるゝまでもない、旅館の料理に
は、めつたに小魚類を使はない。注意に及ばず、煮
ても、焼いても、鰈は出すまい、と思つたけれど、
念のため断らう、と矢野が云ふと、いや／＼、そん
な事を言つては可厭、饒舌ると承知しないから。

で、誰も鰈が何うしたの、恚うしたの、鱈が裳へ搦んだのと、そんな、そんな因縁を説明して、故に斷る、とも言はないのに、言つては可厭、と怨めしさうな目をして、ツンとすねる。

右様な次第で、黙つてご馳走を逃へる事にした。が、生憎、をぢさんは鰈が好きで、當方から申出で、二度も三度も取寄せた覚えがあるから、帳場で氣を利かして、やけに鱈にして持出しはしないかと、何だ、何だ、くだらない。

くだらない次手に　　いや、くだらない次手などといふと又叱られよう。今日は温泉に入る前に、髪を結直したいと成程。

「汽車のまんまだし、明方の亂れの舞で、目に立つと悪いほど、もつれて居る。幾度も鬢櫛は使つたけれど。　　其處で、お巳代どんに頼んで、いよ／＼髪結が來るとなると、お李枝が、ワキで見て居られては可厭　　よく、可厭だ可厭をいふ人で、何處か、あいた座敷を借りたい。女中さん方の部屋でもかまはぬ、とさ。」

これは、故と謙遜したのでも、プロレタリヤたることを標榜したのでも何でもない。震災に直面して、一度は、くるりと袂端折で、竹杖をついて焼原を歩行いた覺悟があるし、踊の師匠の住居だから、小綺麗にはしてゐても、おの／＼長屋住居の身は、はじめから此の段は徹底して居る。

勿論、そんな遠慮には及ばない。今日は團體の客もなし、空座敷はいくらもある。第一引越して来た、すぐ二階の黒猫の座敷もある。けれども、をぢさんは、自分の目の届かない處へは、片時と雖もお李枝を一人で置くのが危まりました。いふまでもない事、そんな恐怖がらせはおくびにも出しつこはなかつたけれども、何となく「長太居るか。」「」が附絡つて居て、日中と雖も、三階の魔所から出て来て、悪戯をしさうな氣がしたからだつたさうである。

尤も我が座敷だけは、城郭の氣のしない事はなかつた。

髪結が来たのと入違ひに、矢野は洋杖を持つただけで、身軽な着流しで、中庭から庭下駄で出た。

唯見返ると、衣桁にたぐりよせ、たゞみ掛けた、色とり／＼の女ものが――つい以前まで、焼山を轉げ出した岩の欠片が、止むことを得ず禪定に歸したる状の鞆一つ、殺風景だっただけに、一層、媚めかしく、艶に和め彩られて、其のけば／＼しからぬ落着さへ、描いたよりも、寧ろ刻んだ落着きがあつて、藍の勝つた三度摺の江戸繪の、彩壁に似る。

従つて、其處を出たものは、浮世繪の女神の堂守が、化粧の室を覗いて追出された形があつて、ぶら下げた洋杖に、破れ傘一本の趣きがある。

頭をたゞくかはりに、矢野は帽子をおさへて出掛けた。

何と
そんな小説家は、時刻もかれこれ
其の頃だし、卵塔場の前へ突出して、大河豚の背筋

を割く、黒血と腸をお目に掛け、瞠目驚歎せしめて、
凄いと、毒だとか、咳かせるとともに、爺的等の
拳でポカ／＼と撲らせてやれば可かつた。

が、聞き覚えのない處を見ると、ぶら／＼歩行が、
其の方面へは、顔を出さなかつたものらし。

残念だ。

其の洋杖一本が、漂々として、宙に浮いて、軽い
やうな、然うかと思ふと、一足あるくのものにも、双の
肩に、柔々と綾絹の凭れかゝるやうな氣のする、た
とへば、間に合せの衣紋竹のやうな男が、町中のト
ある自動車屋を覗いて、「相良と云ふ人が居ま
すね、持場は何處で、せうか。」――自動車屋
と雖も、モダンとは限らない。澤庵で茶漬を食つて
居たかみさんが、あの人は停車場詰だと答へるのを
聞いて――暴風雨からまだ逢はない。遊びなが
ら出掛けよう。すぐ其の自動車屋から、――向
うの駄菓子屋で将棋をさして居た、運轉手を呼んで
貰ひ、乗出して停車場へ。客待の四五臺を覗いたが

相良運轉手の顔が見えない。また尋ねると、七尾へ客を送つたと言ふ。偉い。

昨日の團體は、無論、鴻仙館へもなだれを衝いたから、無理に働いては居たが、金兵衛おぢいは今日は寝て居た。――

待合室の窓の外に、砂利で圍つた花畑に――
菊の苗が細く揃ひ、こゝの躑躅はもう散つたが、すゞ蘭が咲いて、ほんのり匂つて、盛りは、紅と、黄、紫のチュウリップ。

さきの井戸側の幻影と、この曙の移香が、一齊に身に沁みた。

チイ、チイ、チイ、チツ！

停車場の屋根はづれの、電線のたるんで低い、柱の横木の、際どい端に、力のありたけ絶つて、仔雀が一羽、一天の五月の陽氣に、鳥の可愛さの珠になつて、抜け出たやうにぽつと光りながら、唯、たゞ

一羽は寂しい。

息の立つほどに羽を振つて、まだ白い頸を膨らませ、嘴をありつたけ、

チイ、チイ、チイ、チイ！

と聲を絞る。

「何うした、何うしたよ。」

親鳥を呼んで鳴くのである。

「おつかさんを慕つて、一生懸命なんだな、其の尖端は危いぞ。たつた一羽は何うしたんだな。」

忽爾、背の高い巫女の影が射したやうで、はつと遠近に目を注ぐと、二條の鐵路に、添つて、其の影は、三つに分れ、二つに消え、一つ遙々と白い堤防の打曲る山際へ陽炎のやうに吸はれて行く。

時に返照ヶ嶽、鉦打山、蓬達ヶ峰は、僅に一青の海を残して、三方を繞り圍む、其の山々は、俱利伽

羅を續きに、雲の立山を通して黒姫山、妙高山、白根のわたり、安達太郎山、磐梯山、田代、岩木の嶽を駈け、刈田、閉伊の奥を分けて、八甲田にも連ならう。――遠き陸奥の空を思ふと、驛の彼方に、沈々寥々として、水の幻に眠れる如き、白晝の大沼の、蘆を分けて、ひとり漕ぐ田舟をさへ、我か、他かと思ふまで、矢野はしばらく夢見心に、茫然として佇んだ。

「あゝ、いろ／＼の世と時をすごして来た、――」
白山は別に、尚ほ高い。

「前途は遠い。」
「思はず右の手を擦った、愛撫し且つ精勵するやうに。――」

チイ、チイ、チイ、チイ、チイツ！

目覺る聲に、傍に古井戸のある氣がした。

「落ちるなよ、落ちるなよ。――おつばいが欲しいのだらう。」

そゞろに、襟を片手で開いて、胸をさしむけたと
思ふと、旅の姿の蕭條たるに、瞼にひとり春たけな
はなる血が上る。
襟のつゝしみ深けれど、
今朝のお李枝は、乳のあたりあらはであつた。

「ぢやあ、左様ならをするよ、可いかい。」

チイ、チイ、チイ、チツ！

「かはいさうに、母さんは何うしたよ。」

もののははれに、曇目に、停車場の屋根も朦朧と
して、人も自動車も何にも見えない。

仔雀ばかり、乾坤に唯一羽。

ひよわな脚を、しつかりと危なつかしさうに横木
を踏んで、そつと、居直つて、嘴を向けると、其の
向けた方を裂くやうに大きく鳴いた。

チイ、チイ、チイ！

雲くもが又また分わかれるやうに、廣ひろ場ばを眞ま向むかうに間あひだを離はなれて、
張はり出だしの下げ屋やの廂ひさし、石いし屋や根ねを、五い六ろ羽はちよん／＼と
飛とび、ちよ、ちよんと匆はねて、入いり交まじつて遊あそぶのが見み
られた。

「何なんだ、あすこに居ゐるぢやあないか。」

矢や野のは洋ステツキ杖わきを脇わきにそばめて、つか／＼と廣ひろ場ばを横よこ
切ぎつた。

「おい／＼、子こどもが呼よんでるよ。」

雀すずめは知しらん顔かほで、石いし屋や根ねに飛とんで居ゐる。

「あゝ、然さうか　ー　もうひとりで餌えが拾ひろへる
のに　甘あまつたれて居ゐるのか、　ー　然さう
か。」

「入いらつしやい。」

すなはち驛えき前まへの休きつ息そく所じよだ。鳶とび烏からすに驚おどろかさればしな
いだらうか、あの弱よわるまでに鳴なきこがるゝ仔こ雀すずめを、

且は見張りをする氣。軽く紅茶を取つて、端近な椅子で息むうちに、汽車が着き、汽車が出る。

人瀬を流し、影が淀む、出入の混雑に紛れたらしい。いつの間にか、鳴聲が止んで、今度は停車場の屋根に一群の雀が集り飛んだ。

「あゝ、居たね。」
些とをかしな挨拶だけれど、再び中庭の内玄關から歸り、廊下を一廻りして、襖を開けた時、早や湯上りの袖の香が次の室に、ふはりと漾ふ
其の座敷の縁に向いた姿見の前に、浴衣に伊達巻した背後むきで、鬢をなほして居るお李枝を見ると、渠はうつかり然う言つた。

歸途の自動車の途中から、旅館に行つて見よ、そのはずみにか、ふいと消えて、海へか、山へか、お李枝がなくなつて居はしないだらうか、と唐突にそんな氣がして憂慮はれたからであつた。

—— 思つても見られよ —— あの、白濱橋の

危難とも言はば言ふべき暴風雨から、僅に遁れて歸ると同時に、思ひがけず、片門前の娘を此處で見た時を。――

―― 神か、魔か、一指を操つて、浪に自動車を驅つた、全身濃き影の如き怪しき婦人が、神通、魔法を以てして、一枚、藍の光つた、肩の銀杏の葉を呪して、此の美女を顯現せしめたとばかり驚かないでは居られなかつたであらうから。

「お歸ン

」

とともに、片膝、ずらして振向かうとして、聲が消えたが、

「可厭。

」

濡手拭を髪にのせて、鬘をかくすのと、肩を振つたのと一所だから、白地の柳がはら／＼と姉さんかぶりに、頬にかゝつて、姿見の影に一靡き。

薄化粧の美しさ。頸脚は背筋から居ずまひを雪に貫いた。

「結立ての髪がこはわるぢやあないか。」

衣桁を楯に、―― また破傘一本で御堂を開かせられさうな権幕に驚いて、あけらかんとして敷居に立ちながら、矢野が言つた。

「手拭をやつと、はづすと、

「ご免なさい。」

と、うつむき状に、颯と紅く映えたのは、結綿の切ではない。耳許と其の瞼―― で、お李枝は白の丈長ばかりの低い島田に結つて居る。

「藝妓家まはりの髪結さんだつたんでせう。――

（とちからが入つて）東髪はとてもこなせないと言ふんです。此の邊はまだ堅いんですつて。其の髪結さんがハイカラを結ふと、あのどちらから見ても、をかしいんですつて、何ういふわけなんでせうね。どちらから見ても、をかしいんぢや、あたし可厭ですもの。

その時ね、―― かあさんが病氣をして――
一寸、極つたおさらひの日なのよ。私

が後見の眞似をした時の事。」

と、
手拭の端で、頸もとの細い汗の銀粉を、とん／＼

「こんな髪に結つた事があるんです。然うすると
今朝でせう。」

でせう、と又ちからを入れる。お化粧を直し／＼
言ふのだから、些と辻褃が合はないけれども

「お弟子さんが三番叟を踊るのに、うしろへちや
んとついて居ると其の子が踊りながら、段々小さく
小さくなつて行くから、あら！と思ひますとね、
其子が私にかじりついて懐中を探すから、可厭、く
すぐつたいと身ぶるひをするうちに、」

きりりと褌を引合はせた。

「足に引搦まるぢやありませんか。ぞつとして
聲を立てると目が覺めて、それがあの鰈だ
つたんでせう。」

「と、またちからがはひる。」

「どうも、今の手拭さわぎで、白粉の、のりに、む
らが出来た氣がするので、—— 結立の湯上りだ
し、彌々水の滴れさうな島田の根に觸つて見た白い
指で、もう一度襟脚を撫でながら、

「をぢさん。」

「思はず氣に振向くと、敷居際に立つた形が見えな
い。たゞし何處へも出て行つた様子はない。」

「何をしていらつしやるの。」

「拙者か。」

「と、何だか聲がはりでもしたやうで、

「拙者は、口と咽喉へお化粧でござる。」

「と、衣桁をはづれた、右勝手の隅の方で、カタリ
コトリと行る。」

覗^{のぞ}くと、お李^{りえ}枝^えは、少し^{すこ}膝^{ひざ}を浮^うかせて、見えぬやうに密^{そつ}と

「あら、」

と、ツイと遁^にげて、もとの姿^{すがた}見^みに正^{たゞ}しく、

「可^い厭^やだ、悪^{わる}口^{くち}を言^いはうと思^{おも}つて。」

茶^{ちや}道^{だう}具^ぐを置^おいた棚^{たな}を探^{さが}して、ウヰスキイで――
成^{なる}程^{ほど}口^{くち}の化^け粧^{しやう}をし^して居^ゐる。此^この鑷^{びん}も、ありやうは
バスケツトの中^{なか}に鯨^{しや}立^たで轉^{ころ}がつて居^ゐたのが、いつの
間^まにかお李^{りえ}枝^えの手^てで、隣^{りん}國^{こく}の名^{めい}産^{さん}、九^く谷^{たに}焼^{やき}の金^{きん}々^々た
る中^{なか}に、瑠^る璃^りの光^つ澤^やを顯^{あら}して居^ゐたのであるが。

「あの、ね、それで、私^{あたし}、つい島^{しま}田^だと云^いつて了^{しま}ひ
ましたの。其^そのおさ^さら^らひの時^{とき}と、三^{さん}番^{ぱん}叟^{そう}と、夢^{ゆめ}と鯨^{かれ}鱈^ひ
とが、ふら／＼と一^{いっ}所^{しょ}になつて　　ご免^{めん}なさ
い。」

「罷^ま成^{かり}らん。」

と恐^こ怖^はい聲^{こゑ}をし^して、硝^こ子^っ盃^ぱを片^か手^{たて}に、づツか、づ
かと打^{うち}通^{とほ}り、

「圓鬚なら、仔細ないが。」

「ふ、ふ。」

「——と瞼のふくらむまで、又

紅くな

「島田とは怪しかり申さぬ。」
と、どつかと坐す。

「だつて。」

と向うを向きしなに、あはせかゞみの手が白く撓

「李枝ちゃん。」

をぢさんは、備へつけの座敷机に肘をついて、

「然うして見ると、可なり腰まはりに部があるな、
ふつくりとしたお尻だぜ。」

「知らない。」

「いつも細りして居るし、今朝抱いた時は消えて
居た——あゝ惜い事をした。あの時それに氣が

ついたら。」

黙だまつて襟えりをスツと扱しこくと、急きふに立たつて其その腰こしが消き
えたやうに、次つぎの室まへ、半なかば浮うくやうに、ふいと澄す
まして隠かくれた、襖つまと音おとも唯たゞ蜉か蟷げろの羽はずれにして。

「大丈夫だいぢやうぶ、大丈夫だいぢやうぶ。」

と火鉢ひばちの縁ふちをトンと音おとづれ、

「消きえて居ゐたんだよ。―― 裙すそは消き

えて、浪なみが見みえて、そのかはり、一面いちめんに、蓮はすの花はなが
紅白こうはくに咲さいたから、此この海うみが、パツと不しの忍ばすの池いけに見み
えたんだよ。

向むかうの島しまに、龍宮りゅうぐうのやうな御堂おだうが見みえてね。意い味み
が分わかるのね。――

あの、去年きよねん、夏土用なつどようの炎天えんでんさ。炎天えんでんは眞晝まっひる間まだが、
その可おそ恐ろしい暑あつい時とき。―― 十時じゅうじごろ、夜よるになつて、
李枝りえちゃんが、小石川こいしかはの我家うちへ來きたつけな。おかあ
さんがいゝと云いつたから、お約束やくそくの蓮はすを見みに、

連つれてつて、と云いつたらう。

毎日、九十度以上と云ふ、暑さには弱るし、稼ぎには疲れるし、寝不足だし、うつゝにへたばつて居た處へ、夢枕に立たせられたかと思ふお言葉さ――
ものが、不忍の蓮見だけに。――

さらりと伊達巻を解くのが聞こえる。其處へ遁げた急な身じろぎの今とて、又かすかな蜉蝣の息づかひ。

「あの時は弱つたよ。」

「次の室は、まことに静肅。」

「成程、考へて見ると、其の以前、
おつかさんたちと一所に、ご飯を喰べた時、入谷だの、團子坂だのの話を――李枝ちゃん――
李枝ちゃん。」

「来ては不可い、まだ帯が緊りません。」

「殺生禁斷の場所だね、――道理で、足もと

に魚が刎ねてる。」

「可厭だ。むず／＼する、ご覧なさい、下へがずれたぢやありませんか。」

「不忍の話をして、蓮見に行きたいと言ったから、偉い！　と思つた。近頃では梅雨時に、紫陽花が少なくなつて、山の手住居の樂が一つ減つた、――入谷と云つても朝顔を思出すものも少なくならう。」

それ、李枝ちゃんが、今度和倉へ

奮發、――冒険か。大旅行をする機かけに

なつた、電車で逢つたと云ふ二人ね。何うも背格好、様子が似て居る。一人の目の大い人は、山の手に邸があつて庭が廣いから、私の許の南天燭だの秋草が里子に行つて、つけ届もしないのに、優しく育てて居て下さるんだし、もう一人は淺草に生れて淺草に育つたから、蝉を知らない――嘘ぢやあない、蝉を知らない。が、朝顔が大好きです。其の（朝顔）を題にした、露のやうな優しい小説さへある

んだがねう。――震災後、日暮里へ越した處が、
諏訪の社のあたりだから、場所といひ、町にも道に
も咲きさうなものが、何處の垣根にも、鉢植にも咲
いて居ない、といつて、寂しがつて居なすつた

と云ふ世間になつたよ。

處を不忍の蓮――と来たんだから、

杯を上げて賛成せざらむと欲するも得んやだつたら
う。劇場歌舞伎に行くのが貴婦人令嬢とすると、も
う今ぢや、蓮見の娘は、天人の部だと思ひ候へ。尤
も、蜻蛉ほどの羽衣ですがね。」

「
覺えて居るから。」

「あゝ、わすれない、あの時の約束だ、忘れはし
ないが、弱つたよ――暑さにまゐつて腹工合は
悪し、酒はのめず蚊にばかり食はれて、
のつそりして居る。蚊遣がと云ふとね、其のお盆に、
李枝ちゃんくれた、瀬戸ものの藁屋葺一軒さ。破
れ障子と、破風の窓から、兩方へ、ふツと煙を吹出
すのに、渦巻の線香が仕掛けになつて居ようと云ふ。

「あれは何だね、矢張り片門前の内にある、一家の箱庭から案じついたものらしい、な、小宅も其の通りさ。其のあばら屋へ、夜中不意の、來臨。さあ、づつとといった處が蒸々して堪まらない内だから、門の縁臺へ連れ出すんだ、お待ちよ、一つ家のあばら屋へ來臨で、縁臺へ案内と成ると、天人よりか、お月様の影らしい。宵でないから、三日月でないとする、さうだ、二十三夜様だよ。」

一夜、月のお宿をした。嬉しかった。ゆかたの秋草が、蚊帳の中にしつとりと咲いた。

夜あかしは平氣だが、何しろまるつて居る處へ、翌日の稼ぎがある。自動車で飛ばして直ぐ歸れば、とをばさんも言つたけれど、揚出しへ寄らないぢやあ、寄れば酒だし、内へ歸つて、

茄子汁ぢやあ寸法がつかないし、あやまり入り候て、朝歸るのを、引留めて、内で行水をつかはして、家内の鏡臺で化粧をさして、此の計略すべて無錢だね。あまり不本意だから、歸るのを送りながら、方向を深川へかへて、月島で涼んだ

つけかな、あの月島の橋の袂へ、をばさんと三人で
立つた時は、佳い風だつた。洲崎の蘆から、鶺鴒の羽
搏くやうなモオアが聞こえて、暮れかゝつて、波
が石垣を、裳まで煽つた、が、ツツツと、何故か紅
白の蓮が開いたやうに見えたよ。

―― 今朝も、其の通りさ、膝の上で紅白の

あゝ、丁ど此のくらゐに暮れかゝつて、
月島が。」

小説家はむくと起きた。夢を見たのではない。ド
タリと寝轉んで、襖越しに饒舌つたのが、お季枝の
水際立つたお太鼓の帯腰に、吃驚して起きたのであ
る。―― お師匠さんのしつけと言ひ、身じまひ
のあとを、伊達巻で居るやうな女でない。

ちやんと手をついて、

「お歸んなさい。」

停車場から歸つたのを、いま更つた挨拶に、

「何、なに 歸かへる！」

と吃驚びっくりして、自分じぶんで呆あきれて笑わらひながら、其そのうつむいた島田しまだを見みた。

「プラチナの簪かんざしは。」

懷紙ふとろがみに挟はさんだのを、キラリと抜ぬいて、

「まやかしょ。」

「おゝ、蓮池はすいけを、天人てんにんが、蜻蛉とんぼが飛とぶ。」

と、たそがれの火鉢ひばち越こしに、浪なみかげの机つくえに取とつた。

其處そこへ―― 鰈かれひのない膳げんが運はこばれた。

半夜

「新に燭を取つて明るくして
と云ふ處
だが、電燈だから其には及ぶまい。
尤も惡
く捻ると消える。」

と、口は串戲のやうに言ひながら、矢野の酔覺の
目は水のやうに澄んで、熟と瞳を注いだ南天燭の
根の、其處にみだれた花は、雪のやうに色も冷か
ある。

敢て南天燭の根と云ふのは、机の上に一幅の掛物
を、半ば以上巻込んで、其の南天燭の根に添へた、
らく款の女文字を、凝視めて居るからである。

床の間を背後に相對して、お李枝は、一筋のおく
れ毛もなく、端正と袖を膝に重ねた處は、此のをぢ
さんが先生だと、弟子も綺麗ごとの繪の門人と云ふ
姿であるが、目も放たず、掛ものを見詰めるのを、
その姿態で居て
言ふことを聞くがい。

「まるで、をぢさんは、刀の詮議と云ふ様子だこ
と。」

其の先生の威嚴のなさ思ふべしで。

「あら、違ひました。小倉の色紙か、

鷹の一軸つて、處だわね。寶の詮議に諸國を漂泊つ
て居るつてわけなのよ。何が似合ふでせう。武者修
行か知ら、六十六部か知ら、山伏か知ら、それとも
歌、俳諧の

「手取り早い處は、坊主だよ。これで破法衣を
着て、笠をかぶつて、餘程氣取つた處で、唇の下で、
紐をしめれば、すぐに一人前さ。草鞋でなくても、
跣足で間に合ふ。何なら障子を開けて、
縁側から驅出して見るか。」

と苦笑しながら、尚ほ其の注視を怠らない。

「然うすると、すぐ其の海へ紅白の蓮でせう。」
と島田を斜めに顔を覗く。

「いやな事を云ふなよ。不忍の池が、月島へかはつた處で、たかが、お約束の二割引だ。」

「五割引。」

と嫣然とする。

「ふゝ、それでも、入谷や團子坂で、フイにしなかつたから可いぢやあないか。」

まけをしみは言つたものの、ど、うもいよ／＼威厳がない。

膳の上の晩酌で、お酌をするのから、長者とも、學者とも、先生とも、従つて此の男を小説家の待遇でない。勿論、世に名の轟いた、大家名家にした處で、小説家の待遇と云つて、さて何うするのさ、と聞かれれば、其の大家名家だつて、分りはしない。が、とに角あたりが、其の、そんな待遇でない。

早い處が、さつき膳を引くと、さつさと立つて

―― 昨夜一昨夜より、づつと遠慮がなくなつた

と見えて、次の室の戸棚を開けると、もう要害を心得て、其處に用意のある敷蒲團を一枚、袖で扱いて持つて出て、火鉢を離れた方へ支き膝で繰伸べた。

其の火鉢は、大抵襖越に備へつけてあるのが例で、上品な客は――そんな事はしない、――運びで給仕をさせるのだけれど、爛も飽迄熱いのが好し、鍋のものなら、直接掛けで箸を突込め、で、これは昨夜だっけか、敷莫蔭ぐるみ、チン／＼ドン／＼と、押出す方のお李枝が言ふから、手傳ふ方の小説家が、おい来た、チン／＼ドンと引いて来た――それと、机とを定規形にして、而して其の火鉢へ、膳の聯絡を取つて居たので。

――次に掻卷を抱いて出すと
すぐに
枕を持つて来た。

其の時は、嬌態がなからうが、肘で小突くやうだらうが、お酌の嬉しさに、とろりとして、火鉢に頬杖で、「ご免を被る。」何しろ大切なお客分一應挨拶の上どたりと胡坐で居た矢野が、思はず、兩

手を膝へ引いて、瞠目した。

「ふすまは女の城郭である、枕は飛道具に相應しい。宵から、自ら、其の門を開いて、飛道具を寝かすとすると、大きなりをした島田の新造が、と愕然とすると、

「お休みなさいな。」
と先づ澄ましたもの。

「癖になつて居るんでせう。悪い癖だけれど、晩飯におしきせが濟むと、すぐに寝る。」

成程　　「時々小石川の家へ來ても、然ういふ節は、對手ををばさんに任せて、ごろんと其の傳を行るのを知つて爲る、まことに内端な深切である。」

こゝは能登國鹿島郡　　「勝手が違つて澤山睡くもなかつたさうであるが、ありがたしで、何の功名もなく火鉢前の陣を引くと、それには及ばぬといふのに、煙草盆を枕許へ持つて來て、女といふもの

は、搔卷の裾を押へる。

「これは、恐縮。」

「あら、生意氣な、口を利く

はてな？

唯、柳のしだるゝやうに、枕許へ膝をつくと、高
い天井の影を籠めて、島田が寂しく見ゆるまで、急
に年増だつた頬を寄せて、肩を落すと、雪に薪木を
抱くやうに、眞綿觸りの袖の香で、瘦せた榎野郎の
肩をすりと撫でて、

「坊や、寝ねおし、寝ねおし、いゝ子の坊や、寝
ね、寝ね。」

思ひ得たり、話の端に傳へ聞く師匠か、をばさん
かの、人形ごとの直傳である。

と打笑まるゝと、同時に、惻然として思ふ。誓

ー ー 渠が幼き時、母は都の娘だつたが、北國の
冬の破屋に、朝炊ぎの薪木にも、吹落ちて雪の積つ

たのを　――　兒ばかりは暖かく袖の愛に包まれた。

涙、つとさしぐまれて、人形がそゞろに動く。

――　寝かして置いて、鐵瓶の下をいけると、ほ
てるとかで蒲團も敷かずに、机にうしろむきに凭り
かゝつて、小遣らしい、持參の萬年筆に小指を匆ね
て、紫　表紙の手帳にのしかゝつた。が、それに
しては、旅行案内を引合はせに開いてある。おや/
旅日記と云ふ洒落が知らん。

「可厭だ。」

と急に立つて、背を柔かく振向いて、

「見るんだもの。」

「お尻が大きいでせう。鳶が出来ないわ。」

女の國では、鳶といふ。男の目には素足である。

「むかうへ行くわ、ご免なさい、旅ですから。」

で、向うむきに、床の間に座を取った。が、はじめから用心は届いて居る。其の掛物は、鯉でも、鯉でもない。雲あし早き雨空と云ふ艸書の、詩の二行半ばかりで、をぢさんに讀めないのだから、たとへば、鯉が戀の字でも、互に見かはす顔と顔でも、お李枝に取つて一向に無事なもの。

しかし、人形の方は無事でない。

其の澄ました筆の取りやうに、胸のあたりが、むず／＼すると、本来の約束は、こゝを壓せば泣くだけでなく、からくりの酒が廻つて、ぜんまいが利き出したから、足が突張つて、ドタンと疊へ出る。

「あら。」

ぱつちりと上目で見越して、

「お引込めなさい、かぜをひかせると、をばさんに申譯がありません。お引込めなさいよ、

引込めるの。いゝ子、いゝ子。――まあ、引込んだと思つたら、また出たのね、いけません。――

どうも世話のやけること。」

と起つて来て、ぐツと襟巻の裳を引被せて、

「言ふことをきゝません、——こゝは、いや
アナ子、いやな子、いやな子。」

と其の裳をバタ／＼と邪慳に敲いた。其の手を肩
へそツと當て、顔をさし覗いて、

「こゝは、いゝ子、いゝ子

——あれ、人がほめれば目を剥いて、

いやな子、いやな子。そんなら、捻、捻

一寸、何、其の指で缺を拵へて、兩肘を突張つて、
突出して？」

「蟹。」

「挟んで見る

噛つてやる。」

言の荒さを、色が消して、眉はかへつて臆たける。

静まりかへつて、温泉の湧く音と、波の聲が、さら／＼と聞こえる時、鐵瓶も松風してゝ――静かに餘念なく、手帳に運ぶ、其の机に開いた旅行案内の、折りめの刎ねるのに、簪を鎮めに置いた、半襟の江戸紫を、寢たつもりで搔卷の肩當から見て居る人形の目には――かげるふ日記――は他事でも僭越だけれど、あの羽は今何處を飛ぶ、信濃路の山、越路の海、蜻蛉紀行の娘ほどの氣品はある。

ハタと、寢て居られない事を懷つた！

「やあ、其のまゝ。」

あたりのものの身に沁みるため 着る氣
で寢々子半纏を小脇に絞つて、起直りしなに、先づ、
然う聲を掛けて――足袋六の所謂いゝ事か、わ
るい事が存ぜぬが、上座の床の間に据ゑるやうに、
片手で壓へながら、火鉢に向つた。

「お認めの中で恐縮だがね、何、つれ／＼に
と云ふお姿にも見受けるから、推して苦舟
から出て参つたよ。――唐突だけれども、一寸

眞面目に相談がある。」

「旅費？」

その語氣の強さに、をぢさんは面くらつて、肩を引いて、

「えゝ。」

「旅費の事」

と密と言ふ　　「――眞面目な事は、をぢさん以上

で。　　あゝ、お互に、くらしのさもしいな中
の人知れぬ其の思ひやり、涙ぐましいばかりである。

「似た事だがね、」

と、さすがに、しかし微笑まれた。

「片道、はつ／＼なんでせう。あたし。」

「あたり前さ、すべて、それがしの背中だもの
　　そんな千早姫を負ふらゐ、彦七當分聊も
驚かない。心元へ懐劍を當てられるなんぞ、泰然自
若としたものだよ。早い處が　　一寸、其の懐

中ものを貸しておくれ。」

「すぐ手が届く、床の間の亂箱から、

「はい。」

膝に取つて、先づ置いて、

「怪しからん移り香だ　　はゝあ、同居を

して居た、光榮です　　――　　其の李枝ちゃんのを、

「

「あたしの　　可厭だ。」　　「いゝからお

見せよ。」

「　　此の絲錦の綺麗なのは　　お

澄をばさんに貰つたのよ。」

「何でもいゝからさ。」

「可厭だ、あたし。」

と肩をくねつて、

「困つちやう

見せられないものが入

つて居る。」

「大切なお守りかい。」

「お守は構はないわ、見せたつて。」

「ぢやあ臍の緒か。はてな？ 女に限つ

ては臍の緒を言ひたくない、乳の絲 慌て

ると納豆と間違ふ。緒の臍、緒臍、何だ矢張り。」

「可厭、撥つたい。」

「笑つてる處を見ると――分つた、役者の寫

眞だ。映畫か、歌舞伎か。」

「そんな事をいふんなら、さあ。」

「これ、邪慳に扱ふものぢやあない、大切な、お
ん紙入」

手にほの暖かく、紫地は、鐵瓶の湯氣を吸つて、

しつとりと露の重さに、千種の秋の折目を返す、銅

貨の音も松蟲である。

「何だ、新聞だか、雑誌だかの切抜ぢやないか。」

賭場の見せ金といふいかさまものだな――おや、

「おや、おや。」

と頬を凹ませ、弱つた顔して、額を抑へた。

「李枝ちゃんの懐中へ入つて居やがる、此奴は堪まらない、氣障な野郎だ。」

「氣障な野郎でも構ひません、――道中の氏神様。」

と、正しくいつて、目が清しい。

「藪神だね、一里塚で、馬の草鞋を睨んで居るんだ。せい／＼が森の祠で、狸と同居――つい

でに木の葉に似たもの。」

と、紙幣を折つて、お李枝の紙入へ衝と移した。

「――相談と云ふのはだね。」

「筆記だ――をぢさんの私が、此處で

氣取つて――いや氣取りはしない、謹んで

話すのを、其の通りに、原稿紙へ寫してくれば可い。

唯今、絲錦のお袂まで、そつとお目に掛けたのは、
私たちの方では、前借といつて、むかうから、これ、
作者には慎むべき第一です。雑誌社、書
籍店へ行つて、平にご高配を被つて恐れ入らなけれ
ばならない。處を、當方から進んで差出したのだけ
ら、意味が違ふ。

ご不自由もありますまいが失禮ながら、お使ひ下
さいませんでせうかと形式があべこべになつて、お
小遣ひを持出す方でいふのだから、受け取る方は偉
いんです。ご大儀、とかいつて、見識なものさ。何
うして／＼、大家で然も工面のいい人でないと然う
は行かない。前貸前勘だよ。碎けて言へば――
といふうちにも、婦人に呈するのだから、米鹽、薪
炭とは言はない。些少なから化粧料だ。白粉と炭
とでは、大層な相違だらう。

なか／＼のこと、近頃ぢや、東京で、地位ある、
令嬢令夫人が 對手によつては、此の筆記
をして下さる。 風説は新聞、雑誌などで
ご存じだらう、いづれも堂々たる、高女、大學出身

の名媛だぜ。

斷髮、洋装、耳隠し、飛模様と云ふ方たちに、机の向うに控へて貰つて、いと云へば、いと。ろ、と言へば、ろ。英獨佛、希臘、ラテン、梵語、何でもです。此方の聲がすら／＼と、寶石珠玉の指の中から、インキに成つて、銀線の如く晃々と顯はるゝと思へば、ぞく／＼武者ぶるひがするけれども、もつと、づつと作者のはうが先生でないといふ眞似が出来ない。をぢさんなどは及びもつかない。

其眞似をして貰ふんだ、李枝ちゃんに。――

聊か氣取るやうだが、此地なら構ふまい。和倉ぢや、をぢさんも名家の眞似だ。―― わるいか、いやか―― 何うした。」

お李枝の頸が段々にうつむいて、玉の輝彩のない指が、寂しく、白く、其の面を蔽うたのを視て、且つ驚いたやうに「何うした。」と云つた。

島田の根が幽に揺れる。

「可厭ではない、可厭ではないが——
あゝ、其の事が。それは心配には及ばない。時々、
をばさんの許へまゐる、おん水莖のあとを内見に及
んで心得てるよ。たとへば（澄）の水が、木に
なつて（橙）なんぞは洒落てるよ。飲
むかはりに食つて了ふから。たゞ細い筆で、きちん
と書いてある處が嬉しい。」

「一つ遣つて見ておくれ、早い話が、李枝ちゃんの
内で、こゝで土産もの一品買ふにして
は、をぢさんと聲をかけて貰ひたい。ねだつて貰ひ
たい。よう、と云つてもらひたい。其の方が勝手だ
が、それよりは、軽少だけれど、其の軽少なもので
も、自分の紙入から、つまみ出す
——拾出す——探出すか。お待ち
方が李枝ちゃんとしては心持がいゝだらう。」

「其上、女の言葉などを書く時は、此のがさ／＼
の手が、白く滑かで指が細かつたら、と思ふことが

ないではない。

是非頼む　　字か。字は私の方だつて、そんなに正しく知つてるものか。私がね、李枝ちゃん。」

矢野は座を正した。

「私の、先生の　　知つてる通り、偉い方だが、玄關へ、はじめて弟子入して坐つた晩、二階の書齋からつか／＼と降りて來なすつて、寒い時だ　　玄關火鉢を、ぐい、と割膝へ鐵拐に引挟んで、意氣だつたぜ。翌日、新聞へ出る小説の、第何回目かの口授なんです。」

（やゝありて挨拶に罷出でたるは、）

　　やゝは假名でいゝ　　

　　は　　

（此處に十三人の神官の司とは見るから著き服装なり。）

すぐに、眞赤になつて手がひツつる。

（官）か、

(司)か、(つかさ) が怪しい。(著き)
にまごついて、(服装) が覺束ない。

―― 司、つかさ、見る、偏のない方――し
るき、著、いでたちは服装――はッ

それだもの――学校の試験の落第には、意地
でも、けろりとして驚かなかつた奴も、こゝでは五
體に汗を絞つて、筆は軸まで震へが来る。其の十四
五字が済むと

(白羽二重の袷に白襟三枚襲ね、)

こゝは(襲)と云ふ指圖だけでどうにか運
んだ。すぐあとが事なんです。

(雲立涌の葡萄綾の袴の折目正しく、)――
どれ、見せな――

今度は、試みに、黙つて筆記をさせて置いて

文庫からお持たせと云ふ半紙を取つて、恚う脇を離れた袖を廣く、片手で翳すやうにして、その草稿を―――芬と佳い薫のする巻苳を横に啣へながら見なすつたつけ。(涌)が(棗)に間違つて、それさへ手偏だが木偏だか、猿が戸惑をしたやうな處へ、(葡萄)が、女學生の(蝦)になつて、折目の(目)が假名になつて、皆違つてら。手のつけやうがない。

先生は、其のまゝ、ふい、と立たるゝ。此方は目が眩んで、手も膝も突伏した。頭の上から、襖際で、―――喫みな―――と、其の苳の喫みかけを―――恩と威の影をあとに、縁側を行きなすつた大先生の姿は、雲に乗つて居らるゝやうに思はれて、涙がパラ／＼と流れたが、其の巻苳をのんだ時の心持は、甚だ以て不躑だけれども、口うつしに清涼剤と教を受け頂いた氣がしたよ。

あくる日の新聞に、其の一章の顯はれた時の嬉しさといふものを考へてご覧なさい。一字でも筆記を

したと思ふと、自分で出来たやうな気がして、全
國幾十萬の愛讀者に、さあ来い、とお目に掛つたん
ぢやあない 御本尊は二階で寝
ておいでの、其の玄關の障子の隙から、此方で、ち
よつと覗いたのさ。

と云つたわけだから、よく心得て居る。李枝ちや
んに筆記させるのに、字の違つたのなんぞは問題ぢ
やない。

丁ど、和倉へ来がけに、一新聞から頼まれた、と
云ふと體裁はいゝがね、頼み込んで引受けの相談の
出来たのがある。それを、此の旅行の記念にもした
いから ー ー 今夜から始めて見たい。

どうだい、頼まれてくれるかい。」

「えゝ。」

と睨に露を見せた、涙ぐんで居たやうである。

「嬉しいわ。」

「ありがたい。」

と、をぢさんも鼻聲で、

「あとで鯨を驕らう

どんなんだか知ら

ないが、看板は東京です。其の時茶を入れて貰はう

と

「――處でだね。――

おなじ筆記をして貰ふとしても、一應大體の筋道を、其の半襟の下へ入れて置く事にすると、何かにつけて、まことに都合が可い
鯨を、いま
言はうか。何、あとにする、

話と云ふのは――

（――長太居るか――）

能登の大狸の化けた話だ。」

「いゝかね、かたノ、念のために言

ふんだけれども、此の二階の廊下で呼んだのも、ほ、ほ、ほ、なぞと笑つたのも、みんな、私をなぶらう、からかはうとしてする事で、李枝ちゃんなんかには何の係合もないのは固より、事によると、李枝ちゃんが来たので、相手は遠慮をして、悪戯をやめたかも知れない、と思ふほどだから。

決して恐怖がつては不可い、いや恐怖がる事は承合つてないんだよ。此二三日の處置ぶり、何うやら、相手の様子が、軸を解いて、繪巻物でも展くやうに分つたのだが、李枝ちゃんがいま人形を寝かしてくれた時、フト目が覺めたやうに、此の波が眞白な雪に見えて、それと同時に、きつぱりと思ひ出した事がある。はじめ二階にかゝつて居た、南天燭の花と、猫の繪だ、私も見よう、李枝ちゃんにも見せよう、それから話さう。」

「電話で頼むと、二階はあいて居て、すぐ持つて来た、其の掛ものを——爾く冷たく、こゝに、顔の色の澄むまで見るのであつた。——

姫沼綾羽

却説――

「其の五割引結構ですよ――とに
角、一軸が、恚うして、電話一つで二階から手に入
つて、これが値が高くて、此方が漂泊の身で
めぐりめぐつて、能登の和倉で、うつくしい女
が一所だとすると、何うしても此處は情に搦んで、
李枝ちゃんか宿場へ身賣りといふ場合になる。」

「可厭だ。」

と色氣なく莞爾するのが、香氣らしい。これは呑
氣に違ひない。

をぢさんは、巻莨を横ざま吹かした。が、大先生
の煙の薰を残したあとだけに、其の香ひが別して安
ツばい。

「薄情だな、こゝは串戯にも愁歎場にならうと云
ふ處ぢやあないか。竄れて、ほろりとしながら、思
ひ入があつて、次室に覺悟に立つて行く」

「では、すぐ此の宿の女中にも何にでもなつて、働くわ。」

「その女中を言ふなよ。――待合や、カフェーの。――何うにかなる。」

と、ふと眉を曇らしたが、又笑つて、

「だから言つてるぢやあないか。――此の

一軸が安いんだから心配には及ばない。

――處で、今の――口述筆記。――に
いて、肝心の話だが私も波が雪になつた
やうに、別の目が開けて、思ひ當つて、急に取寄せ
た此の掛ものを見給へ。眞面目だよ。」

といふうちに、其の落款の朱の印に、灰がこぼれ
るのを、ふつと吹くのが、刀の目きゝ、美術の鑑定
には似もつかない。露店で古本を掘出さうとして、
焼焦が出来らあ旦那、と叱られさうな形
で、

「こゝに（くれは。）と署名がある。

たゞ、ふと思つたんだけど、更めてよく見ると、いよ／＼見極めが着いたのは、此の印だが、一寸目には、一字が、くづした（艸）のやうだし、＝＝菩薩といふのに似て居て、一字が、矢張り略した（舎）の字のやうだから、前刻から見て居るんだが、まさか、「菩薩舎」ではなからう。「艸舎。」なるほど、

「艸舎。」かと思ふと、然うでない。

これはクリスタンバレンだ。」

と火鉢の縁に灰を拂いた。

「お待ち――むかし其の宗旨が國禁で、犯したものは、磔、火刑、品川の逆釣、道後の油の地獄おとしなどと言つた時分に、内證に用ゐたとかいふのに、諸侯の紋にまでこんなのがあつたといふが、そんな煩かしいんぢやあない　これは羅馬字のAとHだ。で、勿論、私の想像が當つて、これが頭字の組合せだとすると、――

エツチ Hの姫沼。 Aの綾羽。 ー ー それは凄いやうな美人なんだよ。 十七八で、繪を上手に描いた。 ー ー 國漢文、本も讀める、外國語がすら／＼行く。 數學が出来て、書がうまい。 文章が達者と来て、素晴らしい、其の縹緻なんです。

綾羽が名で、雅名を、呉羽。 ー ー と云つた。 早い處は、唄の賤織にあるね、勿論、くれはとりあやにこひしきといふ、漢織呉織から出たものなんだけれども、内々、實は然うでない處があるんだ。

むかうは、女子部。 ー ー 此方は野郎で、學校はそれは別さ。 女學校の花園には薔薇が薰つて、此方の畠には、薄に、ばつたが飛んだんだが、同じ西洋人の經營して居る、私立の生徒さ、私もだよ。

綾羽嬢は高等師範。 矢野小僧は、高等學校。 ー ー 試験パスの目的で、私立だけでは扱が行かない、どう扱が行かないんだか、氣ばかり荒立つて居るから、別に又私塾へ通つた。 和漢英數の指南所さ。 そこで顔を合はせたのがはじめなんだか、何しろ久し

い以前の地方の事だから、通學は、塾生をまぜて、出入百二十人中に、女といつたら綾羽一人さ。然も其の美人。これは騒がずには居られない。町用水の小流れの岸を紫の袴が傳つて來るのを、アントニオこれにあいり　　來た、來た、來た、クレオパトラ　　

時代が移ると、今頃では却つて、玄米パンのほや／＼と云つて、變な聲で自轉車に乗つて銀座を歩いてても、サンドヰツチと云ふ廣告　屋が、行燈を腹と背中へくつつ附着けて廣小路へ立つても、誰も珍しいとも怪しいとも思はないが、其の時分の事だよ　　李枝ちゃん。

教會の傳道師か何かで、娑婆氣なのが、大道の辻へ出て、麩包を賣るのに演説をした。神の與へ給ふものを受けよサ、然うかつて無錢ぢやないんだが　　豆ほどに斷つて、水を飲めば、七日活きる！と叫ぶ聲が、頭髻類髻の左右に逆立つた中から口を割つて迸るから、舶來の鐵拐仙人が麥こがしを煉つて賣るやうです。買手ぢやあない、見物が、遠卷

に覗いて氣味を悪がる始末さね、

可いか

倅が耶穌教の學校に通ふといつて、檀那寺の和尚さんに父爺が呼びつけられる時分だもの

歐化の尖端、階子の天邊へ驅上つて、アラビヤの沙漠越に、羅馬、埃及を小手を反らして見て居るんだから、小野小町や、てるて姫か、此の頃流行るが、淀君なんぞぢや追つかない。李枝ちゃんはじめ、用のないものだけれど、バレエ、スエントンと云ふ萬國史で、それも奥までは讀めません。口許を行つたり來たりだから、凡そ世の中に、美人といへばクレオパトラさ。

其處で、其の用水べりへ、綾羽嬢の姿が顯れると、シドナス河へ燦爛として黄金の船が紫絹の帆に、龍涎香の薄靄を靉靄かせ、嬋娟また豊艶な腰元が、白銀の櫂を操りながら、虹を纜綱にして漕ぎ進んで來るほどの騒ぎだ。尤も時節だと、紫行燈の前後に赤蜻蛉の羽は白く光つた。李枝ちゃんの簪なんぞは、氣取つて言ふと、（クレオパトラの櫂）　なんで

す。
」

「可厭だ。」

と、旅行案内を颯と伏せる。

「大分に山氣があつて、鑛山ですつたの、相場儲けたのと、浮沈さま／＼の風説はしたが、藩の大士族の娘で、世が世ならば上臈です。」

—— 姫沼綾羽—— 第一名からして、綺麗ぢやないか。見た處で極彩色の鴛鴦だね。

處が、何うして おなじ彩色にしても翡翠の牙がある。嘴の劍が鋭く、羽返しが利いて、胸毛の緋が魔の炬火のやうに燃えるんです。で、自から許して、雅名が——（くれは）—— 任じて、クレオパトラは、凄からう。

此の雅名を用ゐたわけは、いま言った、和漢英數の塾中で—— 矢張其の頃の流行だつた、廻覽雜誌を起したのにはじまる。—— 一卷二卷には、

塾の先生も寄稿をしたが、號して曰く、奥田冷州

――冷州はすさまじいが、さすがに敵たるだけ

の見識がある。が、何うだい、呉羽に對して（安

東匂）、（安東庭男）だの、苦しいのが（安

東二羽）などといふのがある。劍術つかひの豪傑

の癖に、（にはう）とかなで名のつたのもあつ

て、一時に七人も出來たから驚いたのを覺えて居

る。

「其の（二羽）といふのは、をぢさんでせ

う。

こゝで又力を入れて、

「雞ツ子の時分だから。」

言ひ得て嬉しさうな顔をした。小説家は憚然とし

て、ウヰスキイの罫を間越しに睨んで、

「馬鹿を言へ――其の雑誌ぢやあ、これでも

選手だ。はじめからクレオパトラを敵にして居る

第一其の雑誌の題だが、李枝ちゃんも知つ

てるだらう、里見さん。――あの人たちが學習院時代に、廻覽雜誌を拵へた。坊やが集つたといふので（望野）、野を望むなんぞは洒落たものだけれど、そんな氣の利いたんぢやない。北國の地方だから。――（霰）――だ。それは威勢のいゝもんだからね。文章の持寄りだから、（呉漢）はまだ恕すべしだが、一字で（綾）。と主張した軟派が多かつたのを、さすがに敵だ。綾羽が（霰）に賛成した。其處で、それがしが其日の装束は、紺村濃の直垂か、洲崎に千鳥の飛散つた鞍置馬で、名のつて、那須與一。は何うだい。」

氣に入つたかい。氣に入らないかい、――どつちみち大將分の名ではないけれど、大將となると、お手近な大將なら判官殿から、早死をした重盛。源頼朝ね。敵役の北條。――源平、盛衰記さては、やがて淨瑠璃になつて、たとへば星の晝見え。夜の大星などとなると、雅名に借用どころか、雑誌は其の人たちで食つてるんです。――その人たちで。

尤も私たちは、大なり小なり皆親の脛を噛つて居たんだから、食ふのではないが、その人たちで活きて居たんだ。やあ、討死したのが早い、遅いの、壇の浦で、辻つたの轉んだのと、性行の理非善悪、利害得失を論ずるのが、持寄り原稿の主要點だ。地方の人は理窟ばいからね。わかるものか。――少年に――ごまめの歯ぎしりと云ふが、霰に因んで、鴻の鮒がさかり時で、べちや、くちや、ぶつぶつ。

いや、話が外れた。

處で、その誌上の論議だがね、綾羽嬢のいふ處は、理路整正、意義明晰、漢文も自由にこなす、おまけに文章が巧いと来て、その上、少々こんがりさうな處へは、原稿に金銀泥の星が輝き、彩色で董が匂つてゐるから、見たばかりで絢爛目を奪ふ。處へ、家からが忍ばれて、平家のお嬢さんが書寫した經文ほどに、見るから貴い。

剩へだ。塾部屋の廣縁の端の安卓子を圍んで、

編輯の相談、會費の出しこなぞの時となると、

(おゝしんど) とか云つて、穩でねえ! 右の紫袴の紐を解いて、壁の折釘へふはりと掛ける。これですへ可い加減、おのゝ姉の行水より目が溢く、辛く、甘くなる處を、匹田鹿の子の桃色のぐるゝ巻か何かで、引傾いだ、ぐらゝ椅子へ掛けるんだから、膝が揺れると、下結の緋のところがお邸風で、品よくちらつく。

禁斷の果實も、これだと西王母の三千歳の桃だね。

行水のあとで、梨や、瓜の皮を剥くやう

なもんぢやない。

安東匂、七人をはじめ、同人残らず筋骨が弛くな

つて、唯何事も姫君(くれは)の思召次第。

大星が忠だといへば、紙上を天井にして駈け廻る。

義経が猪だ、と洒落に、逆櫓の聲色を使つてさへ、陣鉦陣太鼓を、アリアノゝとたゝき立てる。那須與一、これが黙つて居られますか。慨然として起つたのは矢野冠者、いや小僧さ。

まつ向、一から切まで、何でも綾羽に反對だ。が、
目ざす敵の女將軍は、クレオパトラに翼を添へて、
靜流の薙刀を水車といふ手だれだから、面を向く
べきやうもないが、此方は何うだい、滋籐の弓に十
二束二伏せの飛道具を心得て居るんだぜ、――
揉烏帽子引立て、薄紅梅の鉢巻して、生年十七歳、
色白く、

「ほゝゝ。」

「笑ふな。生年十七歳、いまのやうなをぢさんぢ
やあない。南無大八幡大菩薩、別しては下野國、日
光宇都宮、氏の御神、弓矢の冥加あるいいへくば、
あの、魔女、座席に定めて給へ。――處が、鶉
舞を見すいなで、一の矢もひよろ／＼、二の矢もひ
よろ／＼、でないことばないけれども、敵が迫いれ
ば乗つて遁げる、矢頃を見ては狙つて射る。
對手が魔だから、此方も鬼だ。青蜥蜴、螢の燐、
松蔭の田螺、などといふ鏃を飛ばして、人身攻撃、
匂の鼻の下が伸びてるの、二羽の眦が下つてるの、
とあからさまに、面疱を面疱といふんだし、爪の垢

を汚きたないといふんだから、これはこたへる。さしつめ、引きつめ、さん／＼に射い飛ばすと、千せんの矢やさきと降りかゝるもんだから、綾羽あやば嬢じょうだけは水車みづぐるまで寄せつけないまでも、幕下まくしたの面々めんめん、屈く竟きな猛卒まうそつ勇士ゆうしが、惱なやみ傷きずくこと一方ひとかたでかつた、と思おもひたまへ。

(撲なぐらう、おびき寄よせて、生いどれ、しめツ了ちまへ。)

相談さうだんが出来できたらしい。丁ちやうど、正月しやうぐわつ、新年會しんねんくわいを兼かね、討論議事相催たうろんぎ じあひもよほし候けい。呉羽嬢くれはぢやうも出席しゆじゆいたされ候けいこと、と念ねんを入いれたのを故わざと封書ふうしよにして ー 郵便いゆうびんぢやない、塾じゆくで安東あんとうの一人ひとりが、ニヤ／＼しながら手渡てわたしました。ぎよツとしたよ、随分ずいぶん怯おびえたのさ

ー 其その新年會しんねんくわいの結果けつくわが、夜中よなかの吹雪ふとぎに、私わたしが、大川おほかはのへりで打倒ぶつたふされた事ことになるんだが ー 棕しゆ櫛しが鬼おにに見える。卑怯ひけふで臆病おくびやうな奴やつほど、思おもひ過すごしをするもので、眞個まったくの處ところは、殺ころされさうな氣きがするから、此方こつちも傷きずぐらゐはつけて遣やる氣きで、内うちへは内證ないしよで、こゝが可笑をかしい。 ナイフでも事ことが濟すむ處ところを、萬事ばんじ子供こどもの戦爭せんさうごつこだ。 ー なく

なつた母親の持つて居た、塗鞆の短刀を、密と懐中へ呑んだ、は何うです。

尤も、此の殺氣が、自ら立つたのを、伶俐な綾羽だから、敏捷く悟つて、座席を駘蕩たるものにしたから、其の場が無事に済んだのかも知れません。

それ、討論會といふだらう。鴨越か、逆櫓か何か
―― 第一、場所が敵地でね まあ、東

京で言へば、山の手と下町で、しかし兩方とも大川添で、土地は低い。間に高い丘を一つ隔てただけに、狭い處で様子も違ふし、氣心も違ふ。不斷から人間同士餘り親みがない處い踏込んで、廣室に目に餘る人数に、味方は一人もない。いづれも安東匂一味で、顔も知らない、高等學校の―― 學生として
は皆お歴々が集つた。

處が、其の晩の幹事役なり、おもな世話人、と云ふのが、安東には最も響きの通ふ、安場嘉傳次といふんでね。――

「まあ、聞いたやうな名ですわね。」
ふと、お李枝が打傾くのを、事もなげに打消して、

「李枝ちゃんが聞きさうな名ではない。が、とに角、其の男は縣内の農家の子で、城下へ修學に出て居て、居る處が土地の大きな士族邸の素人下宿さ。

即ち會場で。席が廣書院といふんです。

私が町人の倅で、安場が農家だから、他がすぐつて、士族の若様の中で、おなじ敵ながら、何處となく心のとけ合ふ處がある、また氣のいゝ、目鼻も滑稽けた男でね。

「―― 耶蘇教の髯傳道師の、。パンの辻講釋なんぞまだるツこしいと その時代に、何うだらう、青短衣に、赤い洋袴で、胸へお祭りの太鼓を釣つて、胸の中へ、パンを仕込んで、生命の糧、神のパン。パン、パン、。パーン、と拍子を取つて、どゞんが、どゞんが、どん／＼と、山の手、下町を 刎廻らうといふ男だ。

其の、同宿の學生も勿論まじつた。―― 机を

書院に寄せ合はせて、方陣です。――四角に並んだ、議長。――何番といふ意氣込。出て居た煎餅も撮まず、茶もろくに飲まないで、堅唾をのんで、肅然とした處へ。――（おゝ、しんど、ほゝゝ。）

と此の正月、しん／＼と降り積る雪の中に、緋桃と鶯を一時に見るやうだつたのが、議長席を取つた綾羽嬢の呉羽女史で、（堅くるしいわ、眞中へ寄つて話ませうよ。）といふが早いか、座がぎつしりだから、――ぶんきんの高髻、裾模様で驚いた、床わきの丸窓をすつと消えて、廊下へ出たぜ。アツといふうちに、入口から眞中へ出て來たらう。否も應もあるものか。季節がら、繪がゐるたを掻集めたやうだけれど、冠も、烏帽子も素砲もなし、ひめは綾羽と三四人、額のかぢや澤山に、少々白雲頭の坊さんまで、むら／＼と集つた。

議論が濟むと、さうして座を寄せるのを相圖に、段取が出来て居たと見えて、二品三品づゝ馳走が來る、酒が出る。世話人の嘉傳次少年は、目をぱちつかせたが、追着くものぢやない、若いものに食ひものを見せては一堪りもあるものか。飲む

わ、食くふわ。

そのうちに、べろ／＼の神かみさん、と云いふのがはじ
まつたんだ。正直せいしきの神かみさんで、と同音どうおんに囃はやすにつれ
て、杉箸すぎばしに白紙はくしの振袖ふりそでが、綾羽あやはの手てで、くる／＼と
舞まつて居ゐる。それが、ポンと私わたしの胸むねへ來きた。どツと
囃はやして、飲のめぬ、といふのに、與よいち一ひけふ怯ひだ、那須飲なすの
め。どツと囃はやして、べろ／＼の神かみさんは　ー　綾あや
羽はのくる／＼と廻まはすのが、ポンと又私またわたしの膝ひざへ來きた。
どツと囃はやして、飲のめぬ、といふのに、與よいち一ひけふ怯ひだ、
那須飲なすのめ。どツと囃はやして、べろ／＼の神かみさんは、又また
それが、ふはりと頬邊ほつべたへ當あたつた時ときは、白しろい幽靈いうれいに舐な
められたやうに、ぞツとしたよ。

三日みっかの屠蘇とそにも、眞赤まつかになる奴やつが、こゝで話はなすと、
嘘うそのやうさ。其その毎たびに強しひつけられて身震みふるひをしな
がら漸やつと飲のむ。それも一人ひとりや二人ふたりぢやない。面白おもしろづ
くに、押おきへ、おツつけ、酌しやくをする。また、べろ／＼
の神かみさんです。不思議ふしぎに綾羽あやはの手てを離はなれると、宙ちゆうへ
刎はねて、ふは／＼、ひよろ／＼と白しろい袖そでが、じと／
＼濕しめりを帯おびて來きて、流ながれ灌頂くわんちやうの人魂ひとたまを見みるやうに、

ひやりと吸着く。

どツと噤して、與一卑怯だ、那須、飲め。

其の癖、一人々々が乗り出して、皆その神を授からうと、浮腰に頭を突出して、噤子の切目を待つてる圖といふものはなかつたよ。眞個の處、膝に手をちやんとして、懐中の九寸五分で、いやでも胸を突張つて居るのは、小僧一人だつたがね。

怪しからん、クレオパトラはと、もう酔つてるから、あからさまだ、心あつて、與一にバツカス神を授ける、と苦情が出ると、衆議を容れて、快く、綾羽が白地の手拭で目かくしをした。凄い。美しさが魔に近い。而うして立つた。眞中に立つと、又どつと噤すに連れて、杉箸の振袖が舞ふのだが、踊りも、三味線も出来るんだから、巧まずに振がついて、神の袖とともに曙染の中振袖がひらりと舞ふ。拍子にかゝつて、腰が靡く。裳が撓ふ。爪さきが極つて、トン／＼、はらりと、羽二重足袋に緋鹿子が宙へ浮く時分には、はずんで、天井に近い處で、白い神

がおなじやうに踊つて居る。それだもの、嘉傳次が眞先に、つい、ふら／＼と一人立ち、二人立ちして、何うだい、おなじ手つき、腰つきで、べろ／＼の神さんは、總立ちになつて踊り出した。

踊る、刎る、飛上る。舞上つて、其の白い神を取らうとする。

ひらりと躲しながら、踊りながら、然も興に乗じたと見えて、綾羽がね、――床の前を一踊して、あの丸窓をスツと抜ける。雪の洞穴へ消えたやうに

――あとについて、妙に静まりながら、一人々々、すとな、すとなと、其の癖手取早く、女まじりに、最後の足が、鼯の面に似て、其の窓をふいと隠れると、唯一息つく間、寂然とした。

外面の吹雪がざつと鳴るんです。

額の文字は、看柳成梅だが、其の下に、座敷を見

れば空になる。唯一人、廢墟に魔の酒宴鬼の亂舞の
あとの如く、狼藉した馳走道具を見ながら、酒の酔
ひの苦しさに齒を噛んで、坐る自分を見た時は、こゝ
で死ぬか、と思つた。

撲られる。いま其の相談だ。懷中に手を突込むん
で、いきなり座敷を出ようとする。トタンに、どつ
と又噓して、綾羽が先登に、踊りながら入つて來た。

―― 歸ります、僕は――

すつと目かくしを拂ふと、ぢつと視て、

―― まあ 懷劍を――

と、水が尚ほ氷るやうな、透通る目で、又ぢつと
見て、

―― 憎らしい

言つた切り、通り抜ける。白い袖をまはしながら。
ね、何うして見たらう。匂、みだれどこ
ろぢやあない、まつげほど黒鞘の端をさへ見せない

のに、凄^{すこ}いとも、鋭^{する}い目^めです。

が、其^その目^めに、ハタと近^{ちか}く目^めを合^あはせたのは、其^その時^{とき}を最^{さい}後^ごだと思^{おも}つていゝ。何^{なん}十^{じふ}年^{ねん}か、いまに於^{おい}て

――

で、幹^{かん}事^じは、断^たつて、まだ早^{はや}いと引^ひ留^{きと}めた。これ
から（つぼんぼ）を^をする。用^{よう}意^いがしてある。手^て
に皆^{みな}で團^{うち}扇^はで煽^{あふ}いで、綾^{あや}羽^はの膝^{ひざ}か、乳^ちへ吸^すつか
せ、鳥^{とり}田^だの上^{うへ}へ噛^かりつかせる。」

「可^い厭^やだ。」

と、お李^り枝^えが一^ち寸^よ斜^{いと}めに背^{そむ}いた。

「串^{じゆ}戲^{だん}ぢやあない　――　何^{なん}の^は話^{なし}をして居^ゐると思^{おも}
ふのさ　――　お前^{まへ}さんのお小^こ遣^{つかひ}の材^た料^ねなんぢやあ
ないか　――

急^{きふ}に立^たつのも、と負^ま惜^けみで、一^ち寸^よた^めら^らつ^てる中^{うち}
に、さあ、はじまつた。二十^{ぼん}本^{ちか}近^{ちか}い、いろ／＼の團^{うち}
扇^はが、濛^も々^うとしたほこりの中^{なか}に、化^け鳥^{てう}の如^{ごと}く羽^は搏^ばい

て、あの、つぼんぼの大蛸の頭が、目を据え、唇を
煽つて、宙へふはり、ぶわ／＼ぶわと浮いて、一同
の叫喚に連れて泳ぐのを見ながら、遁げるやうに會
場を出たんだが、

この、素人下宿が古邸だから、門内の大きな松の
半ば雪に埋れたのを潜つて、外へ出ると、すぐ後を
沈んだ格子戸の開く音がごろ／＼、と誰かゞ出るら
しい。

つぼんぼの中を抜けて、私が立つたのに、歸風が
吹いて、あとへ續いたと思へば、それまでの事だけ
れど、何にしる懷中に九寸五分の一件です。

屹と、途中を狙ふと思ふから、うつかり先に立つ
ては歩行き出せない。門傍の門松の蔭へ忍んで、素
早く塀へ附着いたんだがね、宵から、どん／＼積つ
た上へ、いま壯に降つてる、ひどい風さ。三尺ばかりも積つた雪へ乗った處へ、吹おろす、吹あげる、
身體は宙へ浮くやうで、門松と、塀の屋根へ押被さ
つた大松の間へ挟つて、枝に木登りをした氣がする。

一つは無理酒が頭へ上つた所爲だらうね。

當人ひらりと枝に乗つて、高い處から――片手を短刀に掛けながら、もの見の氣です。少年で逆上せて居るんだから。

其の、しかし鼻先を、三人、黒い影が、泳いで、握太な洋杖と、大小こすきだといふ雪搔の得もので漕分けながら、（足あとが見えんぞ、）（此の吹雪だ。）と凄いことをいつて、驅出すやうに行くのが町家通り。――入組んだ、土塀を三處ばかり折曲ると、直ぐ店屋續き――尤も場末ではあるけれども。其の順路だ、私の歸る。處を、私は反對の方へ走つた――奴等を、其松の枝から見すごして置いて、――それが打倒れてひどい目に逢つた原因なんだよ。

此の一方は、突抜けると、近い正面がすぐに大川なんです。少年に取つては、他國と、故郷、と眞中に直徑二十町ばかり高臺の丘を隔てた。

だから、敵の流だね。けれども、昔から遁げるのは

間道に限る。そのかはり悪處難場だ。

目前に、山の根へ渡す橋が眞中から折挫げて中斷
えして居るのさへ、渡るのではないが心細い。

いきなり、白い川瀬がぶつかる低い岸で、一方は
何處か邸の背戸續きかも知れないが、垣も塀もない
荒庭と畑です。其處へ、向う風の吹雪と來て居る。
川風が添つて、吹きまくるのだから、目も口も開か
ないんだ、が、子供は風の子で、雪の中に生れて育
つた
覺悟はある。

おなじ急流の大川縁を凌いで行くにも、流れに逆
ふんぢやあない。瀬について下る順で居たから、吹
廻されて、浮いつ、沈みつ、といふ中にも、荒波、
荒野の中に、思ひなしか、一筋道が、雪の潮の漲つ
て落ちるのに乗つた形で、足は早い。が吹倒されさ
うだから、短刀を抜いて刃に切つた、吹雪と戦ふ氣
さ、牙のある野兎が耳に雪しぶきを立てて、八九町
は飛んだらう。

漸と片側町だが、町家の端へ取着いた。――
騒ぐは風ばかり、最う寂然と屋根も、まばらに、寝
鎮まつては居たけれど、とに角、吻とする
あとを追つて来る影もないと思ふと、氣が弛んで、
道端へ腰をついたが、其切立てない。

――うつゝ心に覺えて居るが、其の倒れた處は、
軒に高々と俵を圍つた炭屋の前でね、川岸に、濱の
砂丘といったやうに、石炭が積んである。黒く――
三角形形に――趣きは違ふが、深川に、どう
かするとこんな處がある。蛤町のピラミッドと云つ
た様子さ。しかし、其のすぐ裏へ打寄せる瀬は、雪
を翻し、翻し、此の時は眞蒼です。

いつの間にか、吹雪が留んで、何處か寒月が冴え
るだらうか、それとも幽に夜があけかけたか知ら、
水が冷たく澄んで、石炭がたゞ巖山のやうに光る。

と思ふ時分には、咽喉が渴いて渴いて、胸を搔裂
くやうだ。

あの流れに嘯みつきたい。

起きたり轉んだり、漸と水際に寄ると、忽ち、目
前が其の石炭の海になつて、むせつぱく寒がるんだ
ね。えゝ、こんな筈はない、とよく見ると、また石
炭の根に、甘く冷たさうに水が、たふ／＼と雪に青
い波を打つて居る。――這出すと、立處に、黒
い丘が目を遮る。

それをいと繰返もどかしさに向ううらの流を目當
に、其の石炭をのぼりはじめると、其の峻巖とした
事と言つたら、手足の爪を削るばかり裂くばかり、
精根をつくして、絶頂へ上つたと思ふと、裏の崖が
一面に火だ、猛火だ、眞赤になつて燃えて居る。

――李枝ちゃん、さあ、お茶だ　――一つ培
じておくれ。――

唯、あつと其の石炭の尖つた丘から轉がり落ちる
と、今の炎を見ただけでも、呼吸が火を吹くやうで、

其の切なさと言つてはないんだね。

然うして打倒れた炭屋の屋根から、廂から、二段にもなつて大きな氷柱が簾を掛けて下つて居るが、煎つく舌に噛み折りたいたにも、唇は届かず、身體は動かさずとなると、水晶よりは、宛然劍で目を刺して、筋も骨もづき／＼疼む。

餘りの事に、

「お母さん、お母さん。」

眞うつむけに轉げて、

「お乳を。」

と云つて、雪を含んだ。雪がたら／＼と甘い。而して雪がほんのりと人肌に暖かつた。――以來、雪を視ると、今でも暖かく美しい氣がするよ。

――一昨年の春寒に、風邪をこじらした時、殆ど人事不省になり掛けが、おなじやうな幻視と錯覺だつた。夢だか、現だか、其の石炭の丘の尖つた、眞黒な根の切目を清く澄んだ青い水が、岸を洗つて

流れる。咽喉は焦げつくやうです。――這出す
と、水が隠れて、眞黒な丘になる。例の、搔筆つて
攀上ると、向うが炎だ。くる／＼と轉げ落ちるとね、
軒の氷柱を見るまでもない、途中に引掛つて、身體
が廻つてる處へ、崩れかゝる石炭屑がばち／＼ばち
／＼と當つて、缺片が一つ一つ火になつて身體に刺
さつた。其の引掛つて廻つて居ると思つたのは、心
臓の激動だね、動悸が波を打つたんださうで――
お澄をばさんが、夢中で確乎と抱くと、

「乳を――」

お乳　といつた　――　嘘をつけ　――

とか云ふので、後日一寸物議を起した、異論があ
つたよ。――

――　あゝ、うまい　至極、お服加減。

これで番茶の色が白ければ、李枝ちゃんのを頂く
やうなものだ。――

嘘でない。島田が黒曜石の如く、衝と黒い丘が聳
えて、棲は其の蔭を水のやいうに流れた。

「些と薄ら寒い。」
と、瘦せた肩に、半纏を揺り掛けたが、
「とてももの次手に、血を通して頂かう。」
と次の室へ立つ處を、

「をぢさん。」

「何だ。」

「其處に石炭の山がある。」

「あゝ、驚かすない。悚然とする。」

もの蔭に暗い棚から、ウヰスキを抜いて来て、
番茶の湯氣を、芬と分けた。

「どんな味。」

「子供が肉桂を噛むやうだね。――で、聞き給

へ。――

私の祖母が、其の新年會の夜中に、孫の身體を受
取つた。――もう然うなると荷物だよ。――毛
布に包んで蓑をかけた。――受取つたのは櫛の上
からださうです。眞黒な坊主合羽で、頭から、爪先

まで包んで、藁靴を穿いたのが三人、雪に埋れた格子戸を音づれた。

一人、頭巾を刎ねて挨拶をされたのは、年少な、それはノ、美しい上臈、たゞ人ではない、證據には、歸りの遅さに、戸に立つて見て居ると、吹雪のやんだ、白い山に、あけの明星の光る前へ、ぼつりと黒く顯はれて、高い處から屋根を、迂るやうに櫓が來ての、と漸と二日めかに、人心地になつた時にいつて聞かしたんだ。美しい上臈、たゞ人でない――何です、お祖母さん、其奴は與一が射損じたまただ、とも、鶴だとも、クレオパトラだとも言へないから、氏の神、白山権現のおつかはしめといふことにして、腰が立つとすぐお参詣に行つたがね。口惜くつて堪まらない。安東一派の女將軍は、敵小僧の倒れたのを、大川べりから、丘の上から、下の町まで、何處までも雅量を示して、送つた櫓は、勝利の看戦車を雪の白銀で飾つたんだ。負腹で、拗ねた拗ねた。誰が、わびや、禮に行くもんか。

それ切きり 逢あはない。こゝで見みるこの南天なんてん
燭ろうの根ねの、（くれは）の名なは、自分じぶんで箱はこがき、
いや落らく欵くわんをしてくれたやうな氣きがするよ。」

と湯ゆ呑のみを置おいた、片手かたて捌さばきの小説せうせつ家の半纏はんてんの衣紋えもん
は、やゝ潤じろい。

「それ切逢きりあはない。が、しかし、もう
一度いちど ー 七八年ねんあとに其その姿すがたを視みた事ことがある。

つて、綾羽あやばが、世よにも人ひとにも遠とほざかつて、雲くもだか、
山やまだか、海うみだか、づつと私わたしなどから離はなれて、隠かくれは
てたもののやうな氣きがするんです。

私わたしは東京とうきょうに居あて、曲まがりなりにも何どうにか自分じぶん所帯しよたい
で、自炊じすいぐらゐは出で來きるやうに成なつた頃ころだが ー
然さうだ。」

と瘦やせた膝ひざを撫なでながら、
「吹雪ふぶきに倒たふれて、櫛そりで我家わがやへ送おくられた始末しまつだから、
大煩おほわづらひをしてね、目的もくてきの試験しけんを受うける處ところぢやない。

治つてからも一年あまりぶら／＼して、學校も塾も
不沙汰になわば、少年の事だ、いつの間にか附合ひ
もなくなつて、近所合壁面目もなし、極りは悪しで、
夜逃げのやうに東京へまぎれて出て、干ばしになり
さうな處を、漸と、先生の玄關で救はれた次第なん
だが、――其のうち、何うかすると、千巷萬
街の何處かで、郷里から上京して居るアントニオ一
派の男に、ふと出逢つて、行きずりに話をした事な
どある。日も経てば月もすぎ、お互に恩も仇も忘れ
たうちにも、うはさの出るは、クレオパトラで
地方で、縣知事さんをつかまへた。人の口で
は妾だが、當人はいろにして居る。何も
消防夫と藝妓でなければいろでないといふ法はない。
知事さんと綾羽だつた處で、いろならばいろだらう。
然うだ、と蕎麥を食つて別れる。兎と狸が仲なほり
をしたやうさ、たあいのない事。

二年もたつたらうか、別なアントニオに逢つた時
の話では、綾羽は東京に来て居る。おや。縣から轉
任になつた、何某少將の庇護後援のもとに、矢野、
きみとおなじ文學を志しとるぞ、競争の氣ださうだ。

對手はクレオパトラだぞ、しつかりせい、と焼芋を、もくりと頬張る。

けれども、城下の用水と隅田川では、くらべものにならない。クレオパトラも大都會ぢやあ影が薄くて李枝ちゃんぢやないから、不忍の蓮が月島の波に咲いたやうに、私の目には映らなかつた。

原稿を賣込みに、本町邊の書籍店へ行くと、三階だかの編輯部へ上らうとして、下の土間で幾山か積重ねた雑誌の上から、ひよこりと丸い面を出したのが、安場嘉傳次、例の一番親みのあつた男でね。其處の發送部に勤めて居たんだよ。故郷の町で運送店を開いたが、失敗をしたと言つてね。クレオパトラは、女役者女優になりたがつて居る、といふのがはじめで。其の次には美術家になる。繪を學んで居ると言ふ。――しばらくすると、紫綸子の被布で畫を描いて、地方を廻つて居るさうだ、といふうちに越前の山寺へ籠つて、哲學を研究中だ、と此の手紙の音信のあつた頃は、嘉傳次も土に歸つて、在所の農家で暮して居た。

其の在所といふのが――待つておくれ、いよ
／＼原稿として、李枝ちゃんに筆記をして貰ふ時に、
あからさまに、其の場所の地名を書かうか、何うし
ようか――それは今、考へ中なんだかね。――

何しろ鐵道のない時分、故郷から東京へ出る、街
道の宿に、嘉傳次の其の在所がある。祖母を連れて
上京した時に、俤二挺で通りがかりに其の葦屋を
訪ねた。秋日和の眞日向の稲の香は今思つても懐か
しい。土間に、積んだ、ほか／＼した刈
稲の中から、かさ／＼と出て来て、莞爾。額の糠を
拂ひながら、やあ、矢野さん、クレオパトラが、向
うの森の白壁づくりの奥に居る。郡の多額納税者の
寵妾で――一度貴下に逢ひたがつて居ますよ。

俤の楫の下りたのにつけても、吹雪の夜の櫂を思
ひ出さずには居られない。坊主合羽の廂を刎ねた顔
を見て、姫神か、と言つた祖母が七十幾つで其處に
居る。

――逢へますか――

――是非お逢はせしたい――

が、頭をくる／＼と振つて、一つ引傾いた、短い
眉毛が、鼻柱を離れて、額の両方から、ちよぼりと
下り目へ芻ねて居て、べろんとした口でニヤついて
――おやぢと云ふ、其が主人、多額
納税者の事だね――頗る嫉妬手と来て、對手が
たゞ美人だけでは濟まない性質だから、土藏に納め
て鍵を掛けないばかりの用心。また、クレオパトラ
も、今までに、毒蛇こそ然うでもないが、モルヒネ
の入つた紫水晶の小さな壺ぐらゐは、飲まない
までで、白い胸へ押當てたぐらゐの事はあらうから、
感心に辛抱しておとなしい。出しもしなければ、自
分で、めつたに外出もしないで、時々、琴のしらべ
が松風に通つて村を渡る。

秋ふけて風白く月清い折など、聞くもの
断腸の思ひがある。それは可いが、村の

若い衆で、あの森蔭へ忍んで、尺八を密と合せて、
いきなり大身の槍で、おやぢにおどかされたのが近
い頃だ、などと言ふから、そいつは危険だ、見合は

せよう。いや、だから豫め偵察を要するといふだけの事です。一寸でも逢つて下さい。何だか切に一度あなたを見たいと言つて居ましたから、それに、おやぢ、今日は居ない筈ですが、まあ、此方へ、と指さしもしないで、紺絞の兵子帯の下腹へ、弛く兩手を突込んで、かすりの着ものに紺足袋と云ふ出来たてのお百姓で、動くたびに稻の香が、ぽつと立つのが、また、頻りになつかしい。つい、うか／＼とあとに附くと、街道を挟んだ直ぐ向うの、おなじ農家の門を潛つて、尤も近所だし、懇意らしい。筵の上で枝豆を揃へて居る女房が居るに挨拶もしない。ご免下さいは、私に言はせて、納屋のわきを薄暗い通り抜けの土間へ入ると、小さな聲で、こゝから御厨子が覗かれるんです、祕佛ので、さぐり足で少し出た。やあ、土間が瀧になつたかと吃驚した。餘り不意だつたんだよ。暗い、其處の、雨戸の開いた眞横がすぐ廣い川です。藁茸の横廂の下を、すれ／＼一杯に瀬を打つて居るのが、眞平だから、装束を流しながら、さら／＼と音が幽で、もの寂しくつて、幅十四五間だらうけれど、倍くらゐには大きく見えた。

何、地理にも、地圖にも乗つて居る川だけれど、
河身によらず、道の屈折が多いと見えて、これから
渡るの知らないでもない。松並木の橋は、づつと
離れて居るから、こんな、家と家とのあひだに川が
あらうとは思はなかつた。其處へ横に立向つた正面
の立派な座敷だが、床が低い。明いのは、秋の川波
ばかりで、金屏風や、磨いた柱が、きら／＼しなが
ら天井も古びて暗い中に水あかりに浮いて艶麗に琴
を弾いて居る、と此方の岸へ二人が立つ、と同時に
だね 其の琴を衝と黄金に紫の總を懸けた
盾のやうについて、あらひ髪も、袖も、褌も、翡翠
が虹にかくれたやうに、菊の花壇の下へ。――
此方の身體は、蘆の穂にふら／＼と吹かれたよ。

嘉傳次が伸び上つて、十文字だの、圓いものだの、
何だか空へかいて合圖らしい事をする拍子に、ドド
ウン！ と鐵砲が、響いたぢやあないか。ワツ出た、
おやぢ、と遁出すから、銃獵のそれ鐵砲だとは思ひ
ながら、小説家も、もろとも、―― いや、恚う
いふ時にいひたくはないがね。をぢさんといつても、
私といつても、我輩でも、どつち道器量は悪いよ。

遁出す、と高い空を

雁が渡つた。琴柱

が夢に散るやうに ー

そりやいゝが、俤で待たした祖母さんが紛失した、
おやと思ふと、俤夫は二人とも日向ぼつこで、稲の
香に酔つて、太平にとろりとして居て、何處かのお
まりにでもござつたづらあ ー 串戯ぢやあな
い、寺も宮も其處等に見えない。クレオパトラの琴
などは、雲で沙漠へ飛ばして置いて、血眼になると、
土地子だ、安場が見つけた。村の出端の松並木の蔭
に、京參詣の往還をあてに、菓物の荷があつて、
其處に小さな白髪が見える。

祖母は葡萄が大好きでね、嫁菜すゝきの、ほか/
道を行きながら、其の荷で、見つけたものだつ
た。

ー さ、一房まゐれ ー

埃及の美人も美人だが、これは仙人の媪さんだつ
たよ。

―― 李枝ちゃん

矢野は、お李枝の新しくついだ茶を啣んだ。

「今度は葡萄の味がする。其處で、前

刻から話した、姫沼綾羽が、寂しい川を隔てて、琴
にかくれたまでを、これから、文章にして、新聞に
出せるやうに口でいふから、お化粧料前納の處を、
一つ働いておくれ。

―― 然う、其の原稿紙へ、ぶツつけに
然う――

題は考へたが、
雪中翡翠志

雪の中の、翡翠は河蝉。志は、しるす、志――
假名で結構。あとで私が直すから。―― お待
ちよ。一層拵へずに、假名で（かはせみ。）さ
つぱりして其で佳い。題から三字ばかり

―― 其の――。

「

蜻蛉の羽が、きらりと白紙に輝いて、ペンの尖が
睫毛のやうに、

―― 其の――。

歌仙貝 かせんかひ

こひしさはおなじ心こいひにあらずとも今宵こよひの月つきをきみ

見みざらめや

(妹背貝いもせがひ)

琴ことの音ねに峰みねの松風まつかぜかよふらしいづれのをよりしら

べそめけむ

(袖貝そでがひ)

秋あきの野のの萩はぎのにしきをふるさとに鹿しかのねながらう

つしてしかな

(千種貝ちくさかひ)

櫻さくらちる木このした風かぜは寒さむからでそらにしられぬ雪ゆきぞ

ふりける

(紫貝むらさかかひ)

和歌わかの浦うらに汐しほみちくればかたをなみあしべをさし

て田鶴たづなきわたる

(板屋貝いたやがひ)

みわの山やまいかに待まち見みむといふともたづぬる人ひとの

あらじとおもへば

(片貝かたかひ)

— 當國たうこく、富來とまの濱はまは、砂白すなしろく、浪青なみあをうして

—

さをしかの朝あさたつ小野をのの秋萩あきはぎに玉たまと見みるまでおけ

る白露しらゆ

其その撫子貝なでしこがひ

鶯うぐいすのこゑなかりせば雪消ゆききえぬ山やまざといかで春はるを知しらまし

其その梅貝うめがひ。さて、呼子鳥よひこどりは、おぼつかなくも馬ま刀貝てがひか、いははしの夜よるの契ちぎりは、蘇枋貝すはうがひか、烏帽子えぼし貝がひか。半島はんたうの浦々うら／＼渚なぎさならぬはなき中なかに、こゝばかり三十六の歌仙かせんに合あはせて、貝かひを數かぞへて、歌數うたかずの揃そろふ名所しよと聞きく

「奥様おくさまが其そのお美うつくしさで、歌仙かせんをお拾ひろひなさいましたら、――富來とぎの濱はまは、まあ、どんな景色けしきでございませう。」

矢野やのは、お李枝りえと、ハドソンに乗のつて居ゐた。

「おい、穩おたやかでない事ことをいつては不可いけない。天氣てんきが變かはると大變たいへんだ。」

送り出おくして、扉際とぎはに、其その臆面おくめんのなささうな年増としまの女中ぢよちゆうが、

「ほゝゝ、では若奥様わかおくさま。」

「若奥様は、些と氣障だな。」

「お氣に入りませんか？ 何と申上げようでございますう。」と悪く、ねんばりと言ふ。

「おめいさまさ。」

「おや。」

をぢさんは軽く笑つて、

「姪だから、おめい様ぢやあないか。」

「あなた様もや、いかな事でも。」

女隠居も、式臺の端へ出て居たが、尚ほ乗出すばかりに、

「相良さんや。」

無論、運轉手は、和倉一番の渠である。

「富來の濱のお遊びはの、私が何でもと申しての、お嬢さんをお勧めしましたに、歌仙貝をの、よう見つけてあげておくれなさい。――それから、

義經、卿の君の籠られた巖門の狭窟を、ご案内申上げのの。」

「承知しました。ー 貝も十五六種は、直に發見出來ますが、さあ三十種以上は何うでせうか。」

「梅貝、撫子貝、それだけで結構ですわ。」
言葉も薫る花の色。

「お巳代がお供が出來ますと、あれは土地のもので、よく存じて居りますが、一寸お客様が立てこみましたの。」

其處へ、庭口から、金兵衛が蟹股で、のこ／＼と、うだつた顔を仰向けに、
「やあ、旦那、ご愉快。ー 今日快晴仕り、恐悦で。」

これは言ひさうな事であつた。快晴はお互に、その上、運轉手ともに恐悦でなければならぬ。

「何だか、とのさまにものをいふやうだな、金兵衛さん、お客が違ふよ。」

「違ひますだかね、それでは伯良と申す漁夫にておいでなさる。」

能登も國なみに流行ると見える。 おぢ

いが謠を心得た。

「はゝゝ、濱の松に、其のコートを脱いで、お掛け遊ばされ 今日、大分にぼかつかまするで。」

と酔顔をべろりと撫でる。

「あゝ、時に中尉さんは、其の後どうだね。」

「まだ、おたよりがありませんが。」

「然うかね、今日あたり、何處かで逢ひさうな気がする。 しますよ、ご隠居」

と地圖を片手に擴げたまゝ振向いた。 ー ー ー
で地の理を問ひなどして、其がために出足がくれ

たのである。

「――梅貝、撫子貝といつて、嬉しさうな、あの顔、あの容子を――」

五分ばかりの急な間に、矢野はをかした處に立つて（仔細がある。）一寸顔色を變へて居る。

其處から、玄關に横づけの自動車は見えない。眞直な廊下を一つ折曲つた角の張出しに、庭の植込の陰をうけた、手水鉢で、手を洗つたあとを、ふと身を隠したやうにためらつて居たのであるが。

唯た今、彼處で金兵衛などと口を利いて、もう自動車の出ようとする處へ、こゝから曲つたらう、玄關正面の長い廊下を大急ぎで驅けて来て、カランと下駄を引掛け状に、「あ、唯今、これを

と新聞に包んだ雑誌ほどのものを、「廓の帳場の俵夫が托つたと云つて持つて來ました。

「――旦那様に大急ぎと申しまして。」――「お巳代の受取つたのは玄關さきださうであるが、二階でけたましく手が鳴つて、一寸其の用をきいて

引返し、まだ座敷だ、と思つて、空室を覗いて、それから飛んで来たと言ふ。何だらう。確かに私にかいはい、矢野先生に、と申しました。確めた上は見るのに仔細はないから、合せめを拂ふと、むかつとするほど、ぶんと生臭い。「――いや、あとで話す。」――お李枝の怪んだ目と、寄つた眉を、掌で蔽ふやうにして傍を向かせながら、すぐ、もと通りに包み直した。

半紙判の古原稿紙に、

(現代とおれ！)

！のついた題の表紙から、どす黒い大蜘蛛と、赤い蛞蝓の夥多しく噛合つたやうな、血と腸で、べた／＼と塗つてあつて、じめ／＼として持つに重い、綴目も崩れて、どろ／＼せまだ出さうであつた。

「――油紙はありますか、なければ新しいのを買つて、ありますか、それは結構、お巳代さんぢや不可い、これは金兵衛さんの役だ。憚りですがね、上をよく包んで、預つて置いて下さい。先方が取りに来るかも知れない。然うしたら渡して

下さい。来なければ當分其のまゝにして置いて――
處で置場處だがね、物置、と炭薪の納屋、それが
一番、石炭殻か、炭の粉などの中が結構です、一寸
汚いが然う大した事ではない。結核の血や癩病の
では決してないから、しかし、胞衣だの、
あと産のおりものだの、墮胎した嬰兒のやうなもの
さ、いや大丈夫、男が孕んで墮胎したのだから。」

矢野の此の時の語氣と、風采は、冷靜にして鍛錬
なる醫家の趣きがあつた。

「――李枝ちゃん、一寸其の半紙を。」

をぢさんが突込み用の合財袋を、自分の持たない
ハンドバッグのやうに、いとしさうに優しく兩手で
膝に持ったのを見て、聲を掛けた。が、よし、それ
を待たず、迅く自動車の扉を押して出た。

「旦那様。」
「一寸わすれもの。」

一直線に廊下を其のまゝ　　ー　　こゝへ曲つて、
もう一つ折れると浴室づきの洗面所がある、　　ー　　ー
手を洗はうとしたのである。

つゝかけに廊下を曲つて、アツと引返した。渠は
見まじきものを見た。其處に三人の婦が居た。

年紀ごろは、おなじ若さだが、銀杏返と、島田と、
鬘と、皆顔が蒼く、肌が白い。其の、見まじきと
いふのは、いづれも、ものの際に心を許し、肌を解
いて、餘りにしどけない帯紐だつたからである。

並びつつ三人の姿見に向つたのが、不意の客に、
巴によつた。就中、其の見まじきといふ意味は、島
田の一人の横向に立つたのが、腹帯で、乳の下を。

あとじさりをするばかり。さいはひ手水鉢が見つ
かつて、汲みおきらしいが、手を洗つた。水の音、

おく柄杓が、カタンと聞こえたのに、其の洗面所は風のそよぎもなく、コトリともせぬ。

矢野は、二度と其處へ引返して、事實を確める勇氣がなかつた。確めるまでもない。差覗けば消えて居るに相違ない、と思つたからである。

――宿を出端に、原稿を塗つた血と腸の呪といひ、富來行は見合せようか 悪い辻占でな
いまでも、吉兆とは言はれないかも知れぬ。――

あの、腹帯を見たか。

――六人の生命にかゝはる ーと脊の高い
巫女の媪のいつたことを覚えて居る。古井戸に鬼灯
形の、お白神の像を結んで、若い婦の齊しく念願を
籠めたといふのは、或は皆揃つて、――

式臺前の榎と、ともに、此の青苔の充ちた裏庭に、
洗面所を蔽うて且茂つた大木の櫂の枝に蔽はれた、
其の窓つゞきに、ふと三つ並んで、婦の顔が

髪が、古幹の陰に、一層蒼白んで、一人々々の黒
髪は、葉のみだれに尚ほ纏れる。

衝と目を反らした手水鉢に、怪しき影は尚ほ映り
つつ、雫の溢るゝのは水である。

や、や、こいつを引傾けて、あふつた酒を忘れた
か、其の時の血氣を思へ。笑止なるかな。神経衰
弱。――

窓の顔の、三つとも、幽に薄く動くのさへ見えて、
悲むが如く、泣くが如く、怨むが如く、しかも笑ひ
なぶるやうである。

われ藁で束ねた、男にして、棚に釘一つ打ち得な
いまでも、よし、見よ、いやが上に櫂の根が崩れ落
ちて、見る間に古井戸にならうとも、筆を取つて、
立處に、その呪詛の蠱を薬研に砕き、瑠璃沫に淨化
して、これを月光の白露とも、姿見の清水とも稱ふ

ることを得ざらむや。

職しやくの力ちからに、それだけの事ことは心得こころえた。

これを、たとへば、直たゞちに座敷ざしきに返かへつて、お季枝りえに
ペンを持たせても、其それくらゐには、客観かくくわんして、而しか
て描寫べうしやなし得えずや。

屹きつと視みれば、蒼あをざめた女をんなの顔かほは皆みな消きえた。

忽たちまち目前めさきに顯あらはるゝは、自動車じどうしやに待まつ、お季枝りえの
粧よそほひ装ひ。

—— 梅貝つめがひ、撫子貝なでしこがひといつて嬉うれしさうな ——

然さうだ、あの原稿げんかうの一綴ひとつづりを塗ぬつたまぐさみニ氣なまぐさみは、
血迷ちまよつた海月くらげが渚なぎさの貝かひの數々かず／＼を蔽おほうたとしてもよい。
從したがつて、女をんなの顔かほは、青あをい波なみを縹色はなたいろに爛あぶつて浮ういた、
三枚さんまいのニえひの、或あるひは威おどし、或あるひは笑わらひ、或あるひは顰しかんだ面構つらがま
へと見みなされぬ事ことはない。彼かの魚うをの面おもては、平家蟹へいけがによ
りも女性ぢよせいにして、中なかには齒はに鐵漿かねつけたのもあると

聞く。

其の二を見よう、海月を見よう。

自分は　　お李枝は、梅貝を、撫子貝を　　

祝して、爽にドライブした。

けれども、一度其の場合に悚然とした思ひは、時々、

膚に寒氣を感じて、袖を引合はせ、引合はせ、温泉

の町を離れて、野道を停車場から古沼を左に、踏切

を越えて、やがて山懐を和倉の岬の吹さらしへ出た

頃よ、　　

「顔色がわるくつてよ　　寒い、寒くて。」

と且言ひつつ、座席のまゝ、身動きに棲も亂さず、

山の崖の木の葉漏る日ざし、それなりに、膚を薄く

蔽ふかと見えて、すらりとコオトの片袖を取つて脱

ぐと、弱腰を通して又片袖をすつと脱ぐ。

手際であつた。恰も拍子を取つて、あひゞきで颯

と装束をかへたやうで、袖だたみを、扱いて、をぢ

さんの肩を人形の如く包んだのである。富來街道で

あればこそ。

此の紫は、不思議に矢野の面を、ばつと明る若くした。

が、衣紋も直さず、むく／＼と、田舎の空平の如く、頸筋をうめて着て、

「袈裟のやうだね。これで歌仙貝の遊山に赴く處は、僧正遍照といふ形だ。百人一首のあまつ風か。三十六歌仙のは何だつけもとの露、末の雫や世の中の

一寸言を切つた。

「朝顔貝といふのがあると好いね。

「今日は五割引の蓮の花ではないよ。馬に乗つて女郎花でわれおちにきと人に語るなか。とに角。――意気な人さ。

前刻の――あれは壺田と云つてね、むかし何時か、福井縣の高等官の息子だよ。矢張り其の頃のお友だちの一人だね。――あゝ、そんな眞面目になつて聞かないでも可い。これは筆記の中へは入

らないんだから。――

まあ景色を見ながら

―― お前さんが氣にするから話すんだから。アントニオ一派とは又組が違つてね。私立中學のなまけものなんだよ。―― 下宿で贅澤ばかりして居る。それがね、英語を教はりたい、といつて知合ひになつた、すくなくすくなくも、其の時分では、西洋人直傳といふので、私の習つたのを正則といつた。下宿へ行つたり、内へ來たりして居るうちに、暑中休暇が來て、越前へ歸ることになると、一夏遊びかたがた福井へ來て、一所に居てくれないかと云ふ相談さ。

其の、病氣あがりで、試験も受けられず、ぶら／＼して居た最中だ。貸本の小説も大びら

に讀めるし、第一本も買へる。いくらかには成るとしみたれて―― 三日と内を離れて旅行なぞした事のないのが出掛けたんだがね。二月ばかり居たらうか。家庭教師とか云つた格だけれど、先方は年紀が上で、内へ歸れば若様だ。

縣で一二の高等官と来ては、その時代だから、田舎の出さきの旅館なぞでは――知るまい、李枝ちゃんは一御神燈で見るとは違ふ？

舊藩の領主あつかひだものね。其の若様です。いゝ加減な屬官でさへ、三尺下つてたてまつるんだ、處を此方は平民の町人の俸です。段々扱ひが太郎冠者になるからね、一度衝突つて、それなりです。

つい近い頃だよ――それでも一二年経つたかなあ。突然、名刺を取次がれた。壺田――は忘れないから小石川の二階で逢つた。が、人様の事は言へないけれども、ひどい落魄れやうで、吃驚した。それよりも可恐く人相が變つて居る。何より、白眼がどろんとして恚う人を見ると血走るんだ。父なき後は、一家みな離散した。當人は北海道で牧畜を遣つて居たが、健康を損じて、此の次第です。しかし、文學に對する宿志は、昔から斷じて棄てない。で、心血を濯いだのだから、これを――と云つて出したのが、出掛けに受取つた、（現代とおれ！）といふ原稿でね。いづれ拜見をが、

忽ち瘡に障つたらしい。いづれですか、然うですか、
いづれ又伺ひます、ともう喧嘩腰さ。まあ、と
此方は言ふのに、悪慫慫にひつたりとお叩頭をして、
いづれ伺ひますから。でも、無事に歸つたつ
け。

五日とたゝぬうちに、然う
夜分だつた。

勢猛に飛込んで、如何ですと、膝詰めで突掛る。お
それをなしたが、さあ些と何うも、と言ふと、何處
が悪いんです、何處が、言つて見たまへ、とじろり
と睨んだから。此の馬方め。――
こゝが田鶴濱、いゝ處だらう、すぐ海だよ。――

と、紫の肩を、お李枝に寄せた。が、遍照は、歌
もなしに、

「私は馬士にしる、馬方にしる、一度も輕蔑した
覺はない。どつちかといふと好きなんだ。が、北海
道の牧畜屋だ、羊飼といふ柄ではないから、此の馬
方め、と思つたつて仕方がなからう。――醫師
にたとへれば、何處といつて聴診器の當て處がない

のです、到る處に濁音が聞こえますから。――
たゞし、藪ですよ、藪が診たんですよ、といふうち
に、唇も手もぶる／＼と震へ出して、顔を眞暗にし
たと思ふと、俺を土左衛門に扱つたな、よし、覚え
とれ、と云ふが疾いか、手にまだ預つて居た、あの
原稿を引奪つて、引搦んで、肩の骨を鳴らすばかり
にすつくり突立つたが、どしん、と壁に打つかつて、
階子段をどゞどんさ、もう、ぴしやりと、えらい格
子戸の音をさした。

あとで解つたが、私の知合は大がい見て居た、方々、
持廻つた原稿の其の、（おれ！）なんだ。！
―― あゝ、白濱の橋が小さく見える。運轉手さ
ん、其の梢は緑雲寺の銀杏かね。」

「然うです。一寸お留めますか。」と振向く
時、前屈みに乗出した矢野と、相良は互に顔を視た。

「いや／＼、ブツと其のまゝ――早いな、も
う来たか――大きな銀杏だらう、それ
これは、これは、根の處にも地藏様が、此方を向

いて　　―　　李枝ちゃん、挨拶をおし、道中の無事
なやうに。

―　　聞けば、いかにもと頷かれる。一目の其の
容子を視てさへ、確に然うらしく思はれた。

のみならず　　前日、床しく可懐いまで、
機の音を聞いた矢野の直覺とでも言はば言いふいべ
き想像では、それが今しがた通抜けて来た、而して、
あの日の女房も居合はさないで、笥の水にも、ふと
街道の寂しさを感じた。ト白濱橋こなたの小さな飲
食店の納戸に、人目を避けるやうにして居るといふ、
其の婦ではないか、とさへ思つたほどである。

これは、いはれの無い、餘り物語風な當推量であ
らうも知れない。けれども、偶然は、時に奇遇を生
ずる、　　―　　わけて音のみの梭の響きは、傳説と
事實を織りまぜて、しば／＼落莫の野山を彩る。

斷じて、其の娘でないと言ひ得よう。

さて其の婦かと渠が思つた一人は、かよわさうな
身姿を、尚ほ肩身を狭く一卷きしめたやうに着莫塵
を絡つて、薄汚れた手拭で、頬被とまでは思ひ切れ
ないが、色白な若い顔の、眉の隠れるまで、深く後
で引結んで、加賀笠　　菅笠を被つて居る。

六七人、おなじやいうな一群に交つて　　

どれも似たほどな扮装で、籠を掛け、天秤を荷つ
た　　連の中には、他の疲勞をいたはつて、其
の天秤を二本に、籠を三人分引かついだ　　尤
も中味はもう空だが　　遅しい大年増があつて、
それなぞは、頬被を超越した、すつとこ被りで居た
のである。

みな富來の磯濱から、魚市、問屋の手をへないで、
直接に魚の行商をする、五里七里の道を、小坂、峠
を越えるのであるから、夜のあけ切らぬ間に、苦屋、
蟹の宿を出て、沿道の村々、宿場を商ひつつ、和倉
がさかり場だけに大の得意で、代をこなして歸るの
で。

むかしは、いたゞきと稱へて、京の

おはらめ 大原女のやうに、頭に戴いた盤臺から、鰈が鰭を刎ねたり、蝶螺が角を覗いたり、鯖鰯が光つたものだけれど、近頃は恚いうして荷ふ。

矢野たちは、午餉を済ましてゆつくりして出た。

丁ど二時下りだが、もう其の連中は商賣を済ましたかへるさ 歸路

とすると、少くとも六七里の足はかけて居るが、達者なもので、脚絆さへ然まで汚さない。思切つた股引もあつて、残らず草鞋穿だのに、其の婦だけは、日焼けのしない脛を、殆ど藁で引殺いだやうな露出しで、素足に草履なのだが、他とは違ひ、あるくのに、股を厭つて、もろ脛をしめるので、着莫座下は一足脚に似たのが、毛を筆りつつた女性の案山子のやうである。あはれ、しかし女である。引上げた膝のあたりに、ちらりと紅い色の漏れるのを、それさへ隠したさうに悄乎して居る。

「お旦那。」

といった、のつけの呼聲が　ー　ー　大きなおはく

るの口をあげたのは、――すつとこ被りで、天
秤二本引受けた、其の遅しい大年増で

「お旦那、助けて遣つて下さいしよう。後生にな
るだ。功德でございさあ、此の娘は。」

と、群に包んだ娘を指して、

「城端（越中）の女工場から、はあ、勤めが
辛いところへ身體をおやしたで遁げて来ただが、些
とんべい、此の容色だで、仕事のほかにも、目さ掛
けて居る、おへねえ奴等があるだで。追手が鵜の目
鷹の目だでね、我等がうちの莫薩笠で、晝狐で化け
て来てや、在所の富來まで行くだけんど、今にも其
處らへ追つて来て、見あらはされて頸首さ引掴まれ
さうでなんねえで、心だまもそはつく處へ、我等と
は違うてな、工場で寢足だで、驅走りが出来ましね
え。やつと此處までは、手引き尻押で急いだけんど、
はあ、もう何うにもなりましねえ。お旦那、其のぶ
つかノ、宙を馳る俵さのつけて、助けて遣つて下せ
えましたよ。輪島道は、さつき後だで、行かつしや
る處は富來づらえ。」

と一息にしやいべつたのであるが。

こゝに魚賣の年増の言の中に聞く中島は、川口に
白塗の鐵橋が架つて此のあたり海を漕ぐ船の終點で
あるらしい。すぐ汐入の川に成つて、それが段々に
山間の細谷川の流となる。

たとへば、能登灣の全景は、光琳風の千鳥を右
に視めて、中を青海波にすかし、周圍の渚を胡粉で
流した、恰も其の尾を開き羽を伸べた、その脚の爪
にも似て居よう、爪で打つ波を刎ねたしぶきが、や
がて溪流の音に響くのである。

白濱橋は、街道を縦に通里、その中島の鐵橋は、
折曲つて横に渡る 又、恰も能登灣の緊口
に似て、町は一筋だけれども、長く續いて、兩側の
商賈は老舗が多く繁昌する。 通り抜け
ると、街道が兩つに岐れる。

―― 右が、此の間 行つて来た輪島街道、其の
留守に ―― 「李枝ちゃんが出来て待つたんだよ」
―― なぞと、にせ紫の僧正は話したが。

魚賣さかなうりの女群像にょぐんざうは、其その町まちから出品しゅつぴんぶりに搬出はんしゅつされ
たものらしい。それから先さき、田鶴濱たじろはま、和倉わくらのかへり
にしては、時ときがやゝ早はやいのであつた。

其處そこで　　―　自動車じどうしゃを見掛みけて、工女こうぢよの落人おちうとを
頼たのまれたのは、熊木くまき　　―　と云いつて、一つひとつさきの
村むらへ進すすんだ兩方打展りやうはつちひらいた廣田畝ひろたんぼの罫なはてであつた。

馳はせつつあるのを呼留よびとめたのではない。その時ときは、
二人ふたりが一寸自動車ちよつとじどうしゃを下おりて居ゐた。それは、お季枝りえが、
扉ひらの窓まどから、白鷺しろはくを見みつけたからで。

「あら、鷺さぎが居ゐるわ、居ゐるわ、歩あるいて居ゐるわ、不ふ
思議しぎねえ。」

芝門前しばもんぜんの娘むすめには、白鷺しろはくの歩ある行くのは不思議しぎらしい。
淺草田畝あさくさたんぼの一つ家ひとつやの森もりに雁かりを飛とばす知識ちしきはあつても、
さしあたり其その所帶しよたいでは、襖ふすまにも掛軸かけぶくにも、白鷺しろはくに
知己ちかつきはありさいうもない。

「一寸留ちよいととめて、運轉手うんでんしゆさん、　　―　　いゝでせ

う。」

と矢野に瞬きして顔を向けると同時に、きょうにストツプした。

「あら、あら、一羽二羽ではない事よ。入らつしやい、をぢさん、まあ、意気ないゝ姿。」

と、紫雲英の花の咲き残つた、小流のへりの道端に下り立つたお李枝は、力二郎が汗と力で工面したものは思はれない、見る目も爽かに、涼しく軽さうな淡藍の涼傘を、たゝんだまゝ、眉に青い影。前髪に翳しながら、

「入らつしやいよ、無精だわ。」

「あゝ、これは綺麗だ。」
をぢさんは、さすがに、僧正の袈裟を脱いで出た。

「居ますなあ　　―　　恚いういふ處に居ます。」
―　　冬分は、和倉の停車場の、あの古沼に来て、群れて居ますよ。」

と運轉手、相良も降りた。

「人は苛めないかね。」

「禁鳥になつて居ります。」

「道理で、耕して居る傍を平氣だね、いゝ姿だ。」

「まあ、ちよいと、歩行いて居るのばかりではありませぬわ。あの向うの、遠くの蘆の前に――

見えて。小さなおみき徳利のやうな白い

のは皆鷺よ。見えて　まあ、何うしよう、

嬉しい、十羽や二十羽ぢやないことよ。あゝ、そして歩行いて居るのは、親子づれだわね。ご覧なさい、小どもが眞白な羽をひら／＼と仰向いて、母さんが、ご馳走を、まあ可愛い、あたし、どうしたらいいだらう。」

と、うつかりしたやうに、膝をうつて、

「噛つて遣りたい。」

「はゝゝ、お噛りになりますか。」

と、相良が無邪氣に莞爾。

さつと色を染めたのが、白鷺の羽をうつして薄く透通る。

「ご免なさい。」

「そら、そんな囁るなどといふから立つて遁げ

る。」

親鳥の、田を低くすツと立つのに、仔はひた／＼と翼を合はせて飛ぶと、美女の指の反るやうに、雪を撓はし、もろ羽がひを打つて二羽がひらめく。

親鳥と小鳥と、其の一组が飛立つと、田を漁つて居たのが、續いて又二羽飛んだ。――五羽七羽、數へるうちに、目近なのが、残らず空へ舞上る。

あの、遠くに、イ、イ、イ、と、字を白く記した、活字よりは大きくて、一寸作者が原稿に認める文字ほどなのが、端から蘆の葉の雪を削るやうに、すらりと飛んで、ひら／＼と田の面へ降りる。

その降りると、はじめ飛んだのが、しばらく低空で、翼を交はして、入亂れる。が、眞つ先の二羽の、早く宙を翔けるのが、日光に銀光を輝かし、眩く目に消える、と思ふ間もなく、山の端の樹の茂に鮮明に浮いて、やがて遙なる高峰の森の、艶々と黒

く聳えた、梢のあたりへ、胡粉の綾をたなびかせつ
つ隠れるのである。此方では、言合はせた如く、其
の最初の二羽を何處までも三人で凝視て居た。峰の
森へ隠れた時、思はず、矢野と運轉手が面を合はせ
たのであつた。

「先生、そつくりですな。」

「あゝ。」

立處に、暴風雨の來らむとする瞬間に、金兵衛の
掌を飛び抜けた、紙のお白神の姿を思つた。けれど
も、傍に恍惚とするまで――また續いて銀の翼
を翫すのと、影をはら／＼と降らして、雪衣を田に
掛けるのを視めて居るお李枝を、運轉手に目顔で知
らして、矢野が然り氣なく、

「返照ヶ嶽かね。」

と云ふ、襟は冷たさうであつた。

何故か。

「返照ヶ嶽は後の方です。同じ方角に見えるです
けれど、山が畝つて居りますので、位置は西と東で

す。鷺の入つた

あの山は鉦打です。」

「なたうち。」

「鉦打峠　――　これから、あの峠を越えるので
す。」

お李枝が漸と田の面から目を離して、

「あゝ、好いものを視ました、あたし、嬉しい

わ。」

と云つて然も謝意を表するやうに、矢野の顔に、
睫毛の影を送つたのである？

そゞろに、をぢさんは胸が切つた。恚ばかりの事
に、其の喜びやう　　日比谷の公園を覗いて
さへ、孔雀も鶴も見えるのに。お李枝が經て來た半
生の、ものあはれさが察しられつつも、其の楽しい
言葉を、目頭の滲むまで、渠も嬉しく受けると同時
に、もの越が何となく　――　此が最後で、あきら
めた　　思ひ残す事はない、　――　なごり
の聲のやうに、ふと、うら悲しく、心細く聞取られ

た。

但し憂慮は他にはない。前途に、もしや變つた事が
その瞬間、矢野は、この熊木から和倉
へ引返さうとさへ思つたさうである。

が鉦打とか。峠の森は、霞の煙るばかり陽光に包
まれて、峰の裏透く青空は、輝く波と、白砂の渚を
雲に漾はせる。其處には、梅貝、撫子貝、紫貝。

「乗らう、李枝ちゃん。」

落人の菅笠を中に圍つて、莫蔭の盾が前後に八九
領。蹶に脚絆が馳亂れ、荷と天秤が交叉して、足弱
を扶けて寄つたのは恰も其の時だつたのであると言
ふ。――

「さあ、お乗り。」

大年増の一言に快諾したのは、――前にも言
つた――小料理屋の奥の横の音が、若い工女の、

ずんど切な莫蔭の袖にも通つたからであつた。不思議に、巨池の底、古沼の中から響く、機織姫の稜の音を聞く如く、ゆかしく、なつかしく、しかも、寂しく凄く、矢野は身に沁むとともに悚然とした。

「さあ、遠慮なく。」

かく、いふと、追手のかゝる工女の身を引受けた事になる。一種幽玄怪靈なる梭の音は、どんな絲を織るだらう。

宮前　　ー　　次の村へ向つて、自動車の進轉しつつあるのを視れば、落人の工女は、前面の座席、助手臺に乗つて居る。これは無雑作に、しかし殆どいはれなきとも言ふべき、何等かの不安が胸に響いて、ヒヤリとするまで、膚冷たく感じながらためらはず同乗を引受けた矢野は、だから席につくと、お李枝の情の紫のコオトに肩、頸筋を深々と包まつて、一寸沈んだ面色をした。

臺について、工女を顧みて、引續いて乗る筈のお李枝が涼傘を軽く、足掛けの

「あなた

といつた。

「――優しく謙遜でたて引氣の備つ

た、片門前の娘は、自分とても頼まれた心になつて、
落人を眞中に庇はうとしたらしい、と一所に、鐵漿
口をはじめ數々の魚賣の媽々姉えの立圍んだ目前り、
島田鬚で、小説家にひたと寄るのは、褻捌きにも心
づかひされた所爲であらうも知れない。

が、運轉手の差伸ばした腕で、其の助手席の扉が
パタンと開いたのが同じ時で。

たゞ、笠を傾け、莫蔭を引蔽ひ引蔽ひして居た工
女は、さながら女案山子の身の置きどころ、めな
し鳥の巢を見つけたやうな趣で、箆込むばかりに、
白脛を長くすぼんと入つた。

お李枝の背を手で押す眞似して、一揖するととも
に、扉を閉めつつ運轉手が、

「却つて安氣で好ささうです。」
と言ひすてに、身を翻して乗つて、把手に手を掛
けた。

工女こうぢよが笠かさを脱ぬいだ、前髪まへがみに廣ひろく、頸窪ぼんのくぼに古手拭ふるてぬぐひを引詰ひっつめたまゝ二人ふたりに無言むしんの頭かしらを下さげ、窓まどを覗のぞいて、魚賣さかなうりたちに又禮またれいをした。

「お旦那だんな、難有ありがたうございさあえ。」

「息災そくさいになあや。」

「無事ぶじでえの。」

「さいならえ。」

聲こゑも手足てあしも入亂いりみだれて、數かずの草鞋わらぢの、忽たちまち健すこやかに動うごく中なかを、且押出かつおしださるゝ如ごとく車くるまは躓なはてを呑のんで進すすんだ。

皆みなおなじやうに言ことばが途絶とだえた。魚賣さかなうり 大勢おほぜいの異口いぐち同音どうおんが、しばらくの間あひだ、がや／＼と、形かたちなきものの近くちかく囁ささやくが如ごとく耳みみに附ついて、聲こゑをさまたげたからである。

蛙かはじが高たからかに鳴なくのが聞きこえる。

ごと、ごと、ごと、がた、がた、がた
ふら、ふら、ふら、ふら。

ごと、ごと、ごと、がた、がた、がた
ふら、ふら、ふら、ふら。

村のかゝり口に、板羽目の裏構へ、廣田畝の日の
漲るが如きを吸ひ、紫立つまで、廂に陽炎を満喫し
た、御堂の旗納屋らしいのと石垣まはりの空地に、
まだ學齡ではなさうな幼児が十二三人、――
何處とでかはりはない、棒ちぎれ、抜き刀で騒いで
居たのが、同音にとツと噓した。

「ふら、ふら、ふら、ふら。ふら、ふら、ふら、
ふら。――」

而して跛の足踏をして、拍子を取つて體を揺つた。

ふら、ふら、ふら、ふら

蛙の聲よりも、上つたり、下つたり、忽ちとぼけ
て、跛になつたり！

ごと、ごと、ごと、がた、がた、がた。

いや、何うも 仰せの如く、路のこゝへ
乗つて掛ると齊しく、暴風雨のあとの悪道大泥濘が、
それなり干固つた三角波に揺りしらまされて、彌次
郎兵衛が乗つた駄馬の如く、半町ばかりは、座にも
堪らず、前後左右に振廻された。

「しやうもない。」
さすがに、把手は引据ゑながら運轉手は、思はず
らしく方言を。口走つた。

「李枝ちゃん、かはいゝ坊やたち ー 噉る氣
はないかい。」

「可厭だ、かへりに、もしか、こゝを通つたら、
ふら、ふら、ふら、ふら、と言つてやるわ。」

かへりに、もしか、其の疑問の意味が、ふとまた
儂く聞かれた。

うしろで、哄と又囃す聲。

車は、やゝ急激に角を曲つて、白木の大鳥居の前を通つた。左右一帯の樹立暗く、村道一時に蒼々然として、森嚴の氣が襟を襲つて冷たい。

「お宮は　　ー　　運轉手さん。」

「はあ、白山權現様、わかみや。」

工女は俯向けに面を伏せ、運轉手は血の上つた顔を、あらぬ方に背け、二人は目を見合はせた。が、そのまゝ澄まして前途を視た　　ー　　婆、媽々ともに、血氣な壯漢が八九人、頬被りに、古帽子。笠を交へて、水田の代を搔いて居たのが、自動車の進むにつれて、むく／＼、ぱら／＼と動き出して、道傍へ寄集ると、摺合つて狭く通る、車體のすぐ傍で、鋤、鍬馬鍬を亂脈にどつと動かし、上下、左右に振り、打込んで匆ね、掻きまはして、掬ひ飛ばした。ばしやん、びしやり、泥田の泥を、扉から屋根へ浴びせたのであるから。　　ー　　

中には、引掬つて、打掛けたらしいのさへ見受けらわた。が、故とではあるまい。手勝手で、丁ど打

撞つたものであらう。

しかし、其處は、やがてのぼり坂の取つきで、たとへば一田の其の人影は、縦横の畝、暖かさいうな泥土とともに、上りかゝる車の屋根の上に、しばらく浮いたほどだから、行向つて眞平になる横面から、鍬、馬鍬の泥を受けるのに、一方は、まだ低いけれど、もう崖で、除けも、かはしも出来なかつたは是非に及ばぬ。

勢ひは凄じい。勿ね飛ばす泥しぶきの飛ぶ中に、田螺がまじつて、日に光つた。

通抜けても、窓硝子の片面の泥は、何となく形が其の田螺に似て、數は人に會はせて少いけれども、皆片目づゝ、附着けて、どろんと覗込むやいな感じがする。

「いやだわ。」

と肩を引くやうに、お李枝が矢野に身を寄せた。

「氣に入らないんでせうかね。」

「まづ、氣には入りますまいね。一寸見た處では拙者も少いらしい。」

と、をぢさんは笑つたが、色は白けた。

運轉手が聞き取つて、

「一村落に、平均一所帶ぐらゐるづゝは、あゝいふ連中があるですよ。」

「いや、私は、はじめは其の姉さんを見知つたのが居て、路傍へ寄つて來たのぢやないかと思つて、一寸驚いたよ。」

「濟みましない、旦那様、——奥様。」

「まあ、何をおつしやるの。」
「氣にする事はありません、安心をしておいでなさい。ついでに此方へ入つては何うです。端といつては、ぞんざいだが、其方がづつと空いて居ます。」

「はあ、わしは馴れねえだし、跨げましねえ、恥

かしうてな。」

といふ色澤が、一層沈んで悪いのであつた。

が、其の虐げられた、病身らしい落人の面さへ、
ぱつと冴えるまで、花の明い處へ出た。

牡丹であらう、一樹に二三輪づつ、五株ばかり叢
を合はせて、丈は三尺に餘る。枝たわゝに、尚ほ未
開紅を葉と葉に含んで、根も明いまで薄紅である。
左右に相列つて、蘇枋が又今を盛りに咲いた。一段、
石垣が、坂なぞへに高くなり、廣々とした空地の出
端に、緋の天女の、紫の雲を踏んでゐんだやうに、
思ひも掛けず咲きかゝつて、人を待まうけた風情で
ある。

空地の奥に、緑の森に陰々と包まれて、崩れかゝ
つた屋根ばかり。たゞ、裂め、朽め、中暗く、雨風
に曝れた雨戸の、ひた／＼と閉されて、長く續いた
のが、恰も三千、五千石の大船の船底を横にして、
落葉朽葉の苔を葺いたやうなのが空しく立残つた。

また路を挟み、谷へ突出た崖端の松の姿の、小様なから、一本松とも名づくべきに、鎧も羽衣も掛けないけれども、のび上れば手の届きさうな梢に、紫の藤の房々が扉に届くばかり枝垂れて居た。

「前年の大暴風雨で破壊しました、寺の庭です。」

花は咲きますな。 此の景色を

貝にして、濱へ敷いたのが富來ですよ。」

「まあ、嬉しい。」

「きれいで、ござりますなあ。」

と低い聲で工女も言った。

「牡丹だね。」

「芍薬です。」

と、スツと出る。その芍薬の丘を載せて動くやうに。

この不思議な、自然の繪襖の裡へ入るのが、何故か急に寂しくて、矢野の手は、思はず運轉手臺のシイツを掴んだ、聲をかけて、引返さうと思ふ衝動をうけたのであつた。

廿三人の馬士

「えい、えい、えい、えい、えい。これ、わい等、皆
来てお辭儀をしろえ、旦那が、ご挨拶を下されたん
だ、えい、お辭儀をしろえ。」

大聲で喚きながら、煤色の挫げ帽子の下で、眇を
光らした馬士は「ー 其の癖お辭儀どころではな
い。自動車の扉に附着き、ぬいと立つて、故とらし
く、鳶の尖鼻で、うつむけに掌の吸殻を狙ひつつ、
眞鍮駄六張の煙管に、急いでも吸ひつけず、且つ眇
で、火玉を追ひ、火氣を引いて、ぎろ／＼と車内を
睨んで、又喚いた。」

「えい、えい、えい、えい、えい。これ、わい等、皆
来てお辭儀をしろえ。旦那が、ご挨拶を下されたん
だ。」

「ー 實は、不可であつた。」

いはれなき、いや、いはれがあつても、會釋、挨

搦は、對手の取りやうによつて、惡慫懃も事過ぎて、却つて頭横柄に取られる場合がないではない。

事のこゝに到るまでも、途中兩三度、そんな覺えが、それも、ないではなかつた。一體此の街道たるや、鐵橋でさへ容易く自動車が替らない。長暇の見通しなぞでは、行逢ふ、馬、荷車が少しでも敵の開いた足場を選んで、自動車のために二三町もさきで楫を留め、手綱を絞つて待つのである。

和倉一番の運轉手は、軍隊の出だけれども、おとなしいから、其の都合會釋をして驅抜けた。時とすると、進行をさへ弛くする。乗つてる方でも、お世話様、ご苦労、様と――さて、此だが、いづれ隙費で、面倒に違ひない。それに車力、馬力で、汗水の鹽を舐めて居るのに、此方はのう／＼として、忙しくもないのに道路を引きこそげ、砂煙で飛んで、しかも、ご連中の口を藉りれば、素的な別嬪の新姐をのせて、甘ツたるく伸びた面をして居るのだから、小忌々しく癩に障る。其處で、言合はせたやうに、日向が眩くつて、目は細うしても、

唇は何の方角か、屹と曲るのがお定まりだけれども、中には、好意に其の辭儀をうけ入れて、しかんだ眉の紐を解いて、ニコリとするのも見受けられた。

で、途中いろ／＼に加減をして見たが、すぐ今のこと、路傍の打掛け、匆上げ、泥一揆の時から、善悪によらず、拜倒しと量見を極めて居た處へ、――此の馬士等に打撞つた。

坂はやゝ急勾配に、坂はやゝ急勾配に、崖は深く、谿河の流が響いて、路は高く、ます／＼上つて、次第に山懷に包まれる。

「あれが鉞打。」

森木村の畷から、遠く、遙に、白鷺の行方を眺めた其の峰が、前面を壓した時であつた。

「これから三十九曲と言ふですよ。」

三十九曲――次第のぼりに。しかし、乗掛

け、引廻し、何等の不安なく、車はやゝ仰向きつつ、
細く撓ふやうに進んだが。

「をぢさん、これで十三よ。」

一方が深い崖で、谿河の響きは次第に凄くなりな
がら、打蔽ふ雑樹越に、田も、畠も、長閑にして、
時には海も見はるかされ、片帆も白く雲に浮いて、
紫雲英、鼓草、山吹など、一かたまりづゝ、きれいな
鞠を投げたやうに見えて居たのが、此の時は、巖
の屏風で切つて隠したやうに道の兩方が山になり、
杉、檜、左右に茂つて、暗い影が、黒髪にかぶさる
と、耳元も頬も、尚ほ透過つて、「――十三
――」とかぞへて折つた白い指のさきに、何
故か、この美女の、其の月の今日の運命の怪しい星
が宿つたやうに、ふと怪しく凄かつた。

波形に曲らうとする坂の前途の山の根に、眞四角
な太い木の、新しい小口が、地上三尺ばかりの處、
左側の山の樹の下に横はつて、薄樺色に、ずる／＼
ずると動いて行く。

「ずるりずるりと行くですな、材木の大きな尻尾が――あれに鱗があつたら大變です。はゝゝ。」

坂が曲つて居るから、その角材の動くのは、後部、四五尺に過ぎないが、見越しがつかないので乗切れない。把手を緩くして、運轉手はそんな串戯口をさへきいたのである。

が、加減をしつつ、ブツと近づいて、其の坂口のカアブを轍が廻ると、駭いた。串戯どころではない。畝りはあるが、次の角へ折れるまで随分長い一坂は、同じ馬力の荷車が残らず夥しい材木を積んでづらりと列を造つて居る。二尺角にも餘るのは重量のため大きく一材を積んでゐる。手頃な、それも見事なのは、一臺に十四五本を積累ねて、八臺九臺、十、十一臺、いづれも三間半――四間ぐらゐ丈があつて、殆ど眞新しい。

見た處、玉川の瀬に長筏を組んで流すやうに、馬の背を借りて荷車ぐるみ、さらりと山間に浮棧橋を掛渡した、鬘越に青葉が細流ぐ。かの神通川の船橋

の、鯨かれひのぬしのそれではなくて、あまたの馬うまが列つらなつて、山やまを浮沈うきしづみして渡わたるやうな玄怪げんくわいなる光景くわうけいを呈ていして居ゐた。

揃そろつて、赤味あかみ勝がちな樺かばなす材木ざいもくであるから、山間やまあいもおなじ色いろを籠こめて、ぼつと明あかるく、落葉おちば時ときでない上うへに、行人かうじんも稀まれな故せぬか、道みちも掃はいたやうで、赤土あかつちに埃ほこりも立たたないで、材木ざいもくの香かが、芬ぶんと車くるまを襲おそふ。景色けしきにも、其その香かにも、はじめは親したしさ、可懐なつかしさを味あぢはつたほどだつたが。――

谷川たにがはは響ひびき、松風まつかぜは聞きこえたのに、これほどの馬うまの鱗爪ひづめと、輪わの轟とどろきのしなかつたのは、エンジンの音おとが相殺あひなしたものであらう。

「可恐こはいわ、あたし、何どうしませう、こんなに馬うまが。」

お李枝りえは一目ひとめ見みると、もう其その胸むねのふくらみを殺そがれて居ゐた。江戸子えどこのいや、東京とうきょうの女性ぢよせい娘むすめといはう。――娘むすめは、悪わるい癖くせで馬うまを

嫌きらふ 憎にくむのではない、其その顔かほの、のほりと大おほきいのに、壓あつぱく迫おそれされて恐怖おそれをなすらしい、
惟おもふに孔くじやく雀やくの尾をを擴ひろげるより、鶴つるを折をる、血ちのながれによると見みえる。

「大丈夫だいぢやうぶだよ。あの顔かほが打ぶ衝つつたつて。此方こつちは金きんじ城やうてつ鐵壁てきです。――鐵てつの船ふねに乗のつててごらん、鱈たかや鮫さめが喰くひついたつて澄すましたものさ。」

尤もつとも、矢野やのは左ひだりに居あたから、馬うまの面つらの、赤あかく、黒くろく、二三度ど扉ドアに摺すれ／＼に成なつたのは、この方ほうではなかつた。

そのうちに、五臺だいい六臺だいいと抽ぬいた。
が、それさへ容よう易いな事ことではない。

馬士まごたちは、行儀ぎやうぎよく左側ひだりがはによつて、其その馬隊ばたいの綱つなをしめ、材木ざいもくの丈たけを餘あまして、少すこしづゝ車くるまと車くるまとの間隔かんかくは取とつて居あるもの、みり／＼と重荷おもにを積つんで、路みちは狭せまし樹きの根ねは堅かたい。
上うへへ向むくと、脚あしが地ぢを蹴けつて鱈爪ひづめが空轉からまはりを戛かつ々と鳴な

らすのであるから、其の都度、づらり、ぎらりと馬と車の列が W に亂れて道を塞ぐ。其の間を、この場合では、目に餘る。ハドソンが大きく、然も細く、辛うじて波線を絞つて抜けたのである。

抜けはするが、馬の滞つた時は、幾度も幾度も、運轉を留めなければならなかつた。

さて、後も前も、馬と車と材木に遮られ、八陣を崩した稻妻形の真中に、今は息苦しいばかりになつた。

と、
爾時だつた。運轉手が扉を開けた。半身を乗出す

「前——まだ幾臺ありますか。」

其の乗出したのと、殆ど鼻の打衝つたのは、扁つたい日焼面に、茜木綿、向顛卷を押つ立てた、中でも年の若い馬士だつたが、

「へ、へ、ふ、ふ。」

と唯鼻で刻んで笑つた。

瞭然として、敵意がある。

「引返さう、思ひ切つて、相良くん。」

「そ、そ、それが何うも。バツクで、

逆に四五臺を抜けるのは至難です。それに、此の上
りにかゝつて居ります。無理にあとへ抜けた處で、
車を向けかへる處がないですから。――何でも
突切るほかありません。一寸、さきの様子を見て來
ます。」

投げるやうに運轉手が下りた時、ガタリと膝が浮
いて、お季枝の手が密と矢野に絶つた。

不快な汗の出る分秒がやゝ續いた。

運轉手なきモオタアは障泥を煽つて、間斷なく鳴
り響いた。

馬は、湯のむれたやうな凄じい鼻嵐を、ふツふと
彼方此方に吹立てる。間近な馬士は、皆揃つて、其
の轡頭を押へながら、片手で耳を塞ぎ面を擧めた。

「―― 此の場合、皮肉などを言ふべきではないけれども、片耳をさへ塞げば、渠等には音を遮ることが出来るらしい。」

向うの坂口を、翻る如くに出て、運轉手が取つて返した。

ドンと横倒しのやうに乗つて、腰を落とすと、帽子のまゝ額の汗を、拳で横拭して、ぐつと又乗出し、逆に後を見たが、

「七車か―― 先生、以上二十三車あります
が。」

「無論、停まらうよ。一度残らず前へ出して置いて、あとへ引返すとも、時間を待つて富來へ行くとも、とに角それからの思慮にするんだね。」

「然う願ひます―― 濟みません。」
「姉さん、氣の毒ですが。」

「はい、なんも。」
と一倍消入り干うな聲があはれに、また心細い。

「さあ、お前たち、少しくつろぎをつけてくれ、一寸戻すぞ。」

と山の右側へ、成るたけ開かうとして、車がじり／＼と二三間動いた時、扉にひつたりと近かつたのが、件の眇だつたので。

「お邪魔をします。」

同時に叫び出した次第なのである。

「えい、えい、えい、えい。これ、わい等、旦那が、ご挨拶なさるんだ。皆來てお辭儀をしねえか、よう。」

早く言いひかりをつけるつもりか、自動車のいま停つた間、馬士等は一步も馬を曳かなかつた。

あの、順に前面をずる／＼曳摺る
も、おなじ場合におなじ形した、坂口の材木の後部
は尾を切つたやうに、それも留まつた。

のそ／＼、どや／＼どやと、集つたのが、忽ち十
人に餘つたらう。

運轉手が向直つた。

「もう、澤山ぢやあないか。」

「うんや、然うでねえ。おわども一同に下さつた
挨拶だで、皆が順にお辭儀をしねえでは相濟まねえ
だ。」

「馬鹿な事を、此奴等。」

「穩に——」

と、制する片手に、お李枝の手が熱いのである。

「此の上、何を挨拶をしようと思ふんだい。」

「皆、集つてから更めてやらかすでな。待たつせ

え。」

「待てるものか。」

餘りの事に堪へ兼ねたか。

「おい。俺は軍人だぞ。」

「はあ、おつしやるの。へ、へ、鐵砲も劍も持たねえ軍人様が何いうしただい。」

「先生、ピストルはお持ちにならん！」
と嚇となつた。

「つい、探偵小説をかゝないもんだから。
と、うつかり言つて、自分で呆れて、ハツと見ると、首低れたお李枝の顔は、耳朶まで、いま火のやうな、それにさへ且まさる。大人氣なさと自家虚飾と、不用意の極りの悪さ、恥を覺えて、面がほてつた。

がつくり矢望したやうに、唯、確と把手に手を掛けて、それともと、尚ほ背後へ乗出して透し見たが、あとの車は、道を横に一臺ごとの堆い材木は、直斜に柵を掛けて壘を築く。

人の身ならば、すり抜けても出られよう。自動車

の進退は、六尺といへども極まつた。

「いうへつへつ、へつ。」

唐突に、眇が茶色の唇を擴げて、高笑ひをして、

「其の顔色はよ。何も案じごとねえだ。おめでた
あい祝言のな、婚禮の挨拶だでや。うへつ、へつ、
へつ、うへつ、へつ、へつ。」

揺り笑ひを、酒焼の胸と胴腹から揉上げると、何
度目か、掌にころがしてた火玉をふつと吹飛ばして、
陰氣に上げた毛だらけの手で、のろ／＼と向うを呼
んだ。

「えい、早く來う、早く來う。」

恰も其の力アブへ、蟹のやうな面を出した茜顏
卷。――此の若い奴は、運轉手が馬の數を算へ
に驅出した時、すぐあとに續いて飛んだ。――が、
すた／＼と返して來た。

馬士は、其のあとへ、もく／＼と二人三人づゝ巖角を湧いて出る。

茜 願卷は、引返すや否や、扉に併行した其の持分の車の、高い材木の上へ飛上ると、樹は被さつたが、一天晴れた、きやりの音頭でもとりさうに、青空の左右を見廻し、硝子を舐めるほどにべろりと舌を吐いた。

「へい、鼻前へ龍宮が顯はれただ。中に美しい乙姫様がござらつしやる。一つ雲の上から覗くだかな。」

直ちに材木を足場に取り、泥草鞋で宙を跨いで、自動車の屋蓋へ、崖の石の崩るゝ如く、どしんと乗つた。

此の上は、少しでも轍を動かすと同時に、馬士を一人振落して不具者にする覺悟がなければならぬ。――残つた敵の其の時の兇暴を思へ。

自動車は、これで完全に封鎖された。暗礁の窮地に据えられたのである。

「よう、へい、些とんべい、甘い、うまい、堪えられねえ香がするぞ。」

と、屋蓋で三尺を解いた曝出の腹這ひで、ぴたりと附着き、お李枝の座の硝子へ、倒に眼を並べて又舌を吐いた。大蛇が板一枚とぐるを巻いて、且つ鎌首が覗いたやうに、お李枝の頬と唇も颯と蒼白い。

——白濱橋のあらしの時、金兵衛が屋根の上を越す浪に、鯢の鰭を見たのさへ、殆ど人をして狂せしめむとした。馬士の腹が島田の上を壓したのである。

矢野の手が、やゝ堅く、運轉手の肩を引くと、押掛つて、數語を其の耳に囁いた。

「は、は、は。」
尚ほ數語を注込んだ。

「は、は、——承知しました。」

ドンと下りて、ネクタイを正しうしたが、

「親方。」

と呼んだ、件の眇を、六七間傍へ導いた。其の肩を組んで揃つて行くのに、むら／＼と馬士が續いて行く。

「心配をしないで、心配をしないで。」

お李彼の手は、兩手は犇と矢野の膝にわな／＼と震へて居る。

ぐいと、向返ると、眇がのろく頭を左右にふりつつ、然も故とらしく、のそり／＼と戻つて來た。が、何等の條件か、談判は、不調だ。

唯、思ふまあらせず、眇の手は扉をドンと開くや否や、胸を圍ひ、膝を緊めた、矢野の不意を打つて、肩に半ば外して居たコートを鷲掴みに引寄せた。

「何をする。」

將の鎧の紫末濃を分捕つた。戦ひは既に決したのである。

「へん、ー 早い處が身ぐるみ脱ぐ財布も時計も身ぐるみ脱ぐー と言ふでねえけ。」

「うむ、きれいな酒張と脱ぐよ。素裸になつて、空氣で行水をしてやらう。汚え手を出すな。」

「處が脱がせねえ。身ぐるみ脱いで貰はねえー 此のコオトは、へい樹の根へ敷いて、お座敷を拵えるだ、龍宮の姉様の祝言に、いくら此方人等、對子が馬士でも、地板でもあるめえでねえケ、よう。」

「さあ、わい等、ご婚禮の座敷だ、二十三人が婿様だ、儀式はゆつくり、夜は長いぞ。あとさきの戸緊をよくしろや、えいか。ー 和倉口と、富來口と碓り材木で木戸を鎖せ。人が來めえもんでもねえが、馬おいらが起つて動かねえと吐けい。夜があけるまでも街道ご免だ。軍師でも眞田でもこんな

要害は持つめえが。 えへッへッへッ、お
れはこれ、土蜘蛛甚太夫だ。 ー

眇は、狂せりや、傍若無人に名告をあげた。

「がきの時から、小びねくれた仰々しい名はある
だが、何事も仕出来さねえ。藁と水ばかり掻食つて、
馬ほどのばりもこかねえで、山裾の尻の穴へ葬られ
べいと、いうんざりしたさに、天道様は無駄ばかり
はさつしやらねえ。うみつけた蛆蟲も見通しで、眞
晝間、こんな、えれえ、へい、初ものを下さるだ、
畜類め、寒玉子、うへッへッへッ。 ー
と又胴ぶるひをして黄色に笑ふ。

肩を並べた運轉手は、立ちかはつて、其の反対の、
右側から、扉に突込んだ顔の、眉も口も引つらせて
居たが、息を切つて、

「先生、言をつくして、くれノ、も説いたです。
馬士たちに與へたとも云ふまい。馬と ー 馬と
賭博を打つて、裸にされたとも、狐にばかされたと

も言つて、決して皆衆に責任は持たせない、とまで言つても肯きません。で、先生が最後の條件として提出されました、最後となれば 其の最後となれば、
ご婦人の衣類、上着
帯、
」

お李枝は横さまに背けた頬を、矢野の肩にくひつくばかり、手で背を揺ぶつた。揺られた矢野の骨々は砕けよう。

「で、で、最後のものさへ、一つ許さるれば、
とまで話した、ですが、頑として肯かんの
です。」

「然うだ。おれたちは追剥や泥坊ではねえ、しら生頂面な馬士だ。たゞうまいものをお振舞に預るだよ。なにが、些と、呂呂呂でも山蛭と思へさ。肉を啖へばとつて、蜂蟻ほどの毒はねえ。蚤、虱、たかゞ南京蟲だ。そのかはり可厭だと吐いても、血を見なれば納まらねえぞ。わいら、なぐり合の用意をした

か。花嫁のお寢間は何うだ。」

「甚親方。」

と一人、尖つた口を出した。

「勝手な處へ——早くしろてば。」

カアセエジの市が、羅馬軍の略奪、殘虐に逢つた時、かばかりの慘毒は、よも、なかつたらう。

目の届く山際の窪みへ、引かなぐられた紫のコオトは、生けるまゝ膚を解いて、お李枝の姿を、碧血に敷いたに齊しい。

上の枝の鬼づたは、青い鱗の簾である。

「積荷を解いて、丸太などを持つたです。や、つる嘴、シヤベル。平常は、おとなしいもんなんですが、狂ひ出すと、暴れ馬同然で、底止る處を知らんのです。」

と運轉手は、拳を握つて、ぶる／＼と震へた。ハ—

ツと息^{いき}して、扉下^{ドアした}の足臺^{あしだい}へ、額^{ぬか}づくとともに、

「先生^{せんせい}、相良^{さがら}には母親^{おふくろ}が一人^{ひとり}あります。自動車^{じどうしゃ}を買^かつたばかりです。お嬢様^{ぢやうさま}、許^{ゆる}して下さい

い。許^{ゆる}して下さい。輕蔑^{けいべつ}して下さい。ーこ、この頭^{あたま}を土足^{どそく}で踏^ふみ下^{くだ}さい。そして能登^{ののと}ものの、この唯一^{ただひとり}だけを侮辱^{ぶじよく}して、他^{ほか}は許^{ゆる}して下さい。」

と涙^{なみだ}は頬^ほを傳^{つた}つて流^{なが}れて、脱^ぬいで持^もつた帽子^{ぼうし}を千斷^{きぎ}れるばかり掴^{つか}みしめたのを、たゞきつけて、其^その靴^{くつ}で踏^ふみじと、片腕^{かたうで}を伸^のばして、工女^{こうぢやう}の莫^も薩^{さつ}を確^{しか}と抱^だいた。

「姉^{ねえ}さんも許^{ゆる}してくれ。一目^{ひとめ}見て、生^{うま}れてはじめて戀^{こひ}を思^{おも}つた。こ、この、姉^{ねえ}

さんさへ。」

と、いふと齊^{ひと}しく、足^{あし}もひよろ／＼と、崖^{がけした}下^{した}へ寄^よつたが、汚^{きたな}い半^{ハンケチ}で目^めを蔽^{おほ}つて、電柱^{でんちゆう}の根^ねへ仰^{あをむ}向けに倒^{たふ}れた。

あゝ、電信がある。一弾指して音信は、全國に通ずるのに、通ずるのに。

「そりや此の娘も引搦め。」

「あゝれ。」

「何だ、ワリや。」

「姉えは、何處のもんだ。」

と、馬士三人が蔽はれかゝつたが、

「富來の在か。ふうん、同國だな。」

「おまけに、山家だ。苞づつみの自然薯とけつか

る。」

「自然薯でも、同國では、あと腹が病めべい。」

「そんなものは措けやい。」

と、眇の伸上つた目が光つて、

「村方の娘ツ子ぢや、げえもねえ。」

「然んだ、然んだ。精進ものは、ご祝儀には向か

ねえだ。」

「そこに、うまいのがござらつしやるで。」

「刺身にも、煮肴にも、鹽にもよ、てん／＼が
好きすぎだ。」

「堪らねえ。」

「鮪の中膏どころだだよ。」

「此の下郎ら。うへツへツ。そんな魚で、此方人
等が咽喉を鳴らすと思はれては、其處な野郎に恥か
しいだ。おらは山へ来た人魚と思ふ。此の初ものさ、
一嚙、一口で、三百年づゝ生き延びるだ。」

「おらは、何でも、乙姫様の白肉だよ。」
と屋根の舌が、また黒く硝子を舐める。

「お李枝さん。」
矢野はあらたまつて、上ずつた聲ながら、血に濡
れたやうに言つた。

「観音様だと思はないか。普賢菩薩だと思はない
か。煩惱の衆生を救つてやると思はないか。お李枝
さん、待合の女中も、酒場の給仕も、藝妓も、時を
刻み、日を延べるばかりで、或意味で言へば、今の

此の場合と、餘り違はないものであらうも知れない。長煩か、半日の大病で、熱のひどい時、身體が火の車で宙に廻ると思つて、夢の間の地獄を忍ばないか。名醫は私の名で何うにか呼べる。東京からでも呼べようと思ふ。心氣く身體、とともに、治れば何でもない。

而して、お互に、活きようではないか。たとひ、どんな事があらうとも、此の私は、いゝか矢野は、斷じて李枝ちゃんの身が、爪のあとほども、亂れた、汚れたとは、寸分も思はないことを誓ふ。――誓、私の名は、これがために前生から撰ばれたのだと信ずるばかりだ。

敵と戦つて傷ついた名將として、跪いて、其の傷を吸はう。でなければ珠玉螺鈿の厨子にかしづいて、天人、神女として禮拜をしよう。――李枝ちゃん、目を開けて一度、其の、いつはりでない私の顔を見ておくれ。」

と胸に抱取つて、うつむき視る顔は、白蟻に似て、

凍り澄んで、堅く封じた唇の奥に、皓齒が霜の薬のやうに震へて迷に響いた。

「何だ、然うでなくつても、此のくらゐな事は。下等な支那料理を食ふつもりは女はいくらでも、そこらに居る。」

たゞ目を眠つたまゝ、矢野の襟を、折れよ、「其の皿數だけ食つて、あたれば反吐を吐くか、胃散を。」と確と緊めるのを振つて、振つて、鬢のおくれ毛は、つと通つた鼻の兩方にもつれ亂れた、息の下で、

「馬も、馬士も、二十」

皓齒の薬の一絲の聲に、轟然として胸に巨弾をうけ、眞暗になつた、矢野の目には、山も、崖も、忽ち石炭の丘を積んで、めら／＼と青い炎が立つた。

二十に餘る馬士の面は、一人づつ、赤き、黒き、灰色の、また蒼い、馬の顔に變じ、其の目は一個づつ

パチ／＼と火の粉を放つて群り射る。その時に、馬の面は鬣を被つた人間の顔となつた。尾は、脚は、馬士の脚とともにすく／＼と迫つて、朱の氷柱を縦に貫き、鐵の棒の柵をならべ、耳の數は、青竹の鋸に似て切立つた。阿鼻、焦熱、餓鬼、畜生。頭を立てる鼻息は皆蒸れて、硫黄を噴いた。

ぐわう、ぐわう、ぐわう、炎の輪は旋風の如く鳴つて、黒煙のなかに、消え残るお李枝の頸肩、頬、咽喉、指さきの白さに渦巻きかゝる。

「水」

「うむ、水。」

「水一くち、一くち。」

「うむ、尤もだ。」

と熱鐵の涙を絞つた。

土下座して、乞求むれば、這個勝ほこつた敵は、十町、五町を走り、峰に求め、谷に汲んでも、一杯の清水をもたらず事を惜むまい。

けれども、綽々として、これを三々九度の杯と吐
き、ほくそ笑をするだらう。

無念である。

矢野は、なき母の乳を思ひつつ胸　　いや、
胸に齒の届かぬ、片腕を、　　左の腕を嚙んで
裂かうとした。

筆を取る右の手を庇はうとしたのである。

あゝ、わが知る、兵庫岡本には谷崎潤一郎氏。

　　もとより東京に、水上、里見、久保田の諸
家、もし此處にあらば、其の才能と、機略と、膽勇
を以て、一呼吸して、此の危地を脱しよう。其の他、
友一人、誰とて。　　また異つた意味では、
第一此の人の母、花柳數枝、わが妻の澄とてもお李
枝を全うし得ようと信ずる。　　甚しきは、反
對に地を轉ずとせよ。彼奴輩、馬士と雖も、其の愛
人を救ひ得ざらんや。

たゞ、われ一人、手段を誤り、前後を忘じ、舉措

を失した。

かくて、群狼の毒牙、馬妖の亂脚に、お李枝の白身の四肢を擲つて、其の五體の狼籍委泥さるるを、面のあたり見ねばならない。目を潰せ、胸を裂け、――それで濟むか――腕が何だ！

いま、われお李枝を救ひ得ずして、文章が何だ。小説が何だ。作者が何だ。

「この、しみつたれ。」
自ら罵ると齊しく、ガキツと右の手の手首を噛んで、疵口を溢るゝ血を、血の脈よりも細く弱い、お李枝の口にひたと當てた。

「水。」

「あ、あ。」

「なまぬるくはあるまい、水。」

こんな

事とは知らないから、睡いおもひをさせて、姫沼綾羽を聞かせたり
那須與一の弓は什うした

――矢野の矢も抜けて居る。僧正遍照のむだ口

をたゝいて、恥入つた。――骨まで冷汗を流して居るから、血は氷より冷たいぞ。」

「あ、あ、あ、おいしい、」

ごく／＼と雪の咽喉を銀線の如くゆれつつ通る。

「あ、あ、おいしい。」

細りと睫毛を開けたが、熟と視て、

「血ね。」

「胸が悪いか。」

「いゝえ。」

と、消えむとする燈火の風に蘇つたやうに唇を動かしたが、弛んだ帯に摺れかゝつた懐中かゞみを、撓ゆげに取りつつ、その懐中紙に血を拭ふと、襦袢の袖口で、矢野の疵をちつと押へ、

「馬士に遣るなら、この血を顔中に塗るんだけれど、をぢさんに見せるんだから――あたしも、見をさめ。」

と、いつて、かゞみを蓋した。――お李枝は
並んでは居ない。腰を空に、床に殆ど膝をついて、
矢野に、背を抱かれて居たのである。両手で掻分け
るやうに肩を振つて、雪を欺く襟を寛げ、朱鷺色の
扱帯を、其の手でする／＼と手繰出す。

矢野は新しく戦慄した。

瞬間

――

支那の昔の事だが、虎に啖はれた死骸には、いま
だ嘗て衣帯の残り留まるものはない、靴さへない。
皆殆ど裸であるといふ。此の事實は怪し

まれた。が、月色に山岨を傳ふ樵夫が、巖にかくれ
て、虎の犠牲となるものを視た。亂國に亡びた落人
か、淡粧の女子。其の咽喉を噛まれ、手足、仰向け
に弓のやうに反り撓ふ。虎は鋭くは齒を入れず、其
の嶮に曳いて行くらしい。

婦は脛を震はして、はじめ靴を脱した。耳その他
飾りの珠玉を、光る肉片の如く筆り散らすと、其の
手を亂點して襟を開き、帯を解き、裳を裂き、襪を
放つて、次第に縷なき、たゞ細長き雪となつて、鬱

林に隠れたと言ふのである。

稻妻の如く、目を射て、其の光景が閃いた。

お李枝は、苦惱、悶亂の極、おのが身を皓體に露呈して、猛虎の牙に投げるのであらうか。

其の扱帯を、

「首をしめて、これで殺してね。」

と蒼白な笑顔を見せる、と蹴出しも褻も膝に崩れた。

「然うか、さうして、私も死ぬのか——よ

し、」
と、矢野は深々と頷いた。

「冥途へは連れ立つて行く、が、懺悔をする。李枝ちゃんを好きなをぢさんは、唯二十人以上でないばかりか、其奴等馬士の一人と同じやうな卑劣なものだつたかも知れん。が、構はないか。」

「構ひません。」

顔をあげて、又見まもつて、

「あたしも好きでした。」

「やあ、高い處だけに長いやつを引いた、おらが

籤が一番だい。」

と茜 願卷が、倒に又覗く。

眇の目に目が累り腕に腕が争つて、扉に入つた、

翳した洋杖で一打だけ打拂つた、が、諸手組合はず、

打仰向いたお李枝の首へ一捲きして、

「目を開けて、顔を視て。」

此時をたゞ氣高く美しくするため、此の清い目

に生れたか。ニいた目は眦かけて新月の眞珠を湛へ、

引纏うた扱帯は夜の虹を薄く黒髪に靡かした。

白山の使者

途端に立つた。シイツの隔て唯一重にしては、活きて見るに忍びなかつたらう。衝と立ち上る、落人の女工の莫蔭が動く、と思ふと、手にした菅笠の端が、拍子に鋭くあがつて、俯向けに扉を覗く茜 願卷の目の球をぐいと突いた。

「きやつ。」

本能的に両手でおさへるはずみに、這つて、もんどり打つて、どしんと地に墮ちた。

「白山のお使者。」

と莞爾すると、落ちた馬士とは反対の扉を、頸細く、肩軽く、抜け状に、指で衝くと、又一人の目を突いて、ワツと退らせ、驚いて一人つかみかゝる目を、又突いた。

尚一人に抱かせて、するりと莫蔭を投げた姿を視よ。紗綾形の雪の羽二重に、紅燃ゆる袴をくぐんで、

車の輪を傳ふばかり、ひらりと材木の上へ高々と立つが迅いか、押掛つた一人の横面を、一聯、六尺の竝高の珠數で拂ひのけ、颯と投げた十尺に餘る勢ひは、狙つて又一人に目潰しをくはした。

馬士どもは、昏迷、惑亂。

しかし多數である。

得ものを取つて、取つて、迫つて、積おろし荷には馴れた、其の車へ、四五人で込上るのを、蹈んだ材木を欄干にして、一桁、馬の浮橋をすら／＼と前へ渡り、濡れ縁の端などを築山へ移る安易さで、庭下駄で突掛けたさうに、馬の尾を跨いで鞍に飛んだ。

これは黒馬、一嘶きした。が、鞍を平にして静まつた。

「白山のお使者です。」

隙間あらせず、詰めかゝる馬側の馬士の一群を、頭から、額から、頬から、耳から。

「痛え。」

「お疼。」

「あ、痛、疼、痛。」

鼻を噛み、唇を齧し、咽喉、頤を舐るものを、知らずば聞かせよう。たゞ苛高の珠數と思ふが、――狼の牙、貂の頤、鷲の爪。悍邪毒惡、百年凝石の封を解いて、今こそ猛威を顯はしたれ。翼も、牙も、爪も、本身全相の影が添つて、馬士等を、噛伏せ、駢散らす。勢ひは、防ぐのではなく、崇るのである。

「女神様を知らないか。」

―― 眇は、ぢだんだを踏んだ。彼奴は修羅の戦ひより、速かに名珠の分捕を急いだ。

「其方はき其方だ、確りやれ。」

三たび扉を襲はうとした時である。渠等の目は、渠等の目は、馬の背に、一文字に寝て、鞍を抱いて腹這ひになつた奇異なる艶媚の態に聳動した、と同

時に、馬は根こそぎに、四足を折つて横に倒れた。

「やあ、おらが青馬。」

と、眇は横飛びに飛んで寄つた。

その鬣、寧ろ耳の間から、白鷺の羽の夕日に染まつて翔けるやうに、ひらりと下りると、車の間の空地にも立留まらず、直ちに次の車に飛び乗つて、材木を爪さき移りに、更に第二の馬に乗つて、背の上、つつと立つた。

唯、見る間もあらせず、鞍を抱くと抱迂りに、袖が、馬の耳に掛り、目を蔽ふと、見る間に、莞爾すると、其の馬が又倒れた。

馬が轉べば、一町が騒ぐ、と諺にさへ言ふ

其の一頭を起すにさへ馬士の全部を要しよう。

狼狽を見よ、周章を思へ。

又倒した。

續けて七頭といふものを、右と左に、屏風に倒す
ー ドドン、ドドン、火薬の岩を裂く幽なる寂
しき音のみ、馬は古夜具の抜綿の如く、たあいなく
寝て、聲も立てぬ。

其の第八頭目の背の上に、すつくと顯はれた時は、
さすがに髻は刎ね、黒髪は肩に捌け、腰に亂れた。
ー 汗ばむ額に、涼を呼んで、片手脱ぎに胸を
開いて、片袖を打脱ぐ肌は、鱗もなしに、緋縮緬。

白馬に颯と翻つて、振上げた珠数は、中空に、高
く唯一棍の、烏金の鞭に硬直して光つたのである。

「白山様のお使者です。」

「魔ものだ。」

「魔ものだ。」

「魔ものだ。」

「白山のお使者です。」

「馬は助けて。」

「馬は助けて。」

「馬は助けてやー。」

「馬は助けてやーい。」

「姫神様を知らないか。」

て、
馬を倒さむとする毎に、
襲撃に隙ありし時よりし
續いた光景の描寫であ
る。

「魔ものだ。」

「魔ものだ。」

「魔ものだ。」

「馬は助けて。」

「馬は助けて。」

「馬は助けて、やーい。」

「馬は助けて、やー。」

目の下の岨道を、二谷切つて、手庇さがりに見透
さるゝ、棚田縁を、運轉手相良彌之助に負はれ、娜々
と脊に靡いて、和倉の方へ疾く馳る、お李枝の姿の、
亂れた髪を其のまゝに、しつとりと柳で包んだ、遠
見の、袖、肩、帯も扱帯も解け落ちて、縮めた膝に
吹き添ふ風に、山藤の花、芍薬の影は淡く映しなが
ら、搔垂るゝ裳に守られつつ、爪先の白さの漏れぬ
をさへ、嬉しいものに、巖の狭間、木根越に見遣り
つつ、矢野は圍を脱けて、手の傷をいたみながら、
山蔭に憩つて居た。

すぐ、其處にも、一頭の馬が腹に波を立てて倒れ
て居る。

「――矢野さん、――矢野さん――」

朗かに、駒鳥の唄ふやうな山の端の聲を振仰ぐと、
切立の崖の茂りを、ちら／＼と樹傳ひ来て、大樹の
杉の梢とばかり高い枝に、袴の紅緑の葉越に白衣を
視た。

思はず立つて深禮を加へつつ、

「――姫沼――姫沼、綾羽――呉羽

さんのお身内――お身内ですか。」

「お師匠さんはあらためて――またお目にかゝります」

といふのさへ、派手な唄の調子で、

「――長太居るか、

――長太居るか――

ほゝゝ。」

と聲が葉を染めた。

「――此の唄をお聞きなさいな――

――長太居るか――

私は曲馬の娘です。

白山様のお使者です。

姫神様を知らないか。

魔ものだ、魔ものだ。

魔ものだ。

馬は助けて。

馬は助けて。

馬は助けて、やーい、

馬は助けて、やーの。

「ー 唄は何う、唄は何うよ。」

と又笑つた。

「神力、靈驗に恭禮します。」

と其の杉の根に、手をついて跪いた。が、疲れに
よるめきながら、おなじ木の根に腰を落した。

「ほゝゝ、唄は。」

かばかりの女を自在に使ふ、其の言ふ綾羽の、隠
れたる威力を讃嘆しながら、

「唄はまづい。」

と、いつた時、うつかり持った洋杖の、いつか折
れて、柄のもと少々残った象牙の、血だらけなのを
軽く投げた。

其その、眞ま夜よ中なかである。

三さん階がいの段だんの上うへあたりで、はじめ、

―― 長ちやうた太た居をるか

―― 長ちやうた太た居をるか

また廊らうか下ちか近く、障しやうじ子しの外そとから、

―― 長ちやうた太た居をるか

―― 長ちやうた太た居をるか

海うみの棧さん橋はし際ぎは、堀へいの外そとから、

―― 長ちやうた太た居をるか

―― 長ちやうた太た居をるか

此この時ときの座ざ敷しき 一 一 閨ねやの樣やう子すは、讀よまるゝ
方かた々々の想さう像ざうにまかせたい。

海うみの音おとと、山やま風かぜと、森もりの梟ふくろが聲こゑを交まじへて、

長太居るか、

長太居るか、

居るは何ぢや。

白山権現、

おん白神の、

姫神様の、

おつげを聞けば　――

お李枝、お李枝、

お李枝のきみは、

あなたへやらぬ、

こなたへ渡せ。

山からなりと、

海からなりと。

白い馬には朱の鞍おいて、

青い船には白い帆かけて、

二挺灯して雪洞持つて、

一把燃して松明擧げて、

むかひに参りさふらふ。

むかひに参りさふらふ。

いかに作家、冷静に唄の批判を爲し得るか。

長太ちやうた居をるか、

長太ちやうた居をるか、

居をるは何なんぢや

白山はくさん権現こんげん、おんしらかみ白神しろかみの、

姫神ひめがみ様さまの、

【完】